

---

# IS～女の子になった幼馴染

ハルナガレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS→女の子になつた幼馴染

### 【Zコード】

Z7555V

### 【作者名】

ハルナガレ

### 【あらすじ】

まあタイトルでわかると思いますが、この作品は一夏に男の幼馴染がいてその幼馴染が女の子になつてIS学園に入学する話です。TS物です。一応一夏とオリキヤラとの絡みがメインストーリーになる予定です。恋愛まで発展するかは今の所考えてはないです。馴文ですがよろしかつたら見てってください。

## 遅れて現れた幼馴染

「あー、久しぶりだな我が家も」  
IS学園は今日は休みなので、俺は久しぶりに家に帰る事にした。理由は単純にそろそろ季節が夏に近づいたため、夏服を取りに来たのと定期的に掃除しないと家が埃まみれになるからだ。ちなみに今回家に帰る事は誰にも言つてない。何故なら

「誰かに教えたら絶対皆付いてきそうだもんなあ」

篝達に言えば絶対一緒に行くと騒ぐのは間違いない。別に篝達の事が嫌いというわけではないが、家の掃除と替えの服を用意した後弾や和馬達に会いに行こうと思つてゐたため、皆には黙つとく事にした。理由は

「たまには男だけで騒ぎたいからな…」

IS学園に入学してから周りは女性しかいない。ハーレムと思う奴も多いが、その状況がずっと続くとやはり疲れてくる。篝達が悪いというわけでなく、一緒にいると楽しいのだが性差つてのはやはり大きい。男女の違いというだけでやはりどこか心の中で相手に対する遠慮みたいなものが産まれてくる。同性の遠慮のない会話つてのが出来ないので。

「さてと、弾達を待たせるのも悪いから早く終わらせるか」

居間、廊下、台所、千冬姉の部屋の順に掃除し、最後に俺の部屋を掃除する。まあ先月掃除した時から一回も家に帰つて無いため、たいして汚れてないからすぐに終わつていく。掃除を済ませ押入れから服を引っ張り出し、持つていく服を選んだ。

「よし、こんなもんだろ。弾達と遊んだらまた家帰つて荷物取りに行けばいいか」

荷物もまとめたし部屋を出ようとしたら、俺は机に置いてある写真立てが見えた。中学一年の春に撮った写真で、そこには俺と弾と鈴と……

「そりゃいえ、あいつ元気にしてるかな…」

二年前の写真には、6歳の時から俺とずっと一緒に遊んでいた、男の幼馴染が写っていた。

「ちょっと一夏！今日は黙つてどこに行つてたのよ！」

久しぶりに弾達と男同士でバカ騒ぎしてIIS学園に帰つてきたら、アリーナで自主練を終えた篠、鈴、セシリアの三人と出会つた。

「そうですねよ一夏さん！黙つて学園外に出るなんて！買い物とかでしたら私を誘つてくれてもいいですのに！」

「一夏、黙つてどこ行つてたんだ？」

俺が黙つて外出した事に不満な三人。おそらくここにいないシャルルやラウラも同じだろうな

「いやちょっと家から服取りに行つたんだよ。それに久しぶりに弾達と会いたくなつたしな」

「弾と？なら私も誘いなさいよ。私も久しぶりにあのバカの顔見たいし」

「悪い鈴。ちょっと男同士だけで話したい事もあつてな」

「なによそれ」とぶつぶつ言つ鈴。

「弾つてどちらさまですか？」

「確か一夏と鈴の中学生の頃の友達だったか？」

「そう。IIS学園入学してからあまり会つてないからな。今日は旧友を温めてたつて訳」

そういうと三人とも納得したようで、俺を非難した眼差しは無くなつていた。

「弾達で思い出したけど、……一夏はあいつからは何か連絡あつた？」

どこか遠い場所を見ながら鈴が俺に訊いてきた。その顔は寂しそうな顔をしていた。

「いや前にも言つたが一度も無い。あいつは一年前置手紙残して消えたきりだ」

俺も寂しそうな顔してるだろうなと思いながら答えた。

「一夏、もしかしてあいつとは葵のことか？」

篠もどこか寂しそうな顔して俺に訊いてきた。

「ああ、あの野郎本当にどこ行ったのやらい」

「あの皆さん…、一体誰の事について話されますの？」

セシリ亞が頭に？マークを付けながら尋ねてきた。そういえばこの場で葵の事を知らないのはセシリ亞だけだった。

「ああ悪いセシリ亞。さっきから鈴や篠が言つてた奴は青崎葵つて名で俺の親友。そうだな篠が女のファースト幼馴染なら葵は男のファースト幼馴染つて所だ」

「親友ですか」

「ああ、一夏と葵は本当に仲がよかつたぞ。そして私の所で一緒に剣道を習っていたから、私の幼馴染もある」

「まあ私にとつてもそうね。一夏と同時に葵とは友達になつたし」

篠と鈴が懐かしいなあつて言つてるとセシリ亞が再度質問してきた。

「あの一夏さん、先ほどの会話の流れからして、その葵さんは急に一夏さんの前から姿を消したんですね？」

「そうよセシリ亞！あのバカ急に学校を休みだして、家に電話しても繋がらないし携帯も出ないし心配して家に行つてみたら、そこに私と弾と一夏宛の手紙があつてそれ以外はもぬけの殻だつたのよ！」

あれにはビックリした。葵の家に付いていた青崎つて書かれた表札が無くなつててドアに鍵がかかって無く開けてみたら、玄関入口に俺達宛の手紙が置いてあり、それ以外は家具も一切合財全部無くなつていたからだ。ちなみに弾宛の手紙には「短い間だつたが楽しめたつたぜ」、鈴の手紙は「酢豚の腕前磨けよ」、俺の手紙には「またいつか会おうぜ！」だけだつた。つーかこれわざわざ三人分用意する必要あつたのか？つて思えるほど中身が無い手紙だつた。  
「あの後の一夏はそれはもう落ち込んでたわね。一週間は机に突つ伏してたつけ」

「しかたないだろ、人生の半分は一緒に過ごした奴が何も言わずにいなくなつたんだぞ。親友と思ってたのに俺に何も言わず、…やべえまた落ち込んでくる。あの時は本当に絶望したな。鈴や弾がいなかつたら人間不信になつてたかもしれない。

「そんな事があつたんですね…。大丈夫ですよ一夏さん、鈴さん、篠さん。その方とはまたいつか会えますわよ。だって一夏さんの手紙にいつか会いましょうと書いてあつたんですから」

そういうつて笑顔で励ましてくるセシリア。彼女の気遣いが少し嬉しかつた。

「そうね、あいつはとはまた会つて一回ぶん殴らないと気が済まないし」

「私も葵から剣道の腕では負け越しだったからな。今度こそ勝ちたい」

「そういうや葵と篠は結構ライバルな関係でもあつたな。俺にとつてもそりだつたけど」

「そうだな、死んだわけじゃないしいつかまた会えるよな」

「と言いながら俺達は寮に戻つて行つた。途中鈴と篠が「私がいなくなつた時はどんな反応だつた?」と聞いてきて、どう返すべきかかなり悩んだりもした。

翌日、教室でシャルルとラウラに「昨日はどう?」と聞かれ、篠達と同じ説明をした。

「まあ確かに一夏もここにずっといると気が滅入るよね」

「ふん! 私という夫がいるのに何か不満なのかな?」

「一日前クラスメイト達の目の前でいきなり俺にキスをして以来、ラウラは俺を嫁扱いする。正直言つて辞めて欲しい。」

「ところで一夏よ、一つ聞きたい事がある」

と言つてラウラは誰も座つて無い机を指差し、

「あの机に誰か座つてゐるのを見た事が無い。教官が教鞭を振るつてゐるのに出席せんとはなんという奴だ?」

「あ～そういうえば僕も気にはなってたんだ。ここに転校してきてからあの机に誰も座つてないから」

二人に聞かれるも俺はこう答えるしかない。

「知らん」

「「は？」」

「だから知らないんだよ。このクラスに初めて入った時からあそこは空席だつたんだよ。山田先生も名前すら教えてくれないし」

「名前も教えてくれない。同じクラスメイトなのに？」

「なにかわけありの人物なのか？」

「多分な。千冬姉も教えてくれなかつたし」

そうこう言つてゐるうちにチャイムが鳴り、HRの時間となつた。山田先生と千冬姉が教室に入つてくるが、何故か山田先生はいつも以上に笑顔をしており、そんな山田先生につられたのか千冬姉までちょっと笑顔をしている！なんだなんだ？周りの皆も千冬姉の様子に動搖している。

「さてと朝のHRを始めますが、その前に一つ報告があります」

笑顔を浮かべながら山田先生は言った。

「皆さんと新しく一緒に学ぶお友達を紹介します」

この時クラス一同の心は一致したと思う。「え、また？」と。

「いえ正確にはこのクラスに在籍してたのですが、事情があつて今まで登校出来なかつた生徒が今日から通うんです」

なるほどな。シャルル、ラウラに続きまた転校生が入るつてのは少し変だしな。俺は今朝話していた空席を眺めた。

「それでは紹介します。入つてきてください」

山田先生の合図の後、扉が開き一人の少女が教室に入ってきた。身長は高く、俺と5センチ位しか変わらないかもしねれない。髪は背中を半分隠す位長い。そしてスタイルは抜群。瘦せてるように見えて笄とタメ張りそうなほど大きな胸をしている。そして顔もかなり綺麗な分類に入るだろう。少々ツリ目だがその瞳は優し気な眼差しをたたえている。

うんかなりの美少女だな。昔会っていたらもう簡単には忘れないだろう。でも俺は彼女に会つた覚えがない。

なのに、何故……俺は彼女にとてつもなく懐かしい印象を覚えるんだろう？

彼女は教室を見回し、そして俺を見つめると極上の笑顔で言った。

「暨さんはじめまして。私の名前は青崎葵と言います。事情があって入学後出席しませんでしたがどうかよろしくお願ひいたします」

## 遅れて現れた幼馴染（後書き）

駄文ですが、今後も頑張って書けたらいいなと思います

## 告白（前書き）

オリキヤの青崎葵ですが、ぶつちやけ見た目は型月のアオアオです（笑）

## 告白

「皆さんはじめまして。私の名前は青崎葵と言います。事情がつて入学後出席しませんでしたがどうかよろしくお願ひいたします」

ナニヨイツテルンダコノコハ？

その後も「特技は空手と剣道です。格闘戦なら誰にも負けない自信があります」と自己紹介を続けているが、俺の頭は混乱していた。なんて名のつたこの子は？ 青崎葵？ いやあいつは正真正銘男だつたはずだ。しかしこの子の名も青崎葵。

あ、なるほど！ つまりこの子は

ただ単に同姓同名の別人の人だ！

いやそうだよな、それなら納得だ。葵も空手と笄ん家で剣道習つてたけどただの偶然だよな。葵は武術習つてゐるのに筋肉全然付かず、女みたいに細かつたし、顔も凄く女顔で男子制服着なればほぼ100%女に間違われてたりしたけど別人だよな！ だって俺の記憶の葵と目の前にいる彼女、よくよく見たら凄く似てるが、記憶にある葵はまだもう少し男の顔してたよ～な……？あれ？

「以上です。あ、後一つ言つ事があります」

そう言つて彼女は俺と笄の顔を見て、

「久しぶり元気だったか一夏！ また会えて嬉しいぜー笄も久しぶり6年振りだな！」

と眩しい笑顔をして俺と笄に言つた

……数秒の沈黙の後、

「「葵／＼＼＼？？？」」

俺と篠の叫び声が教室に響いた。

「え、織斑君と篠ノ乃さんの知り合い？」「そうでしょ、一人を名指しで挨拶してたし」「でもそしたら何で織斑君と篠ノ乃さん、お化けでも見たような顔で青崎さんを凝視してるの？」「それと青崎さん、何でいきなり男の子みたいな話し方に？」

葵の発言によってクラスメイト達が騒々しくなった。篠を見たら葵を凝視しながら口をパクパクしてる。まさに鳩が豆鉄砲をくつたようつて感じだ。いや俺も似たようなもんだろうけど。セシリアは昨日葵の事話してたから「え、葵さんは男性だつたはずでは？」と俺と篠と葵を交互に見ていく。シャルルとラウラは……何故葵に対し敵意のこもつた目で見てるんだ？

「静かにせんか馬鹿共！」

千冬姉の一喝で一瞬にして静かになった。流石千冬姉。

「全くまだHRは終わっておらんのに。ああ、青崎」

「はい何ですか織斑先」

パン！つという音と共に葵は千冬姉から出席簿で頭を叩かれていった。

「な、何故叩くんですか千冬さ」

しまつた！つて顔して口を押された葵に、再度パン！という音が響いた。

「学校では織斑先生と呼べ。後先程の質問の答えだが、お前の口調が男になつた場合容赦無く叩いて矯正してくれと上からの命令があつたのでな。最低限公共の場では口調に気を付ける」

「了解しました織斑先生」

頭を抑え若干涙目で答える葵。痛いもんなあれ。

「さて、これでこのクラスの者が全て揃つたわけだが、お前達に言わなければならぬ事がある」

「頭を抑え若干涙目で答える葵。痛いもんなあれ。

「さて、これでこのクラスの者が全て揃つたわけだが、お前達に言わなければならぬ事がある」

千冬姉はちらりと葵を見て、

「言わなければならぬ事とは、今日初めて登校した青崎の事だ。事情があつて登校が遅れたわけだが私が今から言う事はそれに関する事ではない。青崎自身についての事だ」

そういうて千冬姉は「青崎、お前から言うか？」と聞き、「はい」と言って葵はまたクラスメイト達の前に立ち、

「え、とですね、実は私は今は正真正銘女の子ですが、中学一年の春までは男の子でした」

と特大の爆弾を放つた。

再度クラスは騒がしくなつたが、同じく千冬姉の一喝で静かになる。

「話の続きですが、誤解しないでほしいのですが私が女の子になりたいから性転換手術をしたというわけではありません。私の体が元々は遺伝子的に女性だつたんです。半陰陽といって、詳しく話すと長いので省きますが、ようは元々女性だつたけど見た目が男性だつたというわけです。私が14歳になる前にそれが発覚し、将来の事を考えて男性として生きるよりも女性として生きる事を選びました自身の事情を真摯な表情で話す葵。その顔に嘘など欠片も見えなかつた。

「かなり葛藤や迷いもありましたが、こうしてEVAの操縦も出来るようになつてますので結果的には良かつたと思います。それに思いもしなかつた再会もありましたし」

そういうて俺と筹を眺める葵。

「なぜこのような事を言つたかですが、体は女性ですが手術前は男性として生きてきました。元男性ということで、私の事を女性として受け入れづらい人等もいるからです。そういう人がいるなら初めから言って来てください。私もなるべく配慮しますので」

悲しそうな顔をして葵はクラスを見渡した。その顔を見て今までそういうた拒絕を受けた事があると容易にした。

「しかし」

ん？急に葵の顔が一転、悲しい顔から挑発的な顔をし、「HSの操縦では誰にも負けるつもりはありませんーそこだけは遠慮しません！」

と宣言した。

ああ、うん。 そうだよな。俺の記憶にある葵はそんな遠慮深い奴じゃないもんなあ。 気配りがよく出来る奴だったが欲望には忠実だつたし。

「以上です。 では改めて皆さんこれからよろしくお願いいいたします」と一礼した。その瞬間

「ああ、お前に色々あつたようだが、そんものは関係無い！・本当は女だった？関係ねえ！その程度で俺がお前に對して認識変わんねえよ！・またよろしくな親友！」

「うむ、お前の事情は理解した。しかしお前がどう思つてるかは知らんが、私にとつてお前がどんなに姿が変わろうと私が知つている葵のままだ。一緒にまた精進しよう」

俺と簫の声がクラスに響いた。驚いた顔して俺と簫を見る葵。しかしすぐに少し半泣きになりながらも嬉しそうな顔をして

「ありがとう、二人とも」と言った。

…やべえ、今は完全に女になつてゐるからかなり可愛い。  
「私も全然問題にしないよー。このクラスに入つたからにはアオアオも一組の仲間だよー」

のほほんさんが笑顔で葵を受け入れてくれた。それをきっかけに「大丈夫よ青崎さん、私達はそんなことで貴方を偏見な目で見ないわ」「それに隠してゐるならともかく、堂々と私達に教えてくれたもの。並みの勇気じゃ出来ないわ。なら私達も

それに答えるまでよ」「HS勝負、私も負けないわよー覚悟しててね」

クラスの全員が葵に笑顔で答えていった。セシリ亞もシユルルも、

……「ウラはよくわからないが拒絕してる様子は無い。どうやら葵は眞に受け入れられたようだ。

その後休み時間の度に葵は質問責めになり、葵の事を聞いた鈴が一組を襲撃。今の葵を見て（特に胸）驚愕し、そして以前宣言した通り一発ぶん殴つた。葵も抵抗すること無く受け入れ「ごめん」と言つと「別にもうこいわよー」つしてまた会えたし…」とプレイと顔をそらした。

「休み時間じゃ時間が足りないわ！ 昼休みにたっぷりと色々話して貰うからね！」

と言つて鈴はまた一組に戻つて行つた。俺も簫も込み入つた話は昼休みにしようと葵に話してたためぢょつじ良かつた。

そして昼休みになると俺は葵の腕を掴み、

「さてと、じゃあ色々と聞きたい事が山ほどあるんで話して貰おつか」

有無を言わせずに屋上へ連行した。

### おまけ

葵を受け入れるクラスメイト達。皆笑顔をしており、まさに青春！つて光景である。

「つむ騒々しいがなかなか美しい光景だな。山田先生、教師としてこのような光景を見れて嬉しく思わないか？」

「あの織斑先生」

「どうした山田先生？」

「……私青崎さんの体の事、一言も聞いてないんですけど……」

「…教えて無かつたか？」

「言つてませんでしたよーー言もー私今日は純粋にこれでよつやく全員クラスメイトが揃うんだーとしか思つて無かつたですよ。ある意味生徒さん達よりもショック受けましたよーー」「さてとそろそろ授業に進まんといかなな」「逃げないでください！」

## 告白（後書き）

テンポ悪い…

初めて小説書いてみてるけど本当に難しい…

## 本当に知りたい事（前書き）

毎日更新したいのに、なかなか時間とれないのが悔しい。

## 本当に知りたい事

「さてと、よつやく昼休みだ。色々吐いてもらひなが」

朝のHRで幼馴染との衝撃的な再会後、俺は聞きたい事がたくさんあつたので昼休みが待ち遠しかつた。あまりのうわの空状態で授業受けてたせいで、千冬姉に合計7回は頭を叩かれた。筹も4回叩かれていた。

葵と話す場所は人気が少ない屋上でする事にした。久しぶりに再会したら女の子になつてゐるし、なんか複雑な事情がありそつだから教室じや話づらい事も多いだらうしな。

昼休みが始まり、俺は葵の腕を掴み、屋上まで引っ張つて行つた。

「おい、一夏。別に逃げないから引っ張るのは止めろー。」

悪いが無視だ。今はまだ優しくする気にはなれない。俺達の後ろには筹が付いてきている。葵について聞きたがつてるセシリ亞達には少しお願いを頼み込んだめ一緒に付いてきてはいない。

「遅いわよ三人共！待ちくたびれたじゃないー！」

屋上に着くとすでに鈴が待つていた。

「悪い鈴。葵を連行してたら遅れてしまった

「だから逃げないつていつてるだろーが！」

「いいから話を始めるべ。うかつたしてたらすぐに昼休みが終わってしまう」

とりあえず屋上に設置されている円テーブルの椅子にそれぞれ腰掛

ける事にした。

全員が座ると、葵は俺と暁、鈴を順に見て回つと言つた。

「まあ一夏と鈴にとつては一年振り、暁にとつては6年振りの再会になつたわけだけど何から聞きたい？一番聞かれると思つてたこの体については一夏と暁には朝のHRで、鈴には休み時間に話したけど？」

確かに見た田どいろか性別まで変わつた経緯についてはもう知つた。だがな、

「葵、俺が本当に知りたいのはそんな事ではない。いや例えHRでその件を話さなくとも、俺が葵に真つ先に聞いたかったのはそんな事ではない」

「いやお前、幼馴染が性転換して現れてるのにそれがメインでなく何を真つ先に聞きたいってんだよ？」

「とほけるなよ。逆にお前が俺の立場になつたら、お前はまず真つ先になんて俺に質問する？」

俺の言葉に葵は観念したような顔をして、

「どうして一言も無く、黙つて俺の前から消えた？」  
と、俺がもつとも問い合わせただしかつた台詞を言つた。

「ちなみに私もそれが知りたかったわ。あんな置手紙だけで納得してるとでも思つたわけ？」

そういうつて鈴は葵を睨んだ。その田は納得のいく説明をしろと言つていい。

「私もそれは気になつていた。お前が一夏に何も言わず、しかも置手紙も一言しか書いてないのはおかしいと思つていた」

「葵、嘘偽りなく正直に話してくれ。この一年間これが俺が一番気になつてたんだ」

俺達の質問を受け、葵は絞り出すよしに一言答えた。

「怖かつたから」と

「怖かつた？ 何が怖かつたんだよ？」

「俺が男でなく本当は女だったから、それを話すことでお前達との関係が壊れるのが怖かつたんだよ、あの当時はな」

葵は自嘲めいた顔してそう答えた。

「あの頃は俺も情緒不安定でな。考え方が凄くネガティブだつたんだよ」

「何せ中一の春辺りから急に体調が悪くなり、手足も妙に痛むようになった。最初は成長痛と思つたけどそれにしてもおかしかったし。そしてついに急に家で俺は意識を失つて倒れたんだよ。親父が慌てて病院の担ぎこみ、診断され結果俺は男ではなく女だと判明した」

「晴天の霹靂とはまさにこの事だつた。だってお前は本当は女の子なんだよと言われても、俺は今まで男として生きて来たんだぜ。どうしきつてんだよ。男として生きる事も考えたけど、生殖器は女だから男を選ぶと子供は作れない。なにより男を選んでも貴方の体では男らしい性格をするのはかなり難しいと言われたよ。」

……まあそれはわかる。中学入ってから葵、空手部に入つて毎日相当練習してたのに、まるで女の子みたいな体格だったし。

「医者も俺を女として生きる事を強く勧めてきてたよ。絶対美人になるからって」

……たしかに。俺も医者だつたら絶対そつちを勧める。

「それにやつぱり遺伝子的にも女性だからそつちの方が後々体の不具合も起きないからって。長生きしたいならやはり本当の性別が一番良いって。医者の説明を聞いて、親父も俺が女として生きる事を勧めてきたよ。そして俺は考えに考え抜いて 女の人生を選んだ」

「わかるか、あの時俺は男として生きて來た事を全否定されたんだよ。親からもな。今までのお前は間違つた存在なんだって俺は思つよつになつた」

そして葵は俺達を見て言つた。

「だから怖かつたんだ。一夏達から俺が否定されるのが。俺が女になることで今までの関係が全て壊れるんじゃないかつて。一夏達から俺を否定する事を言つんじゃないかつて」

「そして俺は一夏達から逃げる事を選んだ。一夏達の反応が怖かつたから。親父に頼んで夜逃げ同然で引っ越ししてくれと頼みこんだ。親父はそれを了承してくれた。でもやつぱり会えなくなるのは嫌で、凄く会いたいけど会いたく無くて。そんな考えをしてるうちに出発の時間が来て、時間が無くパニックなつた俺は、とっせに思いついた本心の別れの言葉を書いた」

あの時俺に書いた手紙は「またいつか会おうぜー」。つまり

「つまりうだうだ考えてても、結局会いたかつてことだつたんじや

ねーか

「……まあな。ただあの時の俺は」

ふざけるなー

「バカかお前。HRでも言つた通りお前がどんな姿に変わろうと、アリスお前は俺の大切な幼馴染だ！なんで俺に相談してくれなかつたんだよー。」

「だから一夏、あの当時の俺は

「五月蠅い！事情はわかつた！理由も聞いた！納得する事も多々ある！でも、俺を信用して欲しかった、悩みがあるなら打ち明けて欲しかった、お前のために力になりたかった…、こればかりは理屈では語れないんだよ！」

「ちよつと落ち着きなさい一夏ーあんたの気持はよくわかるけど、葵も…」

「葵も悩み苦しんだんだ。つらかったのはお前だけでは無い」「鈴と籌に晒され、頭に上つていた血が引いていく。そうだな、まだ葵には聞きたい事がある。

「葵、せつから昔の俺はーと言つてゐるが、なり今のお前は

「ああ、あんな事して後悔してる。何故一夏達を信用しなかつたのか、頼らなかつたのかって。実はそれに思い至つたのは夜逃げにして一日後、手術直前に思つた」

「はやつー。」

なんだそれ。お前のそれまでの葛藤はなんだつたんだよー。

「まああれだ、もう完全に女になるんだと思つたら今までの行動を振り返り、自分の行動がいかに間抜けかと思い知つた。ははははははじやねえ。篳も鈴も呆れてるわ。

「……たぐ、じゃあなんであんたその後私達に連絡よこしななかつたのよー迷いなくなつたんなら電話一つ位よこしなやこよー。」

セヒで葵はあ～、それねと言つて、

「いやそれが出来なかつたんだよ、正確にさせしてくれなかつた

「せせてくれなかつた、だとへどいつことじだ? 私みたいに政府の監視下に置かれたわけではあるまい!」

「いやそれが……篳と同じような立場に俺もいたんだよ

「「「はあ?」」

## 本当に知りたい事（後書き）

思いつくまま書いてたらえりこダラダラしてしまつ

余話ばかりでいかんなこれ  
..

「あ～こせびっちかとこうと篠よりも一夏の方が近いかも」

「俺と？」

「つまり……具体的にどういったことなのだ？」

葵、お前一体何したんだよ？ 篠も鈴もわけわかんないって顔して  
るわ。

「わかった、ちゃんと説明しようつか。そう、あれは桜も散り春も終  
焉を迎える葉桜が綺麗な」

「せういつ前置きはいいからさつあと話しなさい。」

額に青筋立てながら鈴が葵に怒鳴った。俺も篠も同感とばかりに  
頷く。いいから早く言え。

「わ、わかった！だから落ち着け！……まあぶっちゃけるとだな、  
結論から先に言うが俺が日本代表候補生になったから、お前達に連  
絡する事も出来なかつたし、入学も遅れた」

「　「「日本代表候補生！？」」

「そ、やくゆくは日本代表になつて、千冬姉が出場したモノで。  
グロッソで優勝が今の夢で目標

「

そういう葵の表情に嘘は全く見られない。どうやら本当に代表候  
補生になつており、そして本気で日本代表の座を本気で狙っている

よつだ。

「ちゅうとーあんたが日本代表候補生? 嘘でしょ?」

「いへや本當だぜ」

そうじつてニヤッと笑う葵。

「つーか俺からすればわざか一年どちゅうとド中国の代表候補生となつたお前の方が信じらんないけどな」

「んっ、まあね! 私って天才だし」

葵の言葉を聞き、白隈げにふんぞり返る鈴。

「そんなことよつも、じつじつた経緯でお前は代表候補生になつたのだ?」

おい幕、そんなことよばわつされて鈴が少しむつとしてる。しかし確かに気になる。お前一体何があつてそんなことになつてるんだよ。

「ああ、それはな…」

そして葵は、どこか遠い田をしながら話出した。

「一年前、俺は手術終了後真っ先に一夏に事情を説明しようとした。が、やつぱりやめた。さすがにあそこまでやつてしまつたんだし、どうせなら完全に女の子になつた状態で会つてびっくりさせようと思つたからだ」

「? 手術終わつたんだろ? 女になつたんじゃないのか?」

俺の言葉に葵は馬鹿を見る田で見た。……なんだよ変な事いつた

か?。

「バカ。手術したからって体つきとかすぐには変わらないだろ。大体胸とかペツたんこだし。そんな状態で会つても女になつたなんて言つてもお前、ピンとこないだろーが」

なるほど、確かにそうだ。

「その後半年間女になつてしまつたから心のケアとかでカウンセリングを受けたり、色々な薬を飲んだり注射したりしたら、それがまあ色々成長することとする」と。その頃から髪も伸ばすようにしてたし、医者もびつくりなほど女っぽくなつた。胸もそうだな、そのころですに……」

葵の田は鈴の……、おに止めろーそのネタは止めとけ！

「すでに……何？」

バツクに炎が見えそうなほどの怒氣を放つ鈴。マジ怖いんですが。

「……いや何でも無い。ま、そんなわけで見た目が充分整つたからいざ一夏達に会いに行こうとしたら、政府から役人が来てI.Sの起動テストをして欲しいという要請が来た。どうも俺みたいなパートナーの人間でも、女性ならI.Sに乗れるかどうか調べるんだと。俺も女になつたんだしI.Sの操縦ができるかもと思い、快く了承。近くのI.S開発施設に赴き、そこにあつたI.S打鉄に触つてみたら見事起動。俺みたいな女でもI.Sは起動すること証明された。そして俺はどうせだしとI.Sを動かしていいかと頼みこんだ、なんせI.Sに乗る機会なんてこれが最後かもしねりないと思つたからな。そして役人さん達は快くOKしてくれたんで、俺はI.Sを思う存分動かしてみた」

「いやあまたに世界が変わるとほんのことかと思つたよ。今までと

はまるで違う感覚に俺は夢中になつた。ISから流れてくる情報を基に俺はさらに自分が限界と思える操縦をこなしていった。そして一通り満足して地面上に降り、ISを解除したらかなり興奮した役人さん達が俺に詰めより、『二つちに来てくれ!』と叫び俺を連行。検査室に入れ俺のファイジカル・データを取つた。そして俺のIS適性だけど、なんとA!』

「まあ代表候補生ならその位あるわよ」

『たいして驚いてない鈴。「ん〜〜〜！」となにか悔しそうな篠。まあわかるぞその気持ちは。

「どうも俺の操縦が初めてとは到底思えないほど良かつたらしく、しかも適性Aつてことで皆騒ぎ俺をべた褒め。いやあそれほどでもとか言ってたら、そこに一人の少女が現れた。その子は俺を見て、『ふん、元男がIS乗り。冗談じやないわね』と言つて思いつきり侮蔑を込めた目で俺を見た。その子の言葉にカチンと来た俺は、何? その元男よりもIS操縦下手そうだけど君と言い返した。そっからはお互い罵り合い、そしてその時その子が言つた言葉にキレた俺は勢いでISで勝負だ!と言つた。そして俺は周りが反対するのを振り切り、広場で俺は打鉄に、彼女は専用機を展開した。え、専用機? と思ったら施設の方が教えてくれ、その時彼女は日本代表候補生だと知つた。自信満々に勝負に乗つたのはそのためだつた』

「しかし後には引けないし、不思議と負ける気はしなかつた。ISから流れてくる情報を参考にし、イメージ通りに操縦して戦つたら開始10秒足らずで俺が勝つた』

「あんた話の流れからして勝つたんだなあとか思つてたけど、いく

「あんた話の流れからして勝つたんだなあとか思つてたけど、いく

「わんでも誇張しますわよー。」

「10秒でシールドエネルギー全て無くすなど、打鉄に白式の雪片式型でもあつたとでもいうのか貴様！」

三者三様で葵に「嘘つけ！」と言ひ俺達。いくらなんでもおかしいだろ。代表候補生相手に…

「いや本当。嘘偽り無し。ただ一つ誤解している。おそらくお前達は10秒で俺が相手のシールドエネルギーを〇にしたと思ってるだろ」

「違うのか？」

「ああ、違う。俺は相手を気絶させたんだよ。俺の攻撃を受け、彼女の機体は勢いよく壁に激突。轟音を立てて壁を粉砕した彼女はその衝撃で気絶した」

「ISに乗った相手を一撃で気絶……葵、お前は一体何をしたんだ？」

「いや単純に『瞬時加速』を何故か理解できただからそれを使って一瞬にして相手との距離を詰めた。俺を舐めきつてた彼女は対応が遅れ、ガラ空きの腹に正拳突きを当てるやうなった」

「マジかよ。いくら葵が空手をやってたとはいえ……」

「まあそれは今後授業や放課後の模擬戦で実践してやるよ。言ひよりもやつた方が早い」

「わかった。疑問は後にしよう。で、話の続きを頼む」

「ああ。まゝ俺が代表候補生を一撃で倒したもんだからもう大変な事になつた。しかも倒し方が武器を使わず拳のみ。役人さんが政府の上層部に連絡して協議の結果、俺は代表候補生となつた」  
そして葵はは〜つと溜息をついた。

「しかし俺が代表候補生になつた理由は少し複雑でな。ISは男しか操縦できないだろ。で、俺は体は本当は女だつたとはいえ、手術前は男として生きてた。日本政府の一部がその辺を押し出して『今は女だけど元男！男で初のIS乗り！』というかなり強引だがそんな宣伝で俺を売り込もうとしたんだよ。しかしそれはいくらなんでも反対する人達もいたんで、とりあえずIS学園入学までは保留となつた。政府としては他国に秘密にして日本にはこういう人材もいるとアピールする目的もあつたため、俺の存在は秘密扱いとなつた。そのため俺は知り合いに干渉することが出来なくなつた。俺が一夏達に連絡できなかつたのはこれが原因なんだよ。まあだけど」  
そう言って葵は俺を見て

「一夏の登場のおかげでその計画は白紙になつたけどな。本当の男がIS操縦できるんならそつちに飛びつくわな」  
と言つて笑つた。ああ、やっぱそんな風に宣伝されるのは嫌だつたんだな。

「ま、それでも実力的には代表候補生のレベルなんで肩書はそのまま。政府の監視も無くなつたんだけど一夏も第もIS学園に入学するのを知つたからその時言おうと決意。入学を楽しみにするもIS学園に入学直前にトラブルがあつて登校が遅れ、今日が初登校になつた」

「トラブル？入学前に何があつたのだ？」

「いやそれはまた今度にしてくれ。今はまだ……言いたくない」  
葵はどこか暗い顔して答えた。…その顔を見て俺も鈴も第も追及するのを止めた。

「まあ以上が俺に起きた、一夏達が知らない一年間の出来事だ。満足したか?」

「いや話を聞いたが……、葵、お前どんだけ波乱万丈な人生送ってるんだよ」

「世界初の男のIIS乗りのお前に言われたくないぞ  
いや俺よりも絶対お前の方が凄い。

「それよりも、いい加減俺のことばっかりでなく、お前達の事も話してくれよ。空白の時間を互いに埋めようぜ」

葵、そう言つてもだなお前が期待するほどの事はほほ無いぞ。

「いや葵、俺はお前が消えた後はこれと黙つて話す事あんまり無いぞ。一年時は弾達と遊んでばっかりだし三年の時は受験勉強で消えたし」

「私もあんたが知つての通り三年の時中国に帰つてそこで代表候補生になつてIISの特訓に明け暮れたわね」

「私は政府の監視下の元各地を転々とする日々だけだった」

「……予想以上につまらない返しだな。じゃあIIS学園に入學してからはどうなんだよ。結構噂は聞いてたんだぜ。一夏のクラス代表決めとかタッグマッチトーナメントとか。なかなか面白そだから話してくれよ」

俺はそれを聞いて時計を確認。かなり話しこんだが昼休みは後10分ある。これなら間に合つた。俺はセシリアの携帯にワン切りで合図を送つた。

「ああ葵、いいぜ。でもそれならまずは」

その時屋上の扉が開き、セシリア、ラウラ、シャルルが入ってきた。シャルルの手にはバスケット。中には昼飯も食べずに話してた俺達用のサンドイッチがある。俺はセシリア、シャルル、ラウラの横に立ち、

「この学園で出会った、俺達の友達を紹介させてくれと言つて、セシリア達に自己紹介をお願いした。

「わたくしはセシリア・オルコットと聞こます。出身はイギリス。今後ともよろしくお願いしますわ」

「僕はシャルロット・デュノア。出身はフランス。僕とも一夏達みたいに友達になつて欲しいな」

「私の名はラウラ・ボーテヴィッヒだ。ドイツ出身。嫁の一夏の幼馴染なら、私も仲良くなんとな」

「ああ、改めてよろしく。俺も皆とは友達になりたいよ。……ところで一夏」

葵はなんかニヤニヤしながら俺を見る。なんだよ気色悪い。

「嫁とはまた……、意外だがなかなか面白い彼女なんだな」と言つてラウラを見る葵。いやちよつと待て。

「違」

「違いますわ、ラウリさんは一夏さんの彼女ではありますん」とよ  
ー！」

「そうだ葵、勘違いするな」

「こいつが勝手に一夏の事そう呼んでるだけよー。  
俺の言葉を遮って葵に否定するセシリア、鈴、篠。いや何をそん  
なにムキになつてるんだ。

「何を言つ、この国では氣に入った者を」

「ラウラ、話がややこしくなるから」

そういうてラウラの口を塞ぐシャルル。あれ、なんか目が笑つて  
無いように見えるのは気のせいか？

「……あ～わかった、これだけでこれがどうこう人間関係なのかも  
大体理解した」

なんかしみじみ納得つという感じで頷く葵。その手にはサンドイ  
ツチがつ…！

「葵ー何勝手に食つてるんだよー！」

「何言つてるんだー夏。鈴も篠ももう食べてるぞ」

え？、と思い鈴と篠を見てみる。一人とも片手にサンドイッチ、  
もう片手に牛乳を持つている。何時の間にーそしてバスケットを見  
てみたら……見事に空っぽだった。

「さてと栄養補給も済んだし、午後の授業を受けるかーセシリア達

は放課後また改めてお茶でもしながら話そつか

「賛成ですわ。私も葵さんの事を色々知りたいですし」

「一夏達との昔の面白いエピソードとかあつたら話してくれたら嬉しいかな」

「うむ、それは楽しみだな」

わいわい言いながら教室に戻つていく葵達。俺は空腹のまま空のバスケットを持ちながら後を付いていく。……まあ葵、皆と仲良くなれてるからいつか。

その後授業も終わり、放課後葵は千冬姉から自分の部屋鍵を受け取つた。なんとなく予感がして葵の鍵の番号を見てみたら……俺の部屋の番号だった。

「葵は登校しない可能性もあつたから、いない者と考へて部屋割を行つた。しかもその後鳳やデュノア、ボーデヴィイッヒと予定外の転校もあつたため、使用可能状態の部屋が無い。用意が出来るまで織斑、お前の部屋に同室して貰う。まあ今まで篠ノ乃やデュノアと一緒に生活していたんだ。間違いは起こさないだろ?」

そう言いながら何故睨むんだ千冬姉。信用していないのかよ…

「葵…それにお前もいきなり女と同室するよりは織斑で慣れた方がいいだろ?」

「織斑先生……、ありがとうございます」

「そういうわけだ、お前ら仲良く生活しろよ。まあ言われるまでも無いと思うが」

そういうつて千冬姉は苦笑を浮かべながら教室を去った。

その後篠達にこの事を伝えたら「うーん、でも葵なら……」「今は女の子だし……、でも男だつたし……でも一夏と同室は……」「嫁と同室だと！羨ましい奴だ」と全員唸りだしたが、葵が皆を引き連れて物陰で囁いたら全員一応納得してくれた。何を話したんだ？しかし葵に訊いても

「お前は気にしなくていいんだよ。ちょっとした協定」

とわけわからない返事しかしなかった。なんだよ協定って。それからは全員でお茶を交えながら葵の事やIIS学園に入学してからの事を話し合つて、楽しい時間を過ごした。……葵がいくつか俺の過去の暴露話をした事以外では。

皆と別れた後、葵は送られた荷物を引き取りに行き、それを持つて俺の部屋に入り、荷物を整理し終えると、

「じゃあ一夏、これからもまたよろしくな」と、笑顔で俺に言った。それに俺も

「ああ、お互いにな」と、笑顔で返した。

まじめ（後書き）

うーん、切り所がいまいちまだわからなーい

ちなみに葵は専用機持つてません

葵が登校して、数週間が過ぎた。

葵が一緒に生活に俺は慣れ、それどころか前よりも充実した生活を送っている。葵が来る前まで、俺には本当の意味で心を許せる相手が居なかつたのが大きい。一緒に馬鹿な雑談するだけでも凄く楽しい。いや篠達とも仲良くしてるんだが、なんというか葵と比べると空気が堅いっていうのか、たまになんかプレッシャーみたいなものを感じるんだよな。その点、葵は一緒に居てもそんなものは感じないし、逆に落ち着く。さすが10年近くも付き合つただけの物がある。見た目は完璧に女の子になつても、纏っている雰囲気は昔のまま。人は外見じやない中身だな、いや本当に。

午前6時半。毎朝この時間に起きるが、例外なくその時間に葵の姿は無い。ベットは空っぽ。葵は毎朝5時半には起きて空手の練習をしているからだ。これは葵のI.S操縦技術に大きく影響しているので、毎日欠かさず行い己を高めている。

何度か付き合ってみたが、……凄まじい練習量に俺は何度も倒れそうになり翌日激しい筋肉痛に悩ませる事になつた。その後葵から白式の戦い方を考えると俺より篠と特訓した方が良いと言われ、休日は篠が嬉々として早朝から俺をシバキ倒すようになった……。

そして俺が起きて顔を洗つてる時位に葵は部屋に帰つてくる。その時俺は洗面所を出て、入れ替わりに葵が入りドアを閉める。練習後の汗を流すためシャワーを浴びるためだ。シャワーの音が聞こえたら俺は再度中に入りさつさと用を済ませる。俺が出るとすぐに葵もシャワーを終え、着替えて出てくる。一度葵のシャワーシーンを遭遇してしまつた事があるが、葵は笑つて「何、一緒に浴びるか」

とからかってきたが、俺はその言葉を聞いても目は葵の体を凝視。いい加減恥ずかしくなってきた葵が俺にシャワー浴びてきて俺は意識を取り戻し急いでシャワー室から出た。その後葵から散々「エロ河童」とからかわれたため、一度とそういう事が無いよう注意している。

いや、今でも脳裏に離れない。いや離したくない光景を脳裏に刻んだのは秘密だ。

そして一人で今日の予定や持つていく物の確認をした後、俺達は一緒に朝食に行くのが朝のサイクルとなっている。

食堂に着く時間はほぼ毎日同じなので、時間を合わせてるのか篠達と一緒にになる事が多い。朝は多く食べる派の俺と同様、葵も朝はかなり食べる。「ご飯みそ汁は毎回御代りしてる位だ。皆の朝食の軽く2倍は食べる俺達に、篠達は毎回苦笑いを浮かべている。ラウラは千冬姉の影響か皆より比較的多く食べてるが俺達と比べたらかなり少ないのでいいなめない。まあ体格差があるし。一度クラスの女子が葵の健啖っぷりを見て、「そんなに食べたら太るよ」と言つたら

「毎日毎日体を動かしまくってるから大丈夫。それに食べないと体持たないし成長もしないわよ」

この発言を聞いた周りの女子達は葵の胸に視線が注がれた。そこには篠にも勝るとも劣らない立派な胸がある。皆葵を羨ましそうに眺めるが葵は気にせず食事を続けていった。

ちなみに葵は登校三日後から基本食堂や校舎の中等寮以外ではほぼ完全に女口調で会話するようになった。俺に対してもそうで、「一夏、今日は何食べる?私は今日は鮭定食にしようかな?」と言つ

てきた時は思わず葵を凝視した。まあ葵曰く

「何時、何処で織斑先生に出くわすかわからない以上、公共の場ではちゃんと女の子しないとね」

らしい。千冬姉本当にいきなり現れるからな。何度も何度も殴られればそうなるか。そのため篠達も最初は面喰らつてたが、今では慣れて普通に会話している。むしろずっとそうしなさいと皆言つてゐる位だ。

ちなみに何故葵が男みたいに喋つたら叩かれる理由だが、代表候補生だから。国の看板とも言える存在が、そんなガサツなことはしてはいけませんと主に女議員から言われてるらしい。これもある意味性差別じゃないとぶつぶつ文句言つてるが、俺も篠達も今の外見じゃ女の口調の方が断然あつてるので同意できない。

その後朝のHRを終え、授業に入る。相変わらず授業について行くのがやつとの俺だが、それでも葵が来てからは大分マシにはなつた。

「助けてドランモーン、ここがさっぱりわからないんだ」「全くしょうがないなあのがいた君は」

こんな感じでバカやつても、葵は乗つてくれてそのままわかりやすく教えてくれる。セシリヤやシャルルとかに聞いても快く教えてくれるが、俺は葵が来てからは葵に聞く事が多くなつた。まあどつちかというところいつたバカなやり取りがやりたくて葵に聞くのが大きな理由。もう一つは……例えばセシリヤに聞いた場合、そした

ら第にシャルルにラウラが不機嫌になるし『どうして私に聞かないの（だ）』となるからだ。何でこうなるんだ？と葵に聞いてみたら苦笑いしか帰つてこなかつた。

実習授業の時、葵に専用機が無い事を知つた。代表候補生なのに？と俺が聞いたら

「別に代表候補生なら全員専用機持つてわけじゃないわよ。あくまで候補生なんだから。それに私の専用機の話はあつたんだけど…誰かさんの専用機を作るためにコア使われて私の分が無くなつたし」

そして俺をジト目で見る葵。いやなんというか…すまん。

しかし専用機は無いが、葵の操縦技術は確かに凄かつた。訓練機に乗つてゐるに、専用機持ちの俺やセシリア達とほぼ変わらない動きをしてくれた。一番驚いてるのは同じ訓練機に乗つてゐる第で、どうやつたらそこまで動けるのかと驚愕していた。

そしてここでも俺は葵に操縦について教えて貰つてゐる。

：まあ俺の「一チを買つて出でている皆に不満持たれてるけどね。だつてシャルルと同じ位こいつに教えて貰う方がわかりやすいんだよ。葵も俺が理解できるように考えて言つてくれるし。ただ難点があるとすれば

……HSスースーって目のやり場に困るよね。

昼食は最近では食堂以外でも屋上で皆で弁当を持ち寄つて食べる事も多くなつた。第は和風、鈴は中華、シャルルは洋食が多い。セ

シリアルラウラも頑張つて作るよ!」してこる。最初葵はセシリ亞の料理を食べ、正直に

「不味い!ちゃんと味見してるの!」

と言つてしまつた。セシリ亞はその時はショックで泣いてしまい、葵は慌てて

「『めん…言ひすぎたわ!私がちゃんと料理教えてあげるから!だからセシリ亞泣かないで』

と、昼休み時間中セシリ亞を宥めていた。その後葵は約束通り暇な時間があればセシリ亞に料理を教えるようになった。その甲斐あってか、最近では最初に比べかなり上達し、安心してサンドイッチを食べられるようになつた。ラウラも酷かつたが、シャルルがサポートすることできちらも最初と比べかなりマシになつた。

ちなみにこの昼食を眞で一緒に食べようと言ひ出したのは葵。葵はセシリ亞と鈴、ラウラの仲が妙にギクシャクすると俺に指摘。学年別トーナメント前に起きた出来事を話すと葵は納得し、そのままから弁当を各自作つて一緒に食べようと提案してきた。各自のお弁当を食べて意見交換してしていけば心のしりりも溶けるんじゃない?とかなり曖昧な理由で行われたお弁当会は、まあ第一回はセシリ亞が大泣きして終わつたが、その後は葵の言つ通り順調に進んだ。主にセシリ亞と鈴には葵が、ラウラにはシャルルが間に入つてやり取りをしたおかげで、最近ではもうわだかまりなく三人とも仲良くなつてゐる。

しかしこの昼食会、俺だけ弁当を作るのを葵から禁じられている。いや楽だからいいけど、理由を聞いたら

「まだ駄目。皆のレベルがもつと上がつたら一夏にも作つてもいいから。今作つたら…皆ショックを受ける」との事。なんのこいつぢや。

放課後になると、俺は以前同様アリーナでIRSの特訓をしている。専用機を持つていらない葵は籌同様申請書を出してIRSを借りてくる。しかし毎日借りる事は出来ないので、基本セシリヤや鈴達と訓練することが多い。

葵と籌だが、借りられない田は道場に行き、剣道勝負をよくしている。筹が転校してからは葵、剣道の練習はしてなかつたが、代表候補生になつてからは剣道の練習も再開したという。葵と筹だが、7対3の割合で筹が勝つている。さすがにずっと剣道を続けていた筹の方が強いようだが、それでも負けるのが悔しいのか大体筹の方から勝負を挑んでいる。葵の専門はどちらかというと空手だが、筹の実力は本物なので良い特訓になると喜んで応じている。俺も葵に剣道で勝負したが……ええボコボコされましたよ。

そして葵とのIRS戦だが、初めて戦つた時はあまりの強さに茫然としたな……。

「よし、じゃあ一夏！待望のIRSでの勝負をしまじょうか！あ、手加減いる？」

葵はそう言って打鉄に乗つて俺に笑いかけた。その顔は俺に負ける事なんてありえませんと言つている。

「ふざけんな！全力できやがれ！」

俺はそう叫び返した。

「じゃあ、始めよつか！」

と言つて。俺に突撃してくる葵。早い！すぐに後退し距離を開けようと飛翔。しかし葵も俺を追い飛翔。その瞬間にきなり『瞬時加速』で一気に間合いを詰めて来た葵。その手には何も持っていない。

「くそー。」

すぐさま雪片式型を構え、迎撃態勢を取る。葵の専門は空手だが、これはEIS戦。なにか武器を持つてるかもしない。しかし葵はそのまま俺に接近。俺は雪片式型を葵めがけて振り下ろす。

「それは下策中の下策ね」

と言つて葵は、俺の一撃を真剣白刃取りで受け止めていた。嘘だろー。

「じゃあ見せてあげる。私の戦い方」

と言つて白式の腹部に正拳突きを叩きこんだ。その瞬間

「~~~~~」

凄まじい衝撃が俺を襲い、勢いよく壁に激突。あまりの衝撃に眩暈を起こしかけるが、エネルギーを見て絶句。さつきの一撃で半分は無くなっていた。

「まだまだいくよ～」

そういうつて再度俺に接近してくる葵。雪片式型を構え迎撃するも俺の攻撃を曲芸師のようにかわしていく。そして葵は雪片式型の柄部分を蹴りあげ、浮いた手をさらに蹴つて俺から雪片式型を手放させた。無手となつた俺に葵はまた拳を構えて、振り抜いた。

また容赦なく壁に激突した俺。そして絶対防御発動。俺のエネルギーは全て空となつた。

誰が見てもわかる通り、俺の完敗だった。

「いやね、私はEISは乗るで無く、肉体の延長的な物と思ってるわけ

試合終了後、俺は葵にあのでたらめな一撃の正体を聞いてみた。

「 I.S を動かすのはあくまで人間。それは当たり前だけど、 I.S つて人型じゃない。そして精密なその作りは肉体、いやそれ以上の動きを行える。一夏、私は I.S を操縦するでなく I.S を装備して戦うと認識してるわ」

「そして肉体と I.S の動きを完全にシンクロさせることで、今まで私が長年練習を重ねて来た空手の技を I.S で完全再現。あの威力は I.S を使うことで I.S が持つ力を最大限まで引き上げてるから産まれる威力。みんな I.S で格闘してるけど、それはただ動かして相手にぶつけてるだけ。私からすればままごとね」

そういうって葵はラウラ達が待機している所まで戻つて行つた。回線を通じ俺達の会話を聞いてたんだろ？ 皆驚愕の目で葵を見ている。そして思う。これだけの事ができても何で代表候補生なんだろと。

その疑問は、次に鈴、セシリ亞、シャルル、ラウラと戦つているうちにわかつた。葵は I.S を乗りこなし近接格闘が強いが、銃などの飛び道具を使わないからだ。そのため鈴は距離を取り衝撃砲で攻撃、しかし葵は衝撃砲を握り潜り接近し殴る蹴る等で倒したが、鈴も葵のシールドエネルギーは半分は減らしている。

セシリ亞戦では葵は近接型刀プレートを使いピッドを斬つて落したりもしたが、それでも遠くから撃たれたり切り札のミサイルに被弾したりとした。それでも最終的に間合いを詰めた葵がセシリ亞を殴り倒した。

シャルルは基本距離を取つて戦い、ライフルで狙撃したりマシンガン撃つたりとにかく近づけないような試合運びをした。それでも搔い潜つてくる葵に、中間距離では散弾銃等面の攻撃で葵を牽制、しかしそれでもかわし多少の被弾は恐れず『瞬間加速』で肉薄する

葵に、その正面に実体シールドを出現。いきなり現れたシールドに葵は避けきれず激突。動きが止まつた所をシャルルが『瞬時加速』で距離をつめ、左腕に仕込んだ『盾殺し』を打ち込もうとした。が、その一瞬の後

「きやあ～～～～～～！」

勢いよく吹き飛んだのはシャルルの方だった。葵はあの一瞬で機体を調整、突進してくるシャルルをカウンターで迎撃したのだ。その後は同じ手は通用せずついにシャルルに接近する事に成功した葵は一気に勝負をつけた。ちなみにあの時カウンターが成功したのはほぼ奇跡だったと葵が言っていた。

ラウラ戦だが、この時とうとう葵は敗北した。ワイヤーを掻い潜りラウラに接近するも、ラウラのAICが発動し、完全に行動不能になつた。その後葵はラウラにタコ殴りにされ破れた。時間にして20秒で負けている。その姿に俺達は茫然とした。…だってあんだけ俺達ボコボコにした相手がこんなあつさり負けるのは。

「あ～、まさかシユバルツェア・レーゲンにあんな装備があるなんて。ここまで完敗されたの久しぶりよまったく」

ラウラと戦つた後の葵は、口ではそういうも楽しそうな顔をしていた。

「でも、いざれその装備も克服してあげるから、覚悟してなさい」

「ふ、望む所だ。今回は私の手札を知らなかつたからあの結果になつただけだしな。でも次回も私は負けんぞ」

そういうて互いを讃えあう二人。その様子を見て

「葵ー次は私が勝つんだからねー覚悟してなさいー。」

「次に戦う時は、本日とは違いますわよー。」

「そうだね、僕ももつと戦術の幅を利かせるよつとするよ  
三人の言葉を聞いて葵も、

「いいねいいねこついう熱い展開！でも次も私が勝つ！」

と宣言。望む所と言いあつてる皆を眺めながら、俺の心にも熱い  
物が産まれてくる。ああ、やっぱり男なりこの熱い展開は良いー！

「俺もだぜ葵！次は俺が勝つ！」

しかし俺がそう言った後、皆の返事は

「「「「「それは無理（だ、ですわ）」「」「」「  
……おまえら酷いくない？

こうして俺達の日常は流れていくよになつた。以前とは違う毎  
日に俺は楽しむようになつた。そしてそのまま、来週に控える臨海  
学校も俺は楽しみにした。今のメンバーで迎える臨海学校、それは  
最高に楽しい思い出になる気がするからだ。

そういうや葵水着持つてるんだろうか？シャルルも男としてここに入  
学してるんだし、持つてないかもしれない。次の休みの日に一人を  
連れて買いに行くのも悪くないな。

## 口常（後書き）

戦闘シーン書ける人尊敬します。  
そしてこれでようやく本編と絡める…

後葵が料理できる理由ですが、葵に母親が幼いころからいないからです。そのため料理は一夏と一緒に習つたため、結構上手いです。

## 買い物狂想曲（前編）（前書き）

一夏以外の一人称に挑戦してみました。

## 買い物狂想曲（前編）

「なあ葵、次の休みの日に買い物に出かけよ」  
「せ」  
俺はベットの上で横になりながらジャンプを読んでいる葵に尋ねてみた。田を悪くするから止めとけ。

「買い物？何を買いたいんだよ？」

「来週は臨海学校があるだろ。お前学校の水着しか持つてないだろ  
どうせ。俺もそうだから一緒に買いに行こうぜ」

俺の言葉に葵はふむ、と頷いた。

「ん？一人で出掛けのか？他は誘わないのか？」

「ああシャルルも誘つていいと思つ。あいつも確かに前水着持つて  
ないって言つてたからな」

「シャルルね……、いや一夏誘つてくれて悪いが俺は次の休みは用  
事がある。だから シャルロットと一緒に買いに行つて来てくれ  
葵は妙にシャルロットの名前を強調して言つた。

「用事？早く終わるんなら待つぞ」

「いやいつ終わるかは俺にもわからないから俺に構わず シャルロ  
ットと言つて來い。ああ、そつそつ シャルロット はこの辺の  
地理とか知らないし女の子なんだからちゃんとお前がリードしてや  
れよ」

また シャルロット と強調して言つていく葵。なんでだ？

「ああ、言われなくてもわかってるよ」

「おひへ、『テート楽しんで』」

「『テ、『テート！？』

顔が赤くなる俺をニヤニヤしながら見る葵。くそ、変な事言つからただ一緒に買い物誘うだけなのに、妙に緊張してしまつじやねーか。

週末の日曜日、天気は快晴。お出かけには絶好の日に今僕は一夏の一緒に電車に乗っている。昨日いきなり一夏からメールが来て、『一人で水着買いに行こうぜ』と誘われたから。確かに僕は水着をまだ買って無いから今日買いに行こうとは思つてたけど、まさか一夏から誘つてくれるなんて！しかも二人っきりで！僕が学園に女の子だとカミングアウトしてからは初めての一人っきりだよ…ここ最近一夏葵とべつたりだから余計に嬉しいよ！

「ああ、良い天気だなあ」

電車に揺られながら風景を眺めてる一夏に、僕は聞いてみる事に

した。

「あのね、一夏。ちょっと聞いていいかな？」

「何をだ？」

「えっとさ、どうして僕だけ誘ってくれたのかな？てっきり『うのは葵も誘うとばかり思つてたから』

勇気を振り絞って聞いてみた。ま、まさか僕の事が好きだから！  
そして一人つきりになりたかったからとかかなく！

「葵も誘つたが用事があつて来られないんだと。誘つた理由だけど  
もうすぐ臨海学校あるだろ。お前以前女子用の水着持つて無いって  
言つてたじやないか。俺も買つてないからついでにと思つて」

「つ、つこでに…」

さつきまでエベレストまで届きそうな舞い上がりつてた気持ちが一  
気にマリアナ海溝まで下がつていったよ…。

うん、一夏にその辺を期待した僕がバカだったんだよね……、そ  
れにこの一人つきりも葵が用事があつただけなんだ。

「まあ…どうせそんなことだらうと思つてたけどね…」

落胆を誤魔化すためちょっと語氣を荒くした。実際一夏に対し怒  
つてるけど。

「何怒つてるんだシャルル？」

シャルル。その言葉を聞いた瞬間僕の怒りは再度噴出した。

「シャルロット！一人きりの時はそう呼んでついていたじやない

「わ、悪いシャルロットーん、そういうば」「人きりで思い出したけど、葵が来てからシャルロットと一入りになつたのつて今日が初めてだな」

「そうだよ、だから色々期待したのに…」

「いくら久しぶりに親友と再会したからって、一夏つてば毎日毎日葵と一緒にいるし！まあ昔から仲が良かつたのは篠や鈴から聞いてたけどさ。その葵もいなくて今日一夏から誘つてくれたのに誘つた理由がついでだなんて！」

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死んでしまうがいいよ」

「何だいきなり？でも確かにそんな最低な男は死ぬべきだな」

……鏡見なよ一夏。最低な男の顔が見れるよ。僕はは〜、と大きな溜息をついた。

駅について電車から降りても不機嫌な僕に、一夏が僕の機嫌を取るうとしてきた。

「あ、あの〜シャルロット。理由はわからないけど、お前を傷つけたんなら謝る。ごめん！だから機嫌直してくれ」

そういうて何度も頭を下げて謝る一夏。うん、もう許してあげよつかな。

「もういいよ。一夏が悪いとわかつたんなら」

「そ、そりゃ。じゃあ買い物にこいつあるかー！」は俺は昔からよく來てるから案内するぜ。あ

やつ言つて一夏は僕の前に右手を出した。え、これってまさか！

「はぐれたら大変だもんな。手を繋いでいこいぜ」

ま、まさか一夏からこんな提案するなんて。ゆ、夢じやないよね！

「う、うん！」

僕は慈しむよつて一夏の右手を左手で握った。

「……ねえセシリア。あれって手を繋いでない？」

「……ええ、繋いでますわね。しかも見てた所一夏さんから手を出  
してましたわ」

「そりゃ、見間違いでも白痴夢でもないんだ。よし、殺そうー！」

セシリアとアリーナで訓練しようと歩いてたら、偶然一夏と  
シャルロットが歩いているのが見えて気になつて二人でついて来た  
けど、まさかこんな事態になるなんて！

一夏ーーー！あたし以外の女と一人つきりで出掛けただけで無く  
手も繋ぐなんて！殺す！IS部分展開！衝撃砲用意！発

「やめなさいつての馬鹿」

「グエツ！」

いきなりあたしは襟首を後ろから強く引っ張られ、服に首が圧迫された。誰よ！邪魔するのはって、

「葵！」

「はあ～い」

葵はあたしの襟首を掴んでいた。下手人はあんたかい！さらに葵の後ろにはラウラもいた。

「葵さん、ラウラさんも…ビーフしてこいに？」

「いや昨日からシャルロットが浮かれてたのが気になつてたのでな。今日の朝、えらく身だしなみを気にして出掛けたシャルロットを見て、もしやと思ったら案の定一夏と一緒になつた。そして私も二人にダメガキとしたら」

「私が止めたつて訳。まあでも面白そつだからビーフして一人の尾行はしてるけどね」

そういうて歩き出す葵。その後をつけついでいくラウラ。葵の手にはカメラも握られている。完全に出歯龜状態。つてちょっとまって。

「ねえ葵。もしかして今日一人が出掛けの知つてた？」

「知つてたわよ。だつて元々一夏から誘われてたから。でも断つてシャルロットと一人で行くよつにしむけたけど」

「はあ！それどうこうことよー」

なんであんたシャルロットの味方してんのよーどうせならあたしの味方しなさいよー

「まあまあ落ち着きなさいって鈴。大声出すと一人に気付かれるわよ」

「そうですわよ鈴さん、少し落ち着いてください」

「あたしを宥める一人。葵はともかく、セシリ亞あんたは何で落ち着いてるのよ。

まああたし達がこいつしてゐるうちにー夏達は移動し続けるため、取りあえず皆で尾行を再開することにした。つー、まだ手を握つてるし。

「といひで葵さん、一つ聞いてもよろしいですか？」

「何セシリ亞？」

「先ほどの台詞から考えますと、葵さんは一夏さんとシャルロットさんを一人つきりの状況を意図的に誘導したように思えますけど」

「さすがセシリ亞ー銳いーでも意図的っていうよりこれは偶然かな。一夏が買い物行こうと誘つて、そのメンバーが私とシャルロットの二人だけだったから出来た事だし」

「葵、あんた何であの一人を一人つきりにしたかったのよ。まああんたのことだからただ面白そうだからって訳じやないんでしょ」

「あたしの言葉を聞いて少し驚いた顔をする葵。だてにあんたと幼馴染してるわけじやないのよ。ほら、早く言になさいよ、あたしの言葉を聞いてセシリ亞もラウラも葵に教えて欲しそうに見てるわよ。

「うーん、簡単に言えば一夏とシャルロットの関係をリセットさせたいから」

そういうて何故か葵は申し訳ないつて顔をしてシャルロットの方を向いた。

休日でごつた返しているショッピングモール『レゾナンス』を、俺はシャルロットと一緒に手を繋いで歩いている。全く凄い人ごみだ、出発前に葵が言っていた「あそこはぐれたら面倒だからシャルロットと手を繋いでいた方がいいぞ」は本當だな。あいつの忠告に感謝せんとな。しかしさっきまでかなり不機嫌だったのに、今はかなり機嫌が良いな。鼻歌まで歌ってるし。

人の流れも落ち着いた噴水がある広場まで歩いてきて、俺はなんとなく上機嫌の理由を聞いてみた。

「なあシャルロット、どうしてそんなに機嫌が良いんだ？」  
俺の質問にシャルロットは

「え、だつてこいつして一夏と手を繋いで買い物に來てるんだよ！嬉しい方がおかしいよ！」

と、満面の笑顔で返した。いやそう臆面も無く言わると少し照れるな。

「そうだシャルロット、さつき思つたんだが皆もうお前が女の子だつて知つてゐんだから別に一人っきりの時にシャルロットて呼ぶの

も普通だよな。でもどうせだし別の呼び名考えようか、俺とシャルロットだけの呼び名」

俺の言葉に吃驚した顔をするシャルロット。え、そんなに可笑しなこといつたか？

「え、いいの！？」

「うーん、そうだシャルなんてどうだ。呼びやすいし」

「うん、いいよ凄く良いよー。」

「そ、そっかそんなに気に入つたならによりだ」

俺は笑顔で「シャル、シャルか」と喜んでいるシャルを見る。いつものIIS学園の制服で無く、私服姿なんだが、シャルってミニスカート履くんだな。そこから見える脚線美がって何見てるんだ俺！しかしこうして見るとシャルって本当に女の子だな。男として入学してきたのが嘘のようだ。ん、男、シャルル…

「なあシャル、一つ聞いていいか？」

「なあに一夏」

「もしかしてだが、シャルが学園側に女だつて公表した後も俺はずつとシャルルつて呼んでたけど、…実は嫌だったか？」

俺の言葉にシャルは複雑な顔をした。

「うーん、どうだろ。最初にシャルルつて紹介しちゃつたから一夏の中でそれが定着してしまったんだなあと思ってたけど、…本心じゃシャルロットつて本名で呼んでほしかったかな」

「そつか、『ごめんシャル。俺無神経にお前の事傷つけてた』

「良いよ別にそんなの。だつて今じや一夏から素敵な愛称もらつちやつたし。それになんとなくだけ理由もわかるし」

「理由？」

「何だ？ シャルは何を知つてるつてんだ？」

「タイミングが悪かつたんだよねえ。僕が女の子だつて公表した日は一夏、皆から一日中追いかけられてたし翌日は休日。そしてその翌日は葵の初登校で衝撃的な告白。でね、一夏は葵が女の子になつても変わらないつて思つてるでしょ。多分だけどその意識を僕にも向けてたんだよ。シャルロットに戻つたけど、一夏の中じや僕は変わらず、シャルルのままつて」

シャルの言葉に俺は衝撃が走つた。ああ、そうか俺シャルが堂々と女の子に戻つたつてのに心の奥底では、男のシャルルの方が本当の姿だと……。なるほど、それで葵は昨日…。

「ごめんなシャル、確かにその通りだつたよ。お前が勇気振り絞つて女に戻つたつてのに俺は…」

「だからいいよもうそれは。一夏も今謝つてるし、それに」  
そういうつてシャルは右手を胸に当て、

「今の僕はどう見える一夏。男の子？ 女の子？」  
と笑顔で聞いてきた。んなもん決まつてる…

「ああ、可愛い女の子に見えるぜ」

俺の台詞を聞いて、シャルは耳まで真つ赤になつた。風邪でもひいたのか？

「うんうん、作戦は大成功！これでシャルロットも報われるつても  
のよね」

「いやあんたがしたかったのはわかつたけど……あんた何時の間に  
一夏に盗聴器つけたのよ」

先ほどまでの会話は、葵が一夏にとりつけていた盗聴器で全員聞いていた。葵が一夏をシャルロットと二人きりにさせた理由がわかり、セシリ亞もラウラも一人の会話を聞いて複雑な顔をしている。  
「あたしもね。一人にそういうのがあったなんて全然気付けなかつた。

「そんなの同室で生活してるんだからいぐらでもあるわよ。でもこの問題に一夏が気付くかは賭けだつたけど」

「まさに穴だらけの作戦だな。一夏の鈍感さを考えたら普通に何も無く終わる可能性もあつただろ！」

ラウラの言葉にはあたしも同感。あの一夏が今回ここまで頭が回つたのは奇跡としか思えない。

「まあ多少の仕込みはしたわよ。でも私は一夏はちゃんと気付くと思つてたわよ。まあ愛称までは予想外だつたけど」

「どうして一夏さんが気付くと？」

セシリアの疑問に葵は笑顔で言った。

「ん？ しいていえば親友としての勘」

その言葉にあたしは少し悔しくなる。なんだかんだでやつぱ葵、一番一夏の事見てるし、……信頼してるんだってわかったから。

「いやあこれでようやく肩の荷がおりたわ。ところで」

「もうこって、あたしとセシリアとラウラを見ていく葵。何よ一体。

「これで一夏も本当の意味でシャルロットを女の子として認識したわよ。そして前は一ヶ月間漫食を共にした相手。はっきりこって強敵ね」

あ~~~~~そりだつた！ ん、これってちよつと不味いわよー。

「いや~~~これから楽しくなりそつ」

葵は他人事のように言つて、苦惱するあたし達を眺めていった。

## 買い物狂想曲（前編）（後書き）

無駄にシャルル設定引っ張つてました。そして買い物してないし今回。

次回は葵中心にやつたいです。

## 買い物狂想曲（後編）

「さてと、もう私は自分の買い物に行けばいいわい？」  
そういうてこの場から離れようとする葵。つてちょっと待ちなさい。

「なによ葵、あんたわざあんな騒音つておいて続き見ない訳？あの二人の事気になんないの？」

「あんまり。だつてあの一夏だし。今日はシャルロットを本当の意味で女の子だと自覚したようだけど、それだけで一気に関係が進むようなら中学の時に鈴、あんたとつぐに結ばれてるわよ」

「……悲しいけど確かにそうね」  
あのキングオブ鈍感の一夏の事だし。凄い説得力あるわね。

「それにしても」「  
そういうて一夏とシャルロットの二人を交互に見る葵。そして一夏を見て、

「シャルロットとデートしたこと煽ったのに、一夏の奴黒のジーパンに柄物Tシャツ一枚とは……。シャルロットが気合入ってる分余計に浮いてる……」

一夏の服装に呆れる葵。うん、確かに一夏の服装はデートに行く服装とは思えないけどさ。葵、あんたには言われたくないと思うわよ。

「……じゃ葵さん、貴方もそれは女の子としてどうなんですか？」  
そういうて若干呆れ顔をしながら指摘するセシリ亞。あたしも同

感。だつて葵、……上は無地の白Tシャツ、下は青い若干くたびれたジーパン。シンプルにも程があるわよあんた。

「そう? 变かな? 夏らしく、そして私に似合つ服装だと思つけど  
…まあ似合つてゐるわよ。でもねえ。

「そんなことより、一人はもうかなり先に行つてしまつているぞ。  
葵、あの一人に交ざるのを邪魔して様子を見ようと言つたのはお前  
だろう。なら責任持つて一人が水着を買つまでは付き合え」  
ラウラが一夏達を見ながら言つてくる。まあラウラの言い分も一  
理あるわね。ラウラの行動の邪魔をしたのは葵だし。

「あーもうわかつたわよ。それまでは付き合つわよ。でもそれ以降  
は知らないからね。私も買い物したいし。でもさすがに目的は達成  
したから盗聴機能は止めるわよ。これ以上は無粋だし」  
渋々同行する葵。そしてまた、あたし達四人は一夏達の追跡を始  
めたのだった。

どうしてこうなつてるんだろう?

俺は現在正座されている。隣にはシャル。俺と同様正座されてい  
る。そして俺達の眼前には

「いいですか織斑君、シャルロットさん。一人の仲が良いのはいい

「」とです！ですが男女が一緒になつて更衣室に……」

と私怒つてますよーつて顔をして俺達に説教してゐる山田先生。その隣に呆れた顔をした千冬姉がいる。うー、どうしてこうなつた？水着コーナーに来た俺達は別々で水着を買いに行つて俺の分は早く終わつたからシャルを待つていたら急にシャルが来て俺の手を掴んで試着室に引きずりこんで……

それから急にシャルが脱ぎだして、水着に着替えて俺に見せて、そして急にレースを開けて俺達をみて呆れてる千冬姉達がいて。

…あ～カオスだ。なんなんだこの流れは。シャルが急に謎の行動をするし何故か千冬姉に見つかって山田先生に説教されてるし。しかし…あの時のシャルの生着替えは拷問物だつたなあ。

「織斑君、なんで貴方は説教中なのに顔を赤くしてんですか！」

「大方先ほどの試着室での事を思い出したんだう。何をしてたかは知らんが」

「お、織斑くん～！」

千冬姉の言葉を聞き、さらに激昂する山田先生に耳まで真っ赤になるシャル。千、千冬姉！何でわかるんだよ！

「それよりもいい加減出てきたらどうなんだおまえら」「千冬姉はそう言つて近くの柱に語りかける。すると、

「あ～、やつぱりばれてました？」

と葵が出てきて、その後にセシリア、ラウラ、鈴が出て來た。

「おまえら結構前からこそこそ俺達の後ついてきてたのは知つてたが、何をやつてるんだよ？それと葵、お前今日は用事があつて来れ

ないんじゃなかつたのか?「

「用事が終わつたからここのに来たまでよ。文句ある?」

俺が睨んでもしつと答えやがつた。この野郎。その後もあへだこへだ騒ぐ俺達を見て

「あ、そういうえば私も用事があるんです。学園関係の用事何で、鳳さん、シャルロットさん、セシリ亞さん、ボーデヴィッシュさん、青崎さん、お手伝いお願ひします!織斑先生は別件お願ひします!」  
と言つて山田先生は葵達を強引に引きつれてどこのかに行つてしまつた。いいのか生徒を仕事につき合わせて?

「全く山田先生も変な氣をつかつてくれるもんだ」

呆れた顔をして、その後事態を把握してない俺に千冬姉は説明してくれた。なるほど姉弟水入らずね。千冬姉もこの場は千冬姉と呼んでいいと許可してくれたし、久々に千冬姉と本当の意味で二人きりになつて俺もちょっと嬉しくなつた。山田先生に感謝しないとな。

「そつだ一夏、どうせだから私の水着を選んでくれ

と言つて俺に一つの水着を見せる千冬姉。黒と白のビキーか。千冬姉なら……黒だな。でもこの水着だとな。男が寄るか?なら白の方がいいかな。しかしこの白の水着……これは

「どつちがいいと思つた?」

色々考えてたら千冬姉が俺に聞いてきた。うん、害虫防止のためにもここは白だな!

「白かな」

「嘘をつくな。お前は黒の水着を一番注視していた。お前は気に入

つた方をよく見るからすぐにわかる」と言つて黒の水着を掲げる千冬姉。え、俺つてそんな癖があつたのか？

「じゃあお前が気に入つた方を買うとしよう。とにかく一夏、さつき白の水着も急に見だしてたがどうしてだ？」

少し笑いながら俺に聞いてくる千冬姉。何故に？

「いやその白い方は葵か、篠に合ひそつだなあと思つたんだよ。いやあの一人も千冬姉同様スタイルいいし」

「ほう」

と言つて何故か少し笑いながら俺を見る千冬姉。な、なんだよ。

「いや何お前も少しばら異性を意識しだしてきたなと思つてな。水着を見て似合う女の姿を連想するとはな。葵と篠もさぞ喜ぶだろうな」  
「いや千冬姉、さつきも言つたけど体型似てるからつい想像しただけだつて！それに葵は現在進行形で、篠も以前一ヶ月位同室だったんだからそりゃ意識するだ。…昔とはやっぱ違うんだから」

「それでも似合う水着を自然に連想するとはな。さつきはデュノアとデートしてたしな。これも同室相手か。…もしかしてお前は同室位せんと相手を意識しない朴念仁ではあるまいな？」

「ちげーよー何言つてるんだよ千冬姉ーそれにシャルロットとは買い物に来ただけだつてのー！」

「…憐れだな」

と言つてはあー、と溜息をつく千冬姉。何変な事言つたか俺？

「で、どうなんだお前は。人の水着を見て私の事を心配する余裕ないだろ？お前もいい年頃だからそういう相手でも見つかる。周りには余るほどのたくさん異性がいるだろうが」

「いやそんなこと言つても千冬姉。今はまだ俺そういうの考えられないよ。まだ友達と騒いで遊ぶ方が好きだな」

「友達…か。やつこええば葵が登校し出してからお前以前よりも楽しそうに過ごしてるな。周りにいる連中は変わらないのに、葵が来ただけでお前の笑顔が増えたな」

「まあね。やつぱりの置ける友達が増えるのは嬉しいし乐しいぜ」

「…でも、お前も葵はもう異性として意識してるんだよな」

「それは…まあやつだよ。さすがにもう男に思えないだろ。本人も女になつたと公言してんんだし。でも、やっぱり俺の中ではあいつは大切な幼馴染だ。それだけは変わらなー」

「そうか…わかった。まあ今はお前は皆と馬鹿騒ぎでもして良い思い出を作る方がいいのかもな」

と言つて千冬姉は水着を持ってカウンターに向かうようなので、俺もまだ他に買う物があるから千冬姉に用件伝えて別れる事にした。

「山田先生へ、生徒五人も引き連れ無ければならない用事つて何よ？」

鈴さんが不満顔で山田先生に質問しています。まあ大体山田先生がしたい事はわかりますけど。

「それはですね～つてボーデヴィッシュさんは何処へ？！まさか織斑先生の所に？！」

「ラウラでしたら水着コーナーに居ましたけど急に真剣な顔して電話に行きましたよ。先ほど用件を済ましたらいちばんに来るとメールが来ましたから心配は無いと思います」

「そうでしたか、ふうよかつたです」

「ところで山田先生、久しぶりの姉弟水入らずをさせるのは良いですけどその間どうします？お茶でもしますか？」

「あ、青崎さん！何で私の計画を？」

「いや僕もすぐわかりましたけど」

「一夏さんだけ連れないのでバレバレですわよ」

「そ、 そうよバレバレよ。 すぐにわかつたわよー。」

……鈴さん先ほどの発言は？それに田が泳ぎまくつてますわよ。

「そ、そんな。そんなにバレバレだつたなんて」

「まあそれは置いときました。山田先生、何も無ければ私自の買い物に行きたいんですけどいいですか？」

「買い物ですか。いいですよ。あ、どうせですから青崎さんの買い物に皆で付き合いましょうか。いいですか青崎さん？」

「構いませんよ。それに皆の意見も聞いた方が良い物買えそうですし」

「わたくし達の意見?葵さんは何を買おうとしてるんでしょ?」

「葵、何を買ひに行くの?」

「ん、皆もつ買つてるとま思つたけど来週で7月7日、篠の誕生日じゃない。まだ私はプレゼント買ってないからこそ」「

「…………誕生日……!」「…………」

「葵さんの言葉に、鈴さん、シャルロットさん、わたくしは絶叫しました。聞いてませんわ!」

「嘘、みんな知らなかつたの?」

「葵さんが吃驚してますが、それ以上にわたくし達が吃驚です!」

「聞いてないわよやんなの!」

「…何でいつもこの黙つてるかな~」

「危ない所でしたわ。危つく当口向もおめでとの言葉も無こままで過ごすはめになりましたそでしたわ!」

そんなことがあつて後で知つたりしましたら氣まず過りますわー！

「あー、皆とつべに知つてるとばかり。まあ確かに誕生日の話なんてしなかつたけど」

「まあ確かにませんでしたけど…」

「葵も一応僕達に確認しておこうよ…」

「一夏もファースト幼馴染が聞いて呆れるわよ。誕生日なんて自分から言い出しごくいものなんだからあいつから私達に話しなさいよつたぐ」

「まったくですわ。一夏さんはいつも配慮が欠けてますわ。葵さんもすげだ。」

「待たせたな。どうした皆、さつきから騒いで」

「そうこうしてるうちにさつき何処かへ行かれてたラウラさんが戻つてきました。なにやら紙袋を持っていますが何を買つたのでしょうか？」

「ちよつといづれも来たし、皆で幕の誕生日プレゼント買つてないかうか」

「誕生日?何の事だ?」

「後で説明してあげるわよ」

「こうして私達は篠さんの誕生日プレゼントを買いに行く事になりました。後ろから山田先生が「青春ですね~」と微笑んでます。なんか恥ずかしいですわね。」

千冬姉と再度合流し、まだ皆戻つて来ないから近くのカフェで時間潰す事にした。なんか本当に久しぶりに千冬姉と一人っきりで過ごしてゐるなあ。今は家族として話も出来るし、山田先生には本当に感謝しないとな。

「しかし休日に弟に水着を選んで貰い、カフェで一緒にコーヒーを飲むつてのも……私も一夏に言える立場でも無いな」

「何で？家族なんだからおかしくないじゃないか？」

「それを平然と言える事に私はお前の教育を間違えたのかと思えてくるな」

なにやら難しい顔をして溜息をつく千冬姉。俺変な事言つたか？とか考へてると

「織斑先生～！織斑君～！お待たせしました～！」

と階を引つ張つて行つた山田先生が戻ってきた。山田先生の後ろにはセシリア、シャル、鈴、そして…え！？

「…葵、ラウラ。その格好どうしたんだ？」

「あ、あまりじりじり見るな！」

「はあ、レーベンのはあんまり好きじゃないのに…」

顔を真っ赤にして恥ずかしげのラウラに、ヒルも恥ずかしそうに自分の体を見る葵。俺と別れる前はラウラは制服、葵は白Tシャツにジーパン姿だったのに、今では

「どう一夏ーあたし達がプロトコースしてあげたこの姿はー似合つてるでしょー。」

「ラウラは制服しか持つてないって言つし、葵もちょっとオシャレとこつかもうけようと服装に気を配つた方がいいと思つてね」

「それでわたくし達が似合つて可憐いんだけど…普段着で黒のゴスロリ服はどうなんだ?」

「いや似合つてるし凄く可愛いんだけど…これ来て街中歩くのはワカラ的にどうなんだろう?」

「何言つてるんだよ一夏ー」こんなに似合つてゐんだよー問題なんてあるわけ無いよ!」

と言つて「可愛いくワウ〜」と抱きつぶしシャル。完全にお前の好みだろそれ!

「か、可愛いく…」

ラウラは先ほどから顔を真っ赤にしてふつぶつ言つている。大丈夫か?そして

「……」

「無言で見るのはやめてくれない。余計恥ずかしい」

葵は俺をそういうて睨むが…どうコメントしようか。いつもTシャツジーパンなのに今は、赤の可愛らしいデザインのキャミソールに、白ミニスカート。そして黒の一ソックスでこぢらもシャルに負けず劣らず綺麗な脚線美…って何をまた考へてるんだ俺は…しかもいつもはストレートにしてる髪をポニーテールにしてるし。うん、笄とはまた違った印象がする。全体を見てこれは…

「ほう、ラウラもかなり見違えたが葵はそれ以上だな。キャミソールはセシリア、お前の見立てだな」

「ええ、そうですわ織斑先生！何でわかりましたの？」

「いやお前がいつこの服装が好きそうだからだ。で、こののは鈴おまえだな？」

「え、ええーーそうです！千冬さん！」

急に昔の呼び名で呼ばれたため、鈴も昔からの呼び名で答えたが、直後にしまつたって顔をする。

「大丈夫だ鈴。今はオフだから千冬姉もそれで注意しないぜ」

「そ、そう。よかつた」

かなりホッとした顔で答える鈴。まあ頭叩かれたくないからなあ

「ふむ、かなり見違えたな。ラウラも葵もかなり似合つてゐる。一夏、お前もこういうのを相手にプレゼントできる男になれよ」  
精進します。

「で、一夏。どうこれ」

葵が俺に聞いてきた。いやどうしてお前…。ってなんだ皆無面で俺を見て！山田先生も千冬姉も俺に注目してゐるし！

「い、いやあまあ、あれだ。こ、似合つてゐるわ」

「つまらない回答だなあ。可愛いとか一言位言えないの？普通それくらこは男のたしなみと思つんだけど」と言つてつまらない顔をする葵。いやだつて可愛いし凄く似合つてゐし正直……。

でもお前にそれ言つての凄く恥ずかしいと言ふるかよー

「全く、つまらん男だなお前は……」

…千冬姉までそう言わなくともいいじゃないかよ。そして千冬姉、葵に何か言つた後葵連れて何処かに行つてるじ。

その後は山田先生からは「織斑君には失望しました」と残念な子扱いされるし散々だ。

「ねえ、さつきの一夏の態度さ、ヤバくない？」

「わたくし達、もしかしたらとんでもない事をしてしまつたのではなあ……？」

「同じ私服を見たつてのに僕とラウラと葵じゃ差があつすぎないかなあ……」

「可愛い……」

なんか鈴達顔を寄せ合つて何か話しあつてゐるな。何を話してゐるんだ？ そうこうしてゐるうち千冬姉と葵が戻ってきた。葵の手には紙袋。何を買ったんだろう？

「さてと、もうすぐ夕方だ。学園に戻るぞお前ら」

こうして俺達は買い物を終え、学園に戻ることにした。色々あつたけどまあ結構充実した一日だったかな。そして俺は隣にいる葵を見る。……俺の評価が気に入らなかつたのかまた元に戻つてゐる。

「どうかした？」

「いやなんでもない」

…やっぱ少し位褒めとくべきだつたかな。

おまけ

「一夏も、葵も、鈴も、セシリアも、シャルロットも、ラウラもない。私以外誰もいない…。何故私だけ除者にされたんだーー！」

「あ、あの篠ノ乃さん！久しぶりに部活に精を出すのは嬉しいけどちょっともう勘弁して！皆もう疲れて」

「どうして私だけー！」

「あー もうー 誰かなんとかしてーー 部長もこんな時だけいないしー！」

本当に偶然が重なった結果 篠だけ皆と一緒にになれなかつたのだが、無論 篠にはそのような事はわかるはずも無く、一夏達が帰つてくるまで荒れに荒れた篠であつた。

## 買い物狂想曲（後編）（後書き）

買い物終了

いやね原作では描[『無かつたけど、幕結構落ち込んでないかなあと

そういえば、自分の高校はこんなイベントなかつたなあ…  
いやある方が珍しいのかな?

「あー海だー！皆ー！もつすぐ泳げるわよー！」

IS学園をバスで出発してからはや数時間、目的地に近付いてきたためクラスの女子達はかなり興奮している。まあ無理もないか、今日の日を皆楽しみにしてたもんな。なんせこの臨海学校、初日はまるまる自由時間だから皆何して遊ぼうとか移動時間中そればつかだつたし。

「一夏さん、もうすぐ到着しますわね」

通路の向かい側に居るセシリアも楽しそうな顔をしている。

「海で泳ぐなんて久振りだな～。ラウラ、一緒に泳げうね」

「あ、ああ。そうだな」

じゅらも楽しそうな顔してラウラに話しかけるシャル。しかしさつきからラウラはずつとボートとしている。どうしたんだ？バス酔いか？

「大丈夫かラウラ？気分悪いのか？悪いならすぐ言えよ」

「だ、大丈夫だ一夏！心配はしなくていい！」

そういうて顔を赤くしてそっぽむくラウラ。いや本当に大丈夫か？

「そうか、でも無理するなよ。なにかあつたら」

「わ、わかっている。私の事は気にするな」

「大丈夫だつて一夏。少し敏感になりすぎだよ」

「葵さんの事はしかたありませんわよ。ですから一夏さんが責任を感じる必要はありません」とよ

「でもなあ…」

皆はそつまうひなび、やつぱしなんかな。

「しかし葵も、何故よりにもよつて今日！」

皆が楽しみにしていたこの臨海学校。目的地に向かひこのバスには葵の姿は無い。何故なら…

「38度6分。風邪ですね」

「体調管理位しつかりしる。代表候補生だろ貴様は」

「も、申し訳ありません…」

今日の朝、俺が起きたら隣のベットで顔を赤くしてうなされている葵がいた。葵の額に手を当ててみれば物凄く熱く、これはヤバいと思った俺は急いで寮監している千冬姉を呼んだ。山田先生も一緒になって俺の部屋に行き、葵の容体を見てもうつた。

「しかしどうします織斑先生？普通の風邪でしたら注射を打つて薬飲んでぐつすり寝れば明日こなは治つてゐるでしょうけど」

「まあ、まさか俺だけ！」元守番じゅんて言こませんよなー。千冬さんー。」

葵ーお前風邪のせいで状況判断ヤバくなつてるぞー。千冬姉の前でその口調にその呼びかけは！

「…まあ安心しゅ。今回青崎が行かないと困る事になるからな。別の車に青崎は寝ながら運ぶ事にする。今日の所は向こうつの旅館で寝てる」

お、さすがの千冬姉も病氣で苦しんでる葵に鉄拳制裁はしないか。しかし葵が行かないと困る？何の事だろ？か？そして千冬姉は葵を慈しむような目で見て言った。

「まあゆつくり休め。治つたら色々待つてるだ。特に出席簿がな…”じつやり治るまでは見逃してやるだけのよつだ。治つたら葵の運命は…”愁傷さま。

「よかつたな葵、臨海学校に行けるだ

「それはホッとしたが、…結局一番楽しみにしていた初日の自由時間が

「まあ、それは諦めるんだな。つたくせつかく私が

「？織斑先生ビツしました？」

「いやなんでもない」

そして葵のために色々用意すると直つて部屋を出る千冬姉。山田先生も薬を取りに部屋を出て行つた。

「あ～糞ーなんで今日に限つて俺は体調崩してるんだよ…」

「『めんな。俺がお前の変化に早く気付いてれば』

「別に一夏が謝る」とじゃないだろ。それに俺もいつこうなったか  
なんて見当がつかないんだし」

「だが同室にいながら」

「だからお前が責任感じる」とは無いつて。あ、やつやつ  
そういうって葵はベットから降り鞄を漁り始めた。

「おいかちゃん寝てるよ」

「あつた。一夏、これを」

そういうって葵は俺にカメラを渡した。

「一夏、俺の代わりにそのカメラで皆の水着写真を撮つてくれ。  
こんなチャンスはもう無いんだ！女の子の水着姿を見れないなんて  
男としてこれほど悔しいことは無い！」

「おい葵、お前熱のせいで完全に世に戻つてるぞ。それにお前もう  
女だろ！」

大体お前女子更衣室でそんな光景毎日見てるだろが。相当熱で頭  
ヤバいなこいつ。それにこう言つてはなんだが、お前以上のスタイル  
を持つた女子なんてほとんどいないと思つが。

「あ～そうだっけ」

そういうて再びベットに横になる葵。先ほどから声は元気だが顔  
はかなり苦しそうだ。

「あ～一夏にも移つたらヤバいからもつ荷物まとめてこの部屋で、  
葵はそいつて扉を指差した。

「馬鹿か。看病位させろ」

「ここでお前まで移つたら俺がへこむんだよ。頼むから出でけ。そ  
れに汗かいたから体も拭きたいんだよ。ああ、お前が俺を拭いてく  
れんの」

と挑発的な笑みを浮かべる葵。くそ、そんなこと言われたう出る  
しかないじゃないか

「わかつたよ。葵、お前もよく寝て早く元気になれよ」

「ああ。あ、一夏最後に頼みがある」

「頼み?」

「ああ、笄をここに呼んでくれ」

以上回想終了。まあ葵は別便で向こうに行くと知った時は皆ホッ  
としてたな。笄は一番よかつたよかつたと言つてたつけ。

：前回一人だけ除け者にされたと誤解したからな。一人の苦しみ  
が一番わかるんだろう。

「そついや簾、葵はお前に何の用事があつたんだ？」

俺はバスに乗つてからずっと心ここにあらずな状態になつている  
簾に尋ねてみた。

「あ、な、なんだ一夏！何か言つたか？」

「いや葵は簾に何の用事があつたのかと思つてな」

「あ、いやそれは…」

と言つて顔を赤くする簾。何故に？

「ど、とにかく…葵も明日には元気になるんだ。心配はいらないな、  
うん」

いや俺が聞きたかったのはそいつの事ではないんだが。

「やつだね、まあ今日は葵の分まで僕達は楽しんでこいつよ」

「つむ、葵が言つていた海の家とやらで不味いラーメンを食べ、食  
べにくくなつても口を隠して棒でスイカを割り、海に向かつて「バ  
カヤロー！」と叫ぶのを代わりにやつておいてやろう。葵はそれら  
が日本の風物詩で海に行つたらやらなければいけないとか言つてた  
からな」

「…日本には随分変わつた風習があるのですわね」

いやラウラ、セシリア。確かにそれはある意味間違つてはないん  
だが…あー説明が難しい…葵、絶対わざとぼかして話してやがるな。  
と、そんな事話してゐうちに俺達は田舎地に到着した。

旅館に到着後、俺の部屋は千冬姉と一緒に山田先生から聞かされた。それは俺が一人部屋だと就寝時間後部屋に突撃する女子が必要あるからとか。…またしかに千冬姉と一緒にだとそんなことする度胸の奴はないか。ちなみに今回は葵は一緒にでは無い。聞いた限りでは篠とのほほんさん達と一緒にらしい。

「いや～アオアオと同室なんて楽しみだよ～。風邪治つたら一杯ガールズトークやりたいよ～」

「本当よね。こういう機会でも無いと青崎さんいつも織斑君とい Ihr。ま、それは篠ノ乃さんも同じだけど」

「全くそりやね～。ねえ篠ノ乃さん、織斑君との昔話よろしくね～」

「う、ああ」

おお篠、のほほんさん達に押されてるなあ。しかし安心した。入学したての頃とは随分変わったな篠も。

「…おい一夏、何故娘を見る父親みたいな目で私を見ている

「きのせいだ」

そう言つた後、旅館の前に一台の救急車が現れた。もしかしてと思つたら、案の定そこからストレッチャーに乗せられた葵と千冬姉が出て來た。

「…救急車で來たのか」

「確かに寝ながら運べますけど…」

救急車から出た葵は熟睡している。顔色も朝よりもかなり良くなつており、これならすぐに元気になりそうだ。葵はそのまま旅館の一室に運ばれ、そして救急車から降りた千冬姉と一緒に、俺は旅館の女将から部屋を案内された。部屋までの道中俺は千冬姉に葵の容体を聞いてみたら、注射と薬を飲んだらかなり容体は良くなつていって、明日には山田先生の言うとおり元気になるとの事らしい。いや本当に安心した。

早く元気になれよ。

部屋着くと千冬姉は開口一番に

「まあ部屋割の都合上、お前と私は一緒の部屋になつたが、あくまで私が教員だと言う事を忘れるなよ織斑」  
と言つてきた。相変わらず仕事人間だな。

「わかつてますよ織斑先生」

「ならばいい」

…うーん、千冬姉少し硬すぎないかな。部屋で一人つきりの時位は千冬姉と呼んでも良いじやんか。

「公私の区別はつけんといかん」

…相変わらず俺の考へてる事は何故か読まれてるし。その後俺は千冬姉から風呂場等のいくつかの注意事項を聞かされた。

「まあ以上だ。さて初日は自由時間だ。着替えて海にでも行つてこい」

「織斑先生は行かないんですが?」

「私は他の先生達と連絡なり色々ある。まあ、どこかの弟がせっかく水着を選んでくれたからな。暇になつたら海に行こうと思つてゐる。おお、千冬姉もやっぱり泳ぎに行くんだ。しかし千冬姉の水着姿か……、何年振りかなあ。

「では私は仕事に戻る。織斑お前は遊んで来い」

「わかりました織斑先生」

千冬姉に行つてきますと言つて、俺は水着を片手に海へ行く事にした。

「なあ篠、これどう思う?」

「知らん」

更衣室がある別館に行く途中篠と出会い、一緒に歩いてるんだがその道中に珍妙な物があつた。ウサ耳。どうみてもウサ耳にしか見えない物が地面に埋まつていて。そしてその横には「引っ張つてください」と書かれた看板。まあこんなことする人はあの入位しかいないよな。

「なあ篠これ」

「知らん。私は先に行くぞ」

「うつて本当に先に行つてしまつ簾。うへん、相変わらずだなあ。しかしやつぱり簾もこのウサ耳は……簾の姉、束さんだと確信してるんだな。」

「まあ他の誰かが抜いたら面倒な事があるだろ?」……

そう思つて俺はウサ耳を抜く事にした。えい、つてあれ? つつき地面の下に束さんがいるかと思つたのに、ウサ耳の下は何も無かつた。

「どうしましたの一夏さん、そんな物持つて?」

「いやウサ耳が地面にほえてそれを抜いたんだが下に何も無くて」

「はい?」「わけわからんつて顔をするセシリ亞。……うん、俺も言つてて支離滅裂だと思つ。」

「いや束さんが」

しかし俺が言つ終わる前に、

ドカーン!

と窓から巨大な二エンジンが落ちてきて、俺達の前に突き刺さつた。

「な、なんですか?」

セシリ亞が二エンジンに向かつて叫ぶ。その二エンジンだが急に一つに割れ、

「ふつふつふつ！引つかかっただねいつくん！」

と叫びながら、世界一の天才、篠ノ乃束さんが現れた。しつかしなんていうファンシーな格好だろう。千冬姉なら絶対着ないだろう。いや束さん似合つてるからいいんだけど。束さんは俺から先程抜いたウサ耳を取り、頭に装着した。

「いや～久しぶり！本当に久しぶりだね～！元気だつたといつくん。で、ところで篠ちゃんはどこかな？さつきまで一緒にいたよね？」

「あ～それなんですが」

まさか束さんと会いたくないから逃げたとは言えないし、どうしようつかと思つたら

「まあ私が開発した篠ちゃん探知機があればすぐ見つかるけどね～。じゃあいつくん、またね～」

と言つて走り去つてしまつた。相変わらず「コーディングマイウェイな人だ。

「あのー夏さん、先ほどの方は一体…？」

「ああ、さつきの人気が篠の姉の篠ノ乃束さんだよ」

「えええー！さつきの方が篠さんのお姉さまだ、現在各国が探してゐる行方不明中の篠ノ乃博士？！」

かなり驚いてるセシリ亞。まあそうだよな。IISを開発した天才科学者があんな人だとは普通思わないよな。

「そうそういつくん」

「どわあー！」

二つの間にかまた二つに戻ってきた束さん。何時の間に！

「たしかあーちゃん風邪ひいたんだよね。だつたらこれ渡してないね～」

と言つて俺に紙袋渡してまた何処かに行つてしまつた。ていうか何で知つてゐるんだろう？まあ束さんだから納得するけど。

「あーちゃんとはもしかして…」

「ああ、葵の事だよ。束さん、昔から葵の事はあーちゃんつて呼んでるんだよ」

…今分これ薬だよな？まあ束さんが変な物渡すとは思えないし。

「じゃあ俺一回葵のところまで行つてこれ渡してくれるよ。セシリアは先に行つてくれ」

「あ、ちょっと待つてくださいーー夏さん！」

その後俺はセシリ亞にサンオイルを塗る約束をさせられた。友達に縫つてもらえばいいのにどうして俺なんだろう？

そして俺は葵の部屋まで行つた。そして部屋に入ろうとしたら

「いらっしゃー寝てる女の子の部屋に何入るのーー！」

…部屋の中にいた旅館の従業員に止められた。どうやらこの人は葵の世話を任されてるらしい

「いや友達の見舞いに」

「何言つてゐるのーー気持ちわかるけど女の子の寝顔を見て良い理由

「はならないわよ。わあさあ行つた行つた！」

と俺を部屋から遠ざかうとする従業員さん。いやひょいと待つてくれ！

「わかりましたよー！部屋には入りません！ですからお願ひですがこれを葵の部屋に置いてくれませんか」

と言つて俺は東さんがくれた紙袋と伝言を書いたメモを従業員さんに渡した。

「まあそれならいいでしょ」「う

と言つて俺から紙袋とメモを受け取る従業員さん。そして俺を見てニヤッと笑い、

「どうひでやつき貴方友達とか言つてたけど、実はこの子の彼氏？」「ど、どんな事聞いてきた。

「いや違こますつてー！」

「ふ〜ん

なんだよーの。ニヤニヤ俺を見てーなんか恥ずかしくなつた俺は逃げるよつにその場を後にした。

そして俺は、壁がこる海に向かつ事にした。

束さん、もういい年なんだからあの服装は無いな」とか一夏に言わせようと思つたが、束に抹殺されるので止めました

蒼い空、白い雲、輝く太陽が煌めく絶好の海水浴日和の日。そして砂浜にたくさんいる自分と同年代の少女達。しかも全員水着姿。そしてこの場に男は俺だけ。弾とかに今の状況を言つたら呪い殺される事は間違いないだろう。で、そんな中俺こと織斑一夏は現在、砂浜に体を完全に埋められ頭だけ出ている状態になつていて。そして俺の前方にはラウラ。ラウラは田隠しをされ、手には木刀を持っている。

「さて、葵が言つていた日本の風物詩とやらを体験するか。割るのはスイカではないが」

「頑張つてくださいラウラさんー。わたくし達がちゃんと誘導してさしあげますわ」

「ラウラーーその馬鹿スイカ粉々にするのよーー！」

「まあ割つても食べれないけどね」

ラウラに声援をかけるセシリ亞、鈴、シャル。皆そのまま怒氣を孕んでいる。セシリ亞達の後ろでは千冬姉が呆れた顔で、山田先生はオロオロしながら俺とラウラを見て、そして… 篠は顔を真っ赤にして俺を見ている。

おかしいな、何でこんなことになつたんだろう？

葵に束さんから渡された物を届けた後、俺は水着に着替え海に向

かつた。すでに多くの生徒が着替えて海に来ており、かなり賑やかになつてゐる。俺は数人の女子からビーチバレー やサンオイル縫つて等の誘いを受けたりした。そんな中水着に着替えた鈴が俺の前に現れ、

「どう一夏、あたしの水着姿！」

と胸を張つて俺に水着姿を見せつけた。…うん相変わらず胸ないなと言つたら殺されるな。しかし鈴はタンキータイプの水着か。うん似合つてゐな。

「おお鈴、その水着似合つて可愛いじゃんか」

「か、可愛い！」

やたらと笑顔になつて嬉しがる鈴。よし、俺の返事は間違つてはないようだな。前買い物行つた時葵がこういつ場合は可愛いとか言うのが男の嗜みとか言つてたし。

そしてその後も

「どうですか一夏さん、わたくしのこの姿は…」

「どう一夏、前も見せたけど…似合つてる?」

「一、一夏! わ、笑いたければ笑え!」

と水着の感想を聞いてきたセシリア、シャル、ラウラに

「おお、似合つて可愛いぜ!」

と答えていった。まあ実際に似合つて可愛いし嘘は言つてない。しかしさウラの水着姿は普段と違つた印象を受けて…いや本当に可愛いと思えた。ツインテールがまた良い感じに映えてる。しかしラ

ウラに感想言つた辺りで鈴が

「ねえ一夏。あんたまさか取りあえず似合つてるとか可愛いとか言  
えばいいと思つて無い?」

と田を座らせて俺に聞いてきた。

「バ、バカ違うー。本当に似合つてゐし可愛い」と思つたからそいつ三つ  
てるんだよ!」

「ふ〜ん」

まだ疑いの田を向ける鈴。いやまあ… そう言えれば大丈夫だろと思  
つてたのは事実だけどな。あ、鈴の話聞いてラウラ達も俺にそんな  
目を向けている。

「何をしてるんだお前らは?」

「皆仲良く遊んでますか~」

俺が皆から不審な視線にさらされてる時、千冬姉と山田先生が俺  
達の前に現れた。あ、千冬姉あの水着ちゃんと着てる。… つん、弟  
の俺から見ても凄く似合つてゐる。いや弟じゃなかつたらマジでヤバ  
い位千冬姉の水着姿は… 綺麗だ。う〜ん、千冬姉胸大きいなこうし  
て見ると。しかも形良いし。山田先生もビキニーの水着を着てるんだ  
けど、俺の視線は千冬姉に注がれてしまふ。

「… 何を無言でじっと見てるんだ貴様」

「グハツ!」

若干顔が赤くなつた千冬姉に俺は頭を叩かれた。うん確かにすよ  
つと見過ぎてた。しかし白でなくやつぱ黒のビキーが似合つと思つ  
た俺の直感は正しかつた。

「はい一夏。すばり織斑先生の水着姿の感想は？」

「凄く似合つて綺麗だ」

鈴が横から俺に聞いてきて、俺は無意識に答えた。

「へへ、あたし達は可愛いんだけど織斑先生の感想は綺麗なんだ」と言つて俺を睨む鈴。いやちょっと待て！

「いや鈴！それは深読みしそぎだ！大体千、いや織斑先生は可愛いより綺麗の方が的確だろ！」

「つむ、確かに教官は綺麗だ。しかし…」

「普通姉にそこまではつきり言いますかしら？」

「ていうか一夏完全に見惚れてたよね。僕達と比べて明らかに反応違つたし」

うわ、なんか千冬姉の感想で皆の不満がいきなり爆発しやがった。

「いやよかつたですねえ織斑先生。織斑君から綺麗とか言われて」「ふん、別にどうでもいい」「照れなくてもいいじゃありませんか」「山田先生、ここで生徒達に砂浜での格闘術を披露しましょう。相手をお願いします」「ま、待つてください織斑先生！今は少ない休憩を満喫しましょー！」

なんか千冬姉と山田先生が言いあつてるが取りあえず無視。まあその後は「まあ一夏はシスコンだし」というかなり不名誉な理由で皆が勝手に納得した。…いやまあここで下手に反論したらまたややこしくなるから黙つたけどわ。

その後ビーチバーー等して一通り遊んだ後、お腹が空いたので海の家で何か食べる事にした。セシリ亞達は勿論、千冬姉と山田先生も一緒に俺達と食べる事となつた。

「さて、海の家で不味いラーメンとやらを食べるとするか

「ラーメン、わかつて不味い物食べるの？」

「しかしそれが日本の風物詩らしいからな」

「もしかして葵さん出鱈田を書つてゐるのでは? 山田先生、本当にこの?」

「え、え~とまあ確かに青崎さんの書つてゐる事は間違つては無いんですけど~」

「どう言えばここのか迷つてる山田先生。うん、確かに間違つてはないからややこしいんだよなあ。

「ところで織斑、篠ノ乃はどうした。いつもお前達と一緒にいるのに姿が見えないが?」

「いや俺も知らないんです。先に行つたはずなんですが。…ここに来る前に束さんに会いまして筈を探してましたから…束さんから逃げてるかもしだせん」

「束が? あいつもつけて来てるのか。なるほど、納得した」

「え、もうつてどう?」

と千冬姉と話してたら海の家の前で話題の人物の筈が息を荒くし

て膝に手をついていた。… どうやら束さんから逃げ切ったようだな。  
しかし簾の奴この薫熱いなかパークーなんか着てる。

「あ、簾どうしたのこんなに息荒くして。てかわしきから姿見えなかつたけど何処行つてわけ?」

「はあはあ、鈴、いや少し悪魔から逃げていた」

疲労困憊つて顔で答える簾。いや悪魔はないだろ。

「なにがあつたのかはわかりませんがかなりお疲れのようですね。簾さん、ちょうどわたくし達もこの海の家で食事をとりますから一緒にどうですか。休憩いたしましょう」

「つむ、一緒に不味いラーメンを食べようではないか

「…」カウラ、やけにラーメンだわるね

「あ、ああそりせてもうう。い、いやその前に」「  
と言つて俺の前に立つ簾。顔を赤くしてもじもじし、  
「あ～そ、その」  
と言いながらパークに手をかけるもまた手を放したりする。何が  
したいんだ?

「あ～もうじれつたいわね!」

と言つて鈴は簾が着ていたパークーを強引に剥ぎ取つた。

「」ひり鈴…」

「一夏に水着の感想ききたいんでしょ。まあどうせ一夏はあたし達

と同じ事言つだらうけどね！」

鈴によつてパークーを取られ、その下に隠された水着はつて、え？

「あ、あれ筈、その水着は……」

「ど、どうだ一夏！私の水着姿は！」

顔を真つ赤にして聞いてくる筈。白のビキニで機能性重視の作り。その水着は…そう先日水着を買いに行つた時、千冬姉が黒の水着以外で候補に持つてきたあの水着だつた。そしてそれは…あの日思い浮かべた通り筈に、いや想像以上に似合つていた。しかし筈も千冬姉同様、胸デカイな。そしてその白い水着は、筈の体に本当に合つていて…うわヤバい。なんかすごく氣恥かしい。

「どうなんだ一夏？」

もはや耳まで真つ赤にして上田遣いで俺に聞いてくる筈。輝く太陽の下その日差しにむらされたその姿に

「ああ、まあなんだ。綺麗だな」

と思わず言つてしまつた。

「き、綺麗だと…」

俺の言葉を聞いてもはやゆでダムのよつになつた筈。あ、両膝が地面についた。

「だ、大丈夫か筈？」

「キレイキレイキレイキレイキレイキレイ」

なんかうわ言のようにキレイを繰り返し言つ筈。おいおい大丈夫か？ん、何やら背中から殺氣がする。恐る恐る振り向いたら…鬼が四人いました。

「ふう～～～ん、僕達は可愛いんだけど第だけ綺麗なんだ」

「一夏さん、この違いを明確に答えて貰えませんか?」

「ねえ、一夏ついでにさつきの態度の違いも教えて貰おうかしら」

「私以外の女に私以上の贅沢を送るとはな。嫁失格だな」  
「うわなんか凄い怒つてるし!あ、千冬姉そんな呆れ顔しないで助  
けてくれよ。

「知らん。ガキ共の色恋沙汰など興味も無い」  
「ひでえ。や、山田先生助けて!」

「織斑君、頑張つてください」

いや何ですかその極上の笑顔は!面白がってますよね絶対!

「さてと、一夏。懺悔の時間は終わった?」

「ひつして俺は鈴達に生き埋めにされる事となつた。

今一夏はラウラ達にスイカ割りの刑に処されている。理由は一夏  
が私だけ水着姿を見て綺麗と言つたかららしい。それを聞いて私は  
頬が緩むのが止まらなくなる。そうかそうか一夏、私だけ特別に綺

麗と言つたのか。」、「これはあれか！私は他の誰よりも一夏に対しリードしてゐると言つた事なのか！」

「ずいぶんと嬉しそうだな篠ノ乃」と、私の水着を見ながら千冬さんが私に言つてきた。ええ、物凄く嬉しいです。つて千冬さん、何故私を睨んでるのですか？いや、これは…私の水着を睨んでいる？

「ところで篠ノ乃。その水着ずいぶん似合つてるな。良いセンスをしている」

「いえ、これはその実は今日学園を出発する前に葵に呼ばれまして、その時渡されたんです。なんでも一夏にこれ着て見せたら好感度上がる事間違い無しかあいつが言いまして。しかし、そのどいつやら本当だつたようで葵に感謝します」

「そうか青崎が…」

そう言つて千冬さんは溜息をついた。え、何故？

「いやそうか、なら青崎に礼を言つとくんだな」

と言つて千冬さんは山田先生と一緒に海の家に入つていいく。そして一夏達の方を見てみると

「…………待て…………！」

「誰がまつか…………」

どうやらエレウを展開して生き埋めから脱出した一夏をセシリ亞達が追いかけるようだ。長くなりそうだし私も千冬さんと同様に海の家に入る事にしよう。

あやうく殺されそうになつたりもしたが、まあなんとか落ち着いた鈴、シャル、セシリ亞、ラウラから半殺しにまけてもらひ、ボロボロになつたがその後は皆で海の家で食事をし、午後も皆で楽しく遊んで楽しい時間を過ぐした。ちなみに

「葵の奴嘘を言つてー凄く美味しいではないか」このラーメンはー」

「うそ、確かに美味しいね。不味いと覺悟してただけに吃驚だよ」

「いえわたくしは不味いですわよ……」

とセシリ亞を除き俺も鈴も筈もラーメンは美味しいと絶賛した。  
まあこれをここ以外で食べたら食べたもんではないんだけどな。  
まあ初日の自由時間、葵がいないのは残念だつたが皆と一緒に良い思い出を俺は作る事が出来た。

「ふ〜ん、よかつたね楽しそうな思い出が出来て。私は田が覚めた  
らもう沈んでいく夕陽しか見れなかつたけど」

「いやそれはお前が

「い〜もんこ〜もんど〜せねえ

時間も過ぎ、今俺達は大宴会場で夕食を食べている。葵も風邪が完全に治つたことなので、俺達と一緒に夕食を食べている。

「しかし目が覚めた後束さんがくれた薬を飲んでみたけど、怖い位一瞬にして完治したわ。起きた当初はまだ体だるかったのに。さすが天才としかいいようがないわ」

「全くだ。束さんに感謝しないとな」

「ああ～～～。どうして私はもっと早く目が覚めなかつたのだろ…。せめて毎日でも一回起きて薬を飲んでれば…」

「まだからしかたないだろ」

「う～～～

さつきからずっとこんな調子で嘆いている葵。気持ちはわかるがな。そしてその気持ちを紛らわせようとつきから恐ろしく食べまくっている。病み上がりだつてのに元気なこつた。

「まあ元気だしなよ葵。海ならまた夏休みにでも畠と一緒にこうりよ」

可哀想に思つたのか、シャルが葵を元気づけている。

「そうですわよ、葵さん、夏休みは今日以上に畠と遊びましょつ」とセシリ亞も同調。俺もそうだ次また皆と遊ぼうぜと励ました。そのかいもあつて葵も次第に元気を取り戻し、

「ええ、そうね！次回リベンジすることにするー。」  
と笑顔で夏休みになつたら遊びにいくと決意した。

「ああ、ヒルヌード一夏」

「なんだよ」

なにやら一ヒルヌードした顔で俺に聞いてくる葵。どうやら本当に調子を取り戻してきたなこいつ。

「筍の水着姿はどうだったかな。凄かったでしょ？」

「そういうやあればお前の仕業だったな。ああ、凄かったよ。あやつ殺されかける位な」

「は？ それは筍に惱殺されかけたってこと？」

「違う…まあまた今度話すよ」

「アリ」

といつてまた食事を再開する葵。勝手に刺身を追加注文したりしてるけどいいのか？

「そういうや筍が着てた水着、もしかしてお前あの時千冬姉と一人だけでどつか行つてたけど、その時買つたのか？」

「ピンポーン」

「しかし何で筍に？ それにもしかして、今日お前が着る予定だった水着つて」

と俺が最後まで言い終わる前に、葵は人差し指を唇に当て、笑顔で言った。

「それは秘密です」

## 臨海学校（初回自由時間）（後書き）

アニメの千冬姉水着シーン、あれは弟としてヤバいだろ。

そして一夏は巨乳好きなイメージがある。いや私の妄想ですが。

風邪が全快した葵と夕食を食べた後、俺は千冬姉の命令で葵を俺と千冬姉の部屋まで連れて行つた。千冬姉がら大事な話があると葵に伝えたら急に顔つきが変わり、「わかった」と堅い声をして俺と一緒についてきた。何か心当たりがあるのか？と聞いたら「ええ、私は代表候補生だから…」と意味深な台詞を神妙な顔と声で言つたのだから、どれだけ重要な用があるのかと思つたが…

### スパンスパンスパン

「~~~~~！」

部屋に入り千冬姉に会つた葵は、問答無用で連續して出席簿で頭をどつかれていた。痛みで部屋を「ゴロゴロする葵を千冬姉は冷めた目で見ている。…ああ、そういうや今朝風邪が治つたら葵に出席簿が待つてるとか言つてたっけ。

「……お、織斑先生。何故病み上がりの私にこのよつなひどい仕打ちを。てかこれはもう立派な体罰でP.T.Aとがが見たらヤバいのでは？」

頭をおさえかなり涙目で抗議する葵。ああ、こいつ熱のせいで覚えてないな。

「青崎、お前今朝私の前であれだけ注意してきたのに男口調で話をしただろ。これはその罰だ。ちなみにお前を罰するために叩くのは政府公認だ。お前が日本の代表候補生でいるつちは口調に気を付け

る」

千冬姉の言葉を聞き、葵はがつくつとその場に崩れ落ち、「別に

「ところで織斑先生、葵に大事な用があるって言つてたけどまさかこれの事ですか？」

「ああ」

「え、本当にこれだけ？」

「ええ……」れだけのために私呼ばれたんですか！」

あ、葵が一番驚いてる。まあここに来る前あれだけシリアスな空氣だしてたからな。蓋を開けたらただの愛の鞭だつたし。再度いじけだした葵を無視し、千冬姉は急に布団を敷き、その上につづ伏せになつた。

「さてと私はもう明日の朝まで仕事は無い。見周りも今日は山田先生が担当だしな。だからそうだな、一時的に教師の肩書を降ろそう。今からは公私の私だ。だから一夏、久しぶりにマッサージしてくれ……千冬姉、何か言い訳くさいな。でもいいか。つまりそれほどマッサージして欲しいって事だし。

「わかつたよ千冬姉、じゃあ始めるぞ」

「ああ頼む」

さてと、始めますか。おお、凝つてるなあ千冬姉。これは本氣でやらないとなあ。

マッサージを始めて結構経ち、千冬姉の体も大分ほぐれてきて、ふいに葵の方を向いてみた。さすがにもういじけてはいなかつたが、何故か扉の方をじつと見てる。そしてニヤッと笑うと

「一夏、織斑先生をやり終わつたら、次は私をお願い

と妙に大きな声で俺に言った後、布団を敷いてうつ伏せになつた。何だ急に。まあ別にかまわんけど。

「一夏、私は充分満足した。だから次は葵の相手をしてやれ。なんだ千冬姉もニヤニヤして。じゃあ次は葵の番だな。」

「わづこや一夏にやつてもりつて初めてかな。いつも千冬さんによつてるのは聞いてたけど」

「そうだな、今日が初めてだな。葵、千冬姉で鍛えられた俺の腕前で気持ちよくしてやるよ」

俺がそつと何故か口に手を当て笑いを必死で耐える葵。何で？千冬姉の方を向くと葵と似たような状況になつてゐる。だから何で？

「じゃあ一夏、……初めてだから優しくしてね」

…いや葵、何でそんなに艶っぽい声出してるんだよ。

「わかつた、なるべく痛くないようになります」

…何故かさらに笑いを必死になつて堪えよつとする葵と千冬姉。ああ、もういいや、さつさと始めよう。

うーん、葵も結構凝つてるな。やつぱ毎日体をあれだけ動かしてるからなあ。ここは温泉宿だから後でゆっくり入った方がいいかもな。と、意識を逸らさなければならぬほど、…葵の体の感触はヤバい！何この柔らかさ！千冬姉とはまた違つこの感触。はつきり言って気持ち良い。いかん、俺の方がハマつそうだ。

「あ、そ、そー、うん！」

顔を赤くして気持ちよさそうに悶える葵。…いや何この声？いく

らなんでもや。

「はあ～～～」

恍惚した表情で俺のマッサージを堪能してくるなあ。…しかし葵、わざとそんな顔してるだろ。「ひへ、千冬姉がなんか一ヤ一ヤしながら俺を見てるし。

「あ、あ～『気持ち良』。今日初めてやつし欲しければ『まんに氣持ち良』にならむつと早く『えよ』よかつた」

「あ、そりか。ならまたやつて欲しければ『まんに氣』よ。やつしやるから

「やへ、じゃあ毎晩やつてもらおつかな」

「いや毎晩は勘弁してくれ」

「甲斐性ないなあ」

「いやこれは甲斐性とかの問題では無いだろ。ヒヨヒヨ急に葵は起き上つた。

「おこま」

だ終わつてないぞと言つて終わる前に千冬姉が俺の口を塞いだ。そして喋るなどいうジロスチヤーをした後、足音を殺して扉に向かう千冬姉と葵。そして千冬姉は強く扉を叩くと「――「へぶ――」」

「」といつ声が響いた。そして扉が開いたら、そこには簫、鈴、セシリア、シャル、ラウラが顔を真つ赤にして床にうずくまつっていた。

「はあ～い、皆さん～楽しい妄想はできたあ？」

葵がそつ言つて、全員涙目で

「 「 「 「 「～～～～～～～～～～～～～～～～～～」」」

と声にならない叫びをした。

「紛らわしいのよ全く！」

「まあ常識的に考えたら」「でやんないことするのはあり得ないけどね……」

何故か部屋を盗み聞きしてた五人に、俺が千冬姉と葵にマッサージをしていたと伝えたら、皆千冬姉と葵に怨みが籠った田で見つめている。皆そんなにマッサージが羨ましいのか？

その後はマッサージをしたため汗をかいた俺は温泉に入りに行つた。葵も一緒に行こうとしたが、千冬姉に止められ部屋に残された。

あ～もひ、なんのよこの状況！さつきは千冬さんと葵が共謀してあたし達に変な想像させて身を悶えさせたと思つたら、今は一夏は温泉に行って田の前に千冬さんがあたし達の前に座つて見てるしお……しつかしさつきのはあたし達の勘違いで本当によかつたわ。正直聞き耳立ててあたし達の絶望感は半端じゃなかつたもの。いやだつて、千冬さんがいるのに止めもせず葵にやってやれとか言う

から。つまりそれって千冬さん公認の仲っこいじや…と思ひちゃうじやない。葵だけなら全員ISに乗つて部屋破壊しだらうけど。

「お前達に少し聞きたい事がある」

一夏が部屋を出た後だんまりなあたし達を一瞥した後、千冬さんはあたし達に向かつて言った。

「今一夏がいないから聞きたいが、…お前達はあいつのビビがいいんだ?」

あ、やっぱり姉として気になるんだそういうの。その後、篠、あたし、セシリ亞、シャルロット、ラウラと千冬さんはあたし達に理由を聞き、あたし達も答えて言った。千冬さんはそれを聞いて頷いたり茶化したりしたりして、

「では葵、お前の理由を聞きたい」

最後に葵に質問した。え、でも葵は違つんじゃないの?

「私ですか? そうですねえ……色々ありますがやっぱり一緒に居て楽しいことですね」

「そうか、一緒にいると楽しいか」

とニヤリとする千冬さん。え、ちよつと待つて!

「葵、お前一夏の事が好きだったのかー?」

あ、篠に先越された。

「そりゃ好きだけど。友達として。…こや誤解をせるような事してそれは謝るけど、一夏に対する好きは英語で言つて一直都。決して10很深じゃないから」

何を当たり前な事をという顔して言つ葵。…なんだやっぱうそう

か。簾も他の皆も葵の言葉を聞いて納得してゐるわね。千冬さんは…あれなんか顔険しくない？

その後は千冬さんから一夏はやらんと罵られ、一夏が欲しければ奪い取れとか焚きつけられて解散した。

それにしても……やるか馬鹿とは。一夏もシスコンだけど、千冬さんも充分ブランよね…。

風呂からあがつて部屋に戻ると、葵達の姿は無く千冬姉だけだった。

「あれ千冬姉、葵達は？」

「もう夜も遅いだろ。明日は早いからもう帰らせた」  
ふうんと相槌打つて俺は急須にお湯を入れ、自分の分と千冬姉の分を作つた。

「はい、千冬姉」

「うむ、悪いな」

ふふ、風呂上がりに飲む熱いお茶つてのもまた美味しい。

「なあ一夏」

と言つて俺の前に座る千冬姉。その顔は真剣な表情をしている。

「ちよつといい機会だからお前に訊きたい。一夏、お前は将来の事は考へてるか？」

「将来の事？」

「ああ、今お前は世界で唯一の男のIS乗りとしてここにいる。なら将来は私同様ISに関わって生きていいくのか？それともISとは関係ない別の道を歩むのか？…もつともお前にその道を選ぶのは難しいがな。なにしろ世界で唯一のIS乗りの男なのだから」

「そうだなあ、考えた事無かつたなあ。でも確かに千冬姉の言つており、俺は多分ISに関わる仕事を目指すと思つよ。ていうかそれ以外選択肢ないと思つし」

「そつか。ならもしお前が競技者としての道を歩むとした場合だが…止めておけ。現状では私は勧めない」

「え、なんで？」

「葵がいるからだ」

そういうつて千冬姉はお茶を飲みほし、真剣な顔で俺に囁つた。

「一夏、一つ聞くがお前は葵が来てから何度もISで勝負したな。勝率を語つてみろ」

「…全戦全敗。でもそれがなんの関係が

「おおありだ馬鹿者。あいつは日本の代表候補生だぞ。そしてこまま順当に行けば代表は確実だ。私が保証する。そうなるとお前はどうなる？代表かけて戦つてもお前は負けるだけ。ちなみにお前の

「アは日本政府が保管している分だと言つ事を忘れるな。他国に行  
いつもんなら問答無用で百式は没収される。で、お前は百式以外の  
機体に乗つて鈴等の他国の候補生に勝てると思つのか？無理だろう  
が」

「う、そ、それはそうだけど……」

。

「はつきり言おひ。競技者の道を歩むなら、葵はお前にひとつて最大  
の障害として立ちはだかる。同じ近接格闘特化型だが、実力に差が  
ありすぎだ。しかしお前は葵がもつとも得意とする土俵で戦い勝た  
なければその道は開かれない」

千冬姉の言葉を聞き、うつむく俺。今まで考えた事は無かつたが、  
いつもはつきり言わると…

「強くなれ」

「え？」

「だから強くなれ。今はお前と葵との差は恐ろしく離れてるが、死  
ぬほど努力しろ。田指すなら血反吐吐いてでも強くなれ」

「でも千冬姉わつきを勧めなって…」

「現状ならな。しかし、お前が本気で田指し実力をつけるなら止め  
はしない」

そう言つて微笑する千冬姉。

「ま、決めるのはお前だ。よく考えて結論をだせ。そしてさつき言  
つた道を目指すなら…私も協力してやる。なに、全くの不可能つて

わけじやない。お前だつて昔は葵より剣道強かつただろ？

…いやそれはもう6年も前の話じやないか。

その後は、千冬姉の朝が早い事もあつて寝る事にした。布団に横になりながら、俺は千冬姉に言われた将来の事について考えいた。確かに今後葵に負けっぱなしというのは幼馴染抜きにしても悔しいが…別に今の俺は代表になつてモンド・グロッソに出たいという気持ちはありません。むしろそれに出場しようとする葵を応援してやりたい位だ。おそらくこれは千冬姉の警告なんだろう。

もし、私を目指すなら今のままで無理だ、もしそれを目指すなら死ぬほどの覚悟がいる、と。

俺は…何を目指すべきなんだろうか。

「ねえねえアオアオ～、何で空手習つてたの～？」

「私の父が世界大会優勝する程の格闘技の達人だったのよ。知つてるかな？青崎誠つて名前だけど」

「あ～知つてる！確か20年前世界格闘技大会で優勝した初の日本人でしょ！それ以外でも数々の大会で優勝した！」

「や。で、その父から『ヨーロッパーション代わりに空手を幼い頃から仕込まれたつ訳。…まあ理由もあつてね」

「理由? なにそれ?」

「まあ隠してもいざれバレるかもしないから…まあ言っちゃおつかな。私の母ね、五歳の時病気で死んじゃったのよ。ってちょおつと暗い顔しないで! 大丈夫! もう大丈夫だからさ! 悲しみは乗り越えてるから! で、話の続きだけどまあ格闘技一筋な父はどうやって息子と交流をかわせばいいのかわからなかつたのよ」

「それで息子に空手を教えたつていうわけ? …なんていうか」

「でも私も元々体を動かすのは好きだつたからね。それに空手に打ち込むことで母の悲しみも紛らわす事もできたし。父もその時が一番良い顔してたからその顔を見ると安心するし。ああそれから空手だけじゃないわよ。父は色々な格闘技覚えてたから空手以外にも古武術や中国拳法の技も一部教えて貰つたわね。…ただ毎日朝五時に起きて朝鍊されたけど、今は平気だけど昔はかなりしんどかつたなあ…」

「そういうや剣道もやつてたよね、篠ノ乃さん家の道場で。何で空手やつてたのに剣道も始めたの?」

「ん~それは一夏が千冬さんの影響で剣道習い始めたから。その間一緒に遊べないから私も参加することにしたのよ。まあ門下生が千冬さんと一夏と篠しがいなかつたから歓迎されたつけ

「余計な事は言わないでいい

「痛！」

「へへそりなんだ。じゃあじやあ今はしののんが剣道一番強いけど、当時はどんなんだつたら？」

「し、しののん！？いや当時は…最初は私が一番だったが、小学四年生になる頃は一夏が一番強く、その次に葵、…最後に私だ」

「えへ、意外！織斑君強かつたんだ！」

「昔はな。しかし今は…、全く情けない！」

「まあ落ち着きなさい篠。一夏にも事情があつたんだし」

「それはわかるが…」

「まあ鈴と遊び倒してたつてのも大きいかもね」

「やつぱり殺す！」

「まあまあ落ち着いて篠ノ乃さん。そういうや青崎さんと篠ノ乃さん、よく屋上で他の専用機持ちの子達と一緒にお弁当持つて食べてると、料理上手いよね」

「まあね。さつきも言つたけど母が幼い頃に死んじゃつたから。父は…家事がお世辞にも上手いとは言えなかつたから私が必死になつて覚えたし。一夏の家も似たよつなもんだからお互に家事について一緒になつて覚えていつたわよ」

「へへそりなんだ。じゃあしののんも、その時一緒になつて覚え

たんだ」

「え、あ、そ、やうだー。」

「…まあやつこいつてあがむ」

「黙れ葵」

「ふ～ん、じゃねー。」

千冬さんから早く寝ると言わね葵と一緒に部屋に戻ったが、布仏さん達からもう延々と質問をされ続けている私と葵。

…頼む、もう勘弁してくれ。明日起きるだらつか?

ハ巻出ないからわからないけど、順当に行けば簪が日本代表になるんだろうか？

しかしながらかんだで一夏も男で唯一のT-Sに乗りつてことで国籍関係無く特別枠でモンド・グロッセ出場しそうな気がする。男達の最後の希望として

## 番外編 久しぶりのカルテット（前書き）

いきなりですがこれは第四話よろしくと第五話日常の間にあつた話です。

## 番外編　久しぶりのカルテット

それは葵が登校して数日経つた時の出来事だった。

「ねえ一夏、明後日用事ある？」

食堂で夕食をいつもメンバーで食べていたら、葵はそう俺に話しかけた。

「明後日？別に無いが？」

「よかつた。次に鈴、明後日用事ある？」

「あたし？いや無いけど。どうしたのよ急いで？」

「いや用事ないなら明後日私と出掛けないと思つて  
俺と鈴を交互に見て言つ葵。いや別に構わないけど、どうして俺  
と鈴だけなんだ？」

「何故一夏と鈴だけ誘つ葵？」

誘われなかつたのが気に入らないのか、不満げな顔をして言つ算。  
そして名前を呼ばれなかつたセシリ亞達も算同様面白くないって顔  
をしている。

「じめん。中学の時の友達に会いに行つたと黙つてゐるから」

中学の時の友達？ああ、もしかして

「葵、もしかして弾に会いに行つたわけか？」

「当たり。あいつにはまだ私がどうなつたかとか説明してないし。

話しておこうと思つて。…一応聞くけど、一夏も鈴も弾にもう私の事メールや電話で話したりした？」

「いんや。やっぱ」うつのは直接本人から話すべきと思つたからな」

「あたしも。とこつか私そついや日本に来てから弾に会いに行つてないわね。ちよどい機会かも」

その言葉に俺も葵も呆れた。いやお前、日本にいた時はあんだけ一緒に遊んだだろうが。顔ぐらい見せに行けよ。まあ俺も弾に会いに行く時誘わなかつたのも悪いけどさ。

「…いや鈴。あんたそれはちょっと薄情じやないの？まあいや。久しぶりに四人揃つて遊びに行きますか」

「そうだな。しかし今の葵見たら弾吃驚するだろうな」

「最悪信じないかもしれないわね」

「…だから一人も一緒に来てほしいのよ。まあ顔はそこまで変わって無いとは思うけどやっぱり体つきは激変してるしね」

：確かに。一年前よりも少し身長伸び髪も伸び、体つきも完全に女になつてるしな。

その後行く事が決定した俺達は昔話に花を咲かせた。そんな俺達を篝達は羨ましそうに眺めていた。

それから一日後、俺達は弾に会いに五反田家に向かっている。一応弾に行く事は伝えてるため、家で待つてゐるだろう。ちなみに弾には俺と鈴が行く事しか伝えていない。葵から黙つてゐるよう頼ま

れたからだ。理由は

「こや吃驚させようと思つて」

…りしご。まあいにけどわ。

「ところで葵、あんた何で工学園の制服着てるの？」

鈴が葵の服装を見て呆れている。俺も鈴も私服姿だが、葵だけ何故か制服を着ている。

「いや女の子らしい服がこれしかないから。この格好の方が現状を説明するのにむいてるかなと思つて」

「制服が一番女らしい格好つて…。まあ確かに女子を象徴する服装だけど、葵あんたも女として生きてくつて決めてるんでしょ。ならそれらしい私服もちゃんと用意しなさいよ。なんならあたしが選んであげるわよ?」

「まあ確かにそう決めたのは私だしね。じゃあ今度お願ひしようかな」

「まかせなさい。似合うのを選んであげる」

葵と鈴が楽しそうに会話してるのを見ながら、なんか不思議な感じがする俺。最近じゃ千冬姉に矯正されてか、部屋で俺と一人の時位しか昔の口調で話さないもんなあ。いや鈴達も千冬姉に贊同し、葵が昔の口調で喋つたら注意するよにしてるせいもあるけど。してもこの一人、二年前よりも仲が良くなってるな。やはり同性になつたからか?

そんなやり取りをしながら、俺達はその後五反田家に到着した。

店に入ると中には厳さんと弾と蘭とお客さんが数人いた。厳さんは中華鍋を振るい何か作っている。蘭は客に料理を運んでおり、弾は厨房で皿洗いしている。俺の姿を見た蘭は眼を見開き

「一、一夏さん…え、どうしたんですか急に…」

と酷く驚きながら俺に話しかけてきた。…いやその前に料理を客に運べよ。

「おお一夏、早かつたな。そして鈴！久しづりだなー元気そうでなによりだ。で、ところで…お前達と一緒にいる」

厨房から弾が出て来た。そして俺と鈴の後ろにいる葵が誰か聞こうとする前に

「会いたかったわ！弾！」

と葵がいきなり弾に抱きついた。は？

「え、い、いや…ええ！」

急に葵に抱きつかれ、顔を真っ赤にしてうろたえる弾。…まあ弾からすればいきなり見知らぬ美少女から抱きつかれてるからな。

「え、えーと、誰君？」

顔を真っ赤にしながら葵に尋ねる弾。その瞬間葵は泣きそうな顔をしながら弾から一步離れた。

「そ、そんな酷い！昔あんなに一緒にいたのに！私の事忘れたの！」

と言つて両手で顔を覆い泣く真似をする葵。多分顔をよく見られたら気付かれるかもと思つて隠してゐるんだなあきつと。

「え、昔一緒にいた？えへっと」

「一緒にお風呂にも入った仲なのに忘れるなんて…」

その台詞を言つた瞬間、空気が確かに軋んだ。まあ確かに一緒に銭湯に行つたから嘘は言つてないが。

「え、えええー風呂ー一緒にー」

さらにいつの間にか弾。葵はさらに何か言おうとしたが

「この糞ガキがーーお前、一体この子に何をしたーー」

「グハアツ！」

厳さんに思いつき弾は殴られた。蘭も追い打ちで「この女の敵ー」と叫びながら弾を蹴つっている。

「…いや葵、さすがにこもづばらしなさこよ」

鈴が葵に呆れた声で言つてくる。さすがに弾が不憫に思えてきたんだろう。

「そうね。ですがにやつすきあひやつたかな。あのーすみませんー実は私は…」

その後葵は弾達に正体をバラした。弾は葵の名前を聞き、事情があつて女になつたと話したら「ハア！？」と叫んだが、葵の顔をよく見て「…マジか？」と俺達に訊いてきた。俺と鈴が頷くと「嘘だ

「……」と茫然となつたが、葵が中学ん時の、しかも俺と弾しか知らない事を幾つか話したら

「……なんていつた。」  
「本当に葵だ」とよつやく信じた。ちなみに敵さんと蘭はなかなか信じなかつた。  
だが俺と鈴、そして納得した弾が保障することでよつやく信じて貰えた。敵さんは

「長生きしてみるもんだな……」

と呟か、蘭は

「……狡い」

と葵の胸を凝視しながら呟いた。ちなみに鈴もうんうんと頷いていた。

その後俺達は積もる話を弾の部屋ですることにした。

「しつかし一年前急に消えたと思つたら、女になつて現れるとはなあ。さすがに予想外すぎる。そしてさつきはよくも俺を騙しやがつたな」  
ジト目をして葵を睨む弾。まあそのせいで敵さんに殴られるし蘭に蹴られるはされたもんな。

「わ一一わ一一。いやあお前の反応は面白かった」と笑う葵。真つ赤になつてつぶたえてたもんな弾。

「うつせーーつーか一年前はよくも黙つてどつか行きやがつたな。心配したんだぞ俺は」

「…ああ、それについては本当に」「あん。謝るよ」

「いや別にもうここよ。お前が元気だったってことはわかったから」

「すまん」

さすがにしおりしくなる葵。そんな葵を弾はしばし見て唸つた。

「…お前本当に女の子になつたな。しかも極上の。いや中学いた時から女が男の制服着ると勘違いしてた奴が多かつたが、それでも男と認識されてたが」

と言つて葵の胸を凝視する弾。恥ずかしくなつたのか葵は腕で胸を隠した。

「スケベ。厳さんにてセクハラされたと言つべ」

「いやそれは勘弁してくれ！…ていうか葵、余計なお世話かもしかんが話し方替えた方がいいぞ。今の姿で昔みたいに話したら違和感ありすぎまる」

「あ、弾もやつぱやう思つ。あたしもやう思つのよね。いやさつきまでは弾に信じて貰うため昔の振る舞いさせてたけど、もつそれもいいわよね。葵、昔の口調はもう禁止！わかつた！」

いいわねと葵に念を押す鈴。それを聞いてえ~つて顔をする葵だが、鈴に睨まれ渋々納得する。

「はいはいわかったわよ。鈴は厳しいなあ」

「これもあなたのためでしょ」

やいやこ言う一人を眺める俺と弾。なんか鈴が葵の姉さんみたい

に見えるな。

「なあ一夏、なんか鈴と葵、昔よりも仲が良くなってる気がするな。いや前から良かつたけどそりでな」

「やっぱお前もやつ思つか。やっぱ同性になつたのが大きいんだろな」

「じゃあお前とは疎遠になつたのか?」

「いやそれはないと俺は思つた。昔同様お互に馬鹿やつたりするし。同室だけど氣まづく感じる事は無いしな」

「はあ!お前葵と一緒に部屋なのか?」

かなり吃驚した顔で俺を凝視する弾。

「ああそうだが、何を驚いてるんだお前は?」

「いやだつて今は葵は女だろ!なのに同室つて。ってそういうやその前に一夏の幼馴染とも一ヵ月位一緒に生活してたとか言つてたな。

…何考えてるんだ?IS学園は?」

実は幕の後にまた別の女の子と同室になつたんだが、ややこしくなるだけだから言つのは止めておく。

「ま、葵が女になつたからといって、お前がそれを理由で疎遠になるわけないか。中学の時初めてお前たち一人に会つたが、一旦見て『ああ、この一人仲が良いな』と思つたしな。

それだけあいつが急にいなくなつた時のお前の反応は…正直痛々しかつた。だからまたお前ら一人が出来て良かつたと俺は心底思うぜ

「ああ、俺もだ」

…あの時は本当に絶望した。あの頃は千冬姉も家にいなかつたら余計寂しかつた。一週間は飯もろくに喉を通さない日々が続いた。鈴と弾が俺を励ましてくれなかつたら俺は本当に潰れてたかもしない。

「鈴も帰つてきてよかつたよ。お前結構強がつてたけど、鈴が中国に帰つた後しばらくは俺の家に入り浸りだつたもんな。鈴はきちんと別れを告げたからそこまで大きなダメージ無かつたようだが、それでもかなり堪えてたなお前」

「…そりやな。笄を始めこいつも親しくなつた奴が俺の前から消えていつたら落ち込まない方が変だろ。まあ鈴はまだ笄や葵と違い、別れをきちんと言えたのはせめてもの救いだつたぜ」

いや一時期は本気で俺と仲良くなる奴は俺の前から消えるんだと思ひ詰めたりしたな。…家族の千冬姉だってあんまり家に顔出さないせいで。しかし、

「弾、さつきから俺が寂しい寂しい言つてたがお前だつてそうだつたじやねーか。葵ん時も顔真っ赤にして怒つてたし鈴がいなくなつた後は妙に中華料理食べるの多くなつたなあそいや」

「ニヤニヤしながら俺が言つと、

「いやそれはそうだがお前よりはマシ」

しつと言いやがつた。…うん否定できないかなこりや。一人の付き合いの長さ的に考えて。

と、俺と弾が話をしていたら

「へへそんなに寂しかつたんだ。…ごめんね一夏悲しい思いさせで

「あたしの存在の重さがよくわかつたようね。これからは大事にしない」

いつの間にか俺達の会話を聞いていた葵と鈴が、俺の頭に手を置いて「よしよし」と言しながら撫でまわしてきた。つてやめろこら。ガキか俺は！

「バカやつてないでそろそろ始めようぜ」

と言つて弾は俺達にそう言つた後押入れを開け何かを探し始めた。葵が言い終わる前に弾は押入れから物を取り出し、俺達の前にそれをどんと置いた。

「」のメンツが揃つてるんだ。なにやる事は一つだろ」と言つて俺達の前に置いた麻雀卓を見て笑つた。

「ん、まさか弾」

葵が言い終わる前に弾は押入れから物を取り出し、俺達の前にそれ

「ふうん、IS戦じやお前らの中じゃ一番葵が強いのか

「今はね。あたしがそのつけ一番強くなるわよ」

「ふうん、まあ頑張れよ。……つと、取りあえずピンフ親だから千五百点」

タン タン

「つー 夏に鈴。さつきから話聞いてれば葵つて専用機持つてないんだろ。なのに負けるつー…」

「つー さこわねーでも一夏は全敗だけど、あたしは葵に勝ったことあるわよ」

「いや鈴、それは打鉄の整備が甘かったのか私が酷使しそぎたのかはわからないけど、鈴を殴りとばしたら殴った右手が砕けたせいでしょ。そのせいでシールドエネルギーは減るし片手だけになつたら最終的に鈴にやられたけど、結構僅差まで追いつめたけど」

「つー セコ わねー勝ちは勝ちよー」

「…まあお前がそう思つんならそれでいいけどな」

「全敗のお前もさうこう要因がなければ勝てないだろーがな。……つと、リーチな」

「ま、私もラウラには勝てないんだけどね」

「くーお前にも勝てない奴がいるんだな。ロン。メンタンピン一発三色イーペーロードライチー！一万四千点な」

タン タン

「セコ こやお前らはヒヒ学園では麻雀やんねえの？」

「ヒヒ学園じややらないわね。他に出来る子知らないし三人打ちじやつまらないし」

「麻雀やる暇があればHSの訓練やれと千々石さんと言われそうだし」

「てーか俺達だけで遊んでたら篠達が不機嫌になりそうだしなあ」

「ふーん、色々事情あるんだな。ま、だから弱くなってるのか。チ  
ートイドラドラ六千四百点」

「ひひまたお前かよー！」

タン タン

「ま、俺は篠さん達とたまに打つたりしてるからなあ。お前達に勝  
つても不思議じゃねーよ」

「ひひせーー今見てみよ」

「ま、あたしもようやく勘が取り戻してきたからね。そろそろ反撃  
しようかなあ」

「しかしこうやって四人で卓を囲ふると懐かしいわね」

「…そだな。中一の頃こいつやって一夏の家で夢中になつて遊んで  
たら気が付いたら朝だつたつてことがあつたよな」

「…あの時は大変だったわ。連絡もせず朝帰りしたからあたしの両  
親が相当心配してたわね。しばらくは夕方五時になつたら帰りなさ  
いと言われたし」

「俺の家の電話がちょうどその時壊れてたからな。当時皆携帯持つ

てなかつたし鈴と弾と葵の親達マジで心配してたな

「私も心配した親から思いつきり殴られたっけ。あれは痛かったなあ。でもあれがきっかけで全員携帯を親からもたされるようになつたのよね」

「俺も爺さんから殴られるしじばりへ店の手伝いを強制されたな。つたく一夏め！自分の家だからあとがめなしこざるによなあ」

「金くそうよね～。つてどりひでシモーメンチンタンインコヤンペー」「一」「三倍満」「万四千」

「げえ何時の間に一葵このやひつ……」

タン タン

「そつこいえば何で葵だけ専用機ないんだ？」

「話はあつたけどコアの数の都合上と一夏の専用機の方が優先されたからねえ」

「だから葵、それで俺を責めるなよ……つて来たーリー即ツモオモテ  
3ウラ3オヤバイーおらー」「万四千よこせ」

「わつ、一夏も調子づいてきたか」

タン タン

「でもさあ、前葵の話聞いてたらあんたが訓練してた所に日本の代

表候補生いたのよね。あんたそいつより強かつたらしこじゃん。その子の専用機取り上げてあんたにあげればいいの」

「そう簡単な話じやないでしょ。専用機つてワンオフアビリティ開発の意味も強いし。…色々と複雑な理由あるのよ、つてリーチ」

「なんか聞く限りその専用機持ってる代表候補生つてEVA学園にいないうだな。どこのこいるんだ? とリーチな」

「う、葵も弾もリーチとはね…。でもそういうやうね。確かに4組にいる子が日本の代表候補生とか言つてたけどその子の機体は完成してないとかいってたっけ」

「あ、鈴。更識さんは違つから。更識さんは別の施設で訓練してたから私も面識無いわね」

「じゅあびー行つたんだそいつ? あ、リーチ」

「……さあ。私も知らないかな。鈴ーさあトリップルリーチになつたけどじゅあー?」

「……なんか話逸らさせたいみたいね。まあ深くは追求しないであげるわ。ふ、ふ、ふ。あんた達みんな甘いのよーこれでもくらーなさい!」

タン

「「「」」、国士無双!...!...!」「」

その後麻雀をやり続けていたら日もかなり暮れ、「いつまでやつてやがるガキども！」という厳さんの一喝の下お開きとなつた。ちなみに最終的に鈴がトップで次に弾、三位が俺でドベは葵。まあ元々麻雀の強さは昔から鈴が一番強く、俺と弾と葵はほぼ同じ位だから妥当な順番だろう。これがＴＶゲームだと俺と弾がツートップで、次に葵、鈴は万年最下位となる。だからあんまりＴＶゲームはしないようにしている。負け続けると鈴が暴れるからなあ…。

一階に降りたら厳さんが俺達の夕食を作ってくれていた。トンカツコロッケ野菜炒め肉じゃがハンバーグ唐揚げとかなりの豪勢な夕食がそこにあった。

「ま、お前達の再会記念だ。たらふく食え。うちの孫もお前達とまた会えて喜んでるからな」

「「「ありがとうございます！」」」

「あ、金はもううからな」

「「「え？」」」

「嘘だ。ま、しつかり食え」

夕食は蘭も一緒になつてたらふく頂いた。このときばかりは厳さんも食事中の会話は見逃してくれたので、和気あいあいと皆で夕食を楽しんだ。ちなみにテーブルに座る時、俺の隣をじーっと鈴と蘭が睨んでたが溜息ついた葵がさつさと俺の横に座つたら一人とも何故か葵を睨んでたな。なんでだろうか？弾はそんな一人を見て笑い二人から殴られたりした。

夕食を食べたらもう外は暗く、工芸学園に戻る時間となつた。

「さてと、俺達ももう帰るか。これ以上は千冬姉に怒られる

「やうね、名残惜しいけど

「あ、ちょっと待って！」

俺と鈴が帰る準備をし始めたら、葵はポケットからデジカメを取りだした。

「帰る前に、皆で写真撮らない？　この四人で撮った写真つてもう二年前の春のやつしかないし」

と囁いて、葵は笑う。

「へへいいな。そういうや葵がいなくなつてからそんなに写真撮つてないよな俺等。鈴もいなくなつてからは一枚も無いし。ま、一夏と男一人でツーショットなんてキモいだけだしな」

「そりゃお互い様だろ？　が」

「いいわね。葵、あたしにも写真頂戴ね」

「もちろん、全員あげるに決まってるじゃん！」

「あ、それなら私が撮つてあげますよ」

「ありがとう。じゃあお願ひね蘭

蘭にカメラを渡し、横に並ぶ俺達。右から鈴、俺、葵、弾の順番で並んでいる。鈴は俺の左手に腕を絡め、俺と弾と葵は互いに肩を

組む構図にしている。

「じゃあ撮りますよ！－はいチーズ！」

カシヤツという音がして無事撮影終了。撮り終わっても俺に腕を組んでいる鈴に蘭が睨んでいる。

「じゃあ次はわしが撮つてやるから蘭、お前も入れ」

蘭を交えもう一枚撮る事にした。並びは俺の両隣りに蘭と鈴。二人とも俺の腕を組んでいる。それを見て葵は弾の右手を左手で絡めている。「お、おい葵。胸当たつてる…」「当てるのよ」と言つながら顔を赤くして弾と笑つてゐる葵。ああ、完全に遊ばれてるな。

「…なんか色々思う所がある光景になつたるな。まあいい。一夏！ 弾達見てないで前向け！」

厳さんに一喝され前を向いた瞬間、カシヤと写真が撮られた。一枚の写真の画像を眺めながら

「なんかこれ一枚目だけ見たら私と弾が付き合つてゐみたいに見えるわね」

「ん？なんだ、じゃあ俺と付き合つか？一年前ならともかく、今のお前なら大歓迎だぜ」

「いやー私は戦つて自分より弱い男は嫌かなあ」

「そつか、なら残念」

ちつとも残念そうに見えないで言う弾。まあ本気じゃないだろうしな。しかし…お前より強い男つて条件厳しすぎだろ。お前に勝てる奴つて同年代じや物凄く限られるぞ。

「じゃあ弾、次来た時にこの写真持つてくるか」

「おお、楽しみにしてるぜ」

「あ、いやこれデジカメだからメールで送ればいいか。携帯にでも送つとくわね」

「いや、次來た時直接持つてくれ……いや俺の家写真を加工する機械ないからさ。ちゃんとプリントアウトしてくれたら助かる!妙に直接持つてくれとこだわる弾。別にお前機械音痴じゃないだろうに。そんな弾を見ていた鈴が

「大丈夫よ。またあたし達はあんたと遊びに来るわよ」と妙に優しい声で言つた。その言葉を聞いて赤くなる弾。……あ、なるほどな。葵を見たら葵も納得したようだ、

「大丈夫よ。また私も弾の家に遊びに来るから。そんな小さいまた来る理由を作らなくともね」

葵の言葉にさらに赤くする弾。……そつか。俺達は今はE.S学園で三人一緒に過ごしてるけど、弾は違うもんなあ。……いつが一番別れが寂しいんだろうなあ……。

「ま、じゃあこの写真は私が弾の通りにするしますか。弾、今日は麻雀しかしなかつたけど今度は外に遊びに行きたいわね」

「あたしはカラオケ行きたい!」

「お前マイク独占するからなあ……」

「下手糞な一夏が歌うよつかはマシでしょ!」

と、俺達はまた集まる時は何しようかと一通り話した後、五反田家を後にした。

その後、俺の家の机に飾つている写真立てが一つ増えた。それらの写真は、共通して四人とも最高の笑顔をして写っている。

## 番外編　久しぶりのカルテット（後書き）

すみません急に番外編始めました。

情けない理由ですが単純に今後の展開に悩んだからです。後の福音戦のために専用機をこ登場させようと思つてましたが、なんとなく無い展開でもいいかなと思つたり。これを書いてたのはまあ悩んでたせいでね。まだ悩んでるんですけど。

まあ次回も頑張って更新できるようにします。

「よし、呼ばれたメンバーは全員集合してるな  
臨海学校一田田、俺とまあいつものメンバーの葵、篠、鈴、セシリア、シャル、ラウラは一般生徒達とは隔離された海辺に集合している。この場に先生も千冬姉だけしかいない。

この日は生徒全員でEIS装備の各種試験運用データ取りが行われる。無論専用機持ちにはその名の通り国から専用の装備や秘密性の高い装備が送られてくる。そのため一般生徒とは隔離して性能チェックするのはわかるんだけど……なんで俺と篠はここにいるんだろう？葵は代表候補生だからなにかしら特別な装備の試験を任されるんだろうけど。しかしそれにしては…

「織斑先生、何故わたくし達だけこのような場所に呼ばれますの？本日はEIS装備の試験運用データ取りが目的のはずでは？それに本国から送られてきた装備もここにはありませんし

セシリ亞が当然の疑問を千冬姉に言った。そう、この場には試験用のEIS装備が見当たらない。なにやら黒い横長の小さなコンテナが一つあるが、そこにここにいる全員分あるとはとても思えないし。「予定変更だ。その前にお前達にやつて欲しい事がある。それはこの場で専用機を持つていない」と千冬姉が説明を始めた時、

「ちーちやーーーーーん！」

とどこからか声が聞こえてくる。声が聞こえた方に顔を向けると、物凄い勢いで東さんが走りながらこちらに向かっている。そしてそのまま東さんは千冬姉に近づき、

「会いたかったよちーちやーん！」

と千冬姉に抱きついた。が、千冬姉はそれを拒否。見事なアイアンクローデ束さんの抱きつきを阻止した。なんかヤバい位指が顔に食い込んでるんですけど。

「暑苦しきなるから止めら束」

「ちええ～。ちーちゃんのいけず～」

と叫びてあることアイアンクローデ逃げた束さん。…やつぱこの人もただ者じやないなあ。そして束さんは簫の方を向いた。

「やあ！今度こそ会えたね簫ちゃん！でか昨日は酷いよ簫ちゃん！私がから逃げるなんて！」

「え、いやまあやの…、なんといつかつこ」

「つこつこで逃げてたの簫ちゃん…つてまあいいや。こうして直に会つのは久しぶりだね。いやあしばらく見ない内に成長したねうんつさ。特にめりぱいが」

「ふん！」

あ、簫が束さんを木刀で殴つた。

「怒りませぬ姉さん」

「殴つてから言つた～！しかも木刀で～！酷いよ簫ちゃん～！」

と涙流しながら抗議する束さん。うーん、相変わらず束さんにたいして態度が堅いなあ簫。いや遠慮無く殴つてるからそれなりに心を許せる相手と思つてるのかな？

「おこ束、じこつりに血口紹介位じわ」

と黙つて束さんと面識が無い鈴達を指差す千冬姉。まあ鈴達も束さんの名を知らないわけないからもつわかつてゐるけどね。皆驚愕の目で束さんを見つめている。

「えへ、めんどくさいなあ。別に知つて欲しくないけどすっちゃんの頼みなら仕方ないか。はーい、私が天才の束さんだよ。終わり」とほとんど棒読みで黙つて鈴達とはそっぽ向く束さん。…こっちはこっちで相変わらずだな。束さんの視線は今度は俺と葵をどらえた。

「やつほーいつくん！一回振りだね！そしてあーちゃん、久しぶり！つんうん昔から思つてたよあーちゃんが女の子だつたら絶対美人になると…いや私の予想は正しかつたね。おっぱいも大きいし葵の胸を凝視しながら黙つて束さん。…束さんおっぱいネタ好きなんですか？」

「束さんお、お久しごりです。この姿になつて直接会つのは初めてでしたね。そして昨日は薬ありがといひやつきました。おかげでこの通り元気になりました」

さすがに篠みみたいに殴つたりしないが、微妙に照れているのか胸を隠す葵。

「いやいやお礼なんていらないよ」

「でも」

「いいからいいから

「…なんか態度があからさまに篠、一夏、葵と僕達とでは違うね」  
束さんと葵を見ながら少し落ち込んだ声で黙つシャル。セシリ亞

ヒュウラ、鈴も同感と言つた感じで頷く。… 千冬姉、篠、俺、葵以外の人間には冷たいと言つた興味無しだもんな束さん。

「… 一つ忠告するけど、束さんに話しかけない方がいいぞ。俺達以外の人が話しかけても絶対友好的な態度取らないから」

「… わかったわ」

心得ましたという感じで鈴達は頷いた。

「… いい加減話を進めるぞ。束、例の物は」と千冬姉が束さんに言つと、束さんはふつふつふと笑うと大空を指差して言つた。

「ちーちゃん！ そればばつちりだよー・さあさあ！」覧あれ！ 」

そう束さんが宣言した瞬間、

ズゴーン！

と上空からなにやら縦に細長いひし形の形をした金属の塊が俺達の目の前に落ちて来た。そしてそれの外装が捲れていき、中に一体の赤いI.Sが入っていた。

「本邦初公開！ これぞ篠ちゃんの専用機にして第四世代型I.S、その名も紅椿！ その能力は現行の全てのI.Sを上回る束さんお手製の一品だよ！」

と言つて大きな胸を張る束さん。その言葉を聞き、全員驚愕した。

「第四世代、だと…」

「各国によつやく第三世代の運用が始まつてきたといいますのに…」

「それを飛び越えて第四世代…」

茫然とした感じで紅椿を眺めるラウラ、セシリア、鈴。シャルは実家を思い出してるのか…いやふれるのはよそう。

「じゃあさつそくファイツティングとパーソナライズ始めよつか箒ちゃん！お姉ちゃんがやつてあげるからあつとこいつ間に終わるよー。」

「ええ、お願ひします姉さん」

と言つて、箒は紅椿に近づいて行つた。

今姉さんは私の為に紅椿の調整を行つてくれている。姉さんの調整速度は素人の私が見てもわかる位…早い。学園の整備士が束になつてかかつても姉さんには敵わないだろう。いやそれだけでなく、科学という分野において姉さんに勝てる人等存在しないだろう。そんな姉さんを昔私は…

「うんうん箒ちゃん剣道の腕上がつたね！筋肉のバランスを見てたらわかるよ～。いや～お姉ちゃん嬉しいな～」

「……」

姉さんが話しかけて来だが、つい無視してしまった。しかし姉

さんは気を悪くすること無く笑顔で調整を続けている。いや私だってよくない態度だつてわかつていい。姉さんは私の為にこの機体を用意してくれた事を。妹からの初めての電話がこの機体が欲しいからかけたつていうのに、姉さんは物凄く喜んで、この機体を私の為に作つていてくれていた。姉さんは物凄く喜んで、この機体を私の為に作つていてくれていた。姉さんが肉親だからよくしてくれるというわけでは無い事も知つている。両親と姉さんの関係を見てたらそれはわかる。ただ姉さんは、：：私だからこの機体を用意してくれた。それは私にだつて充分わかつていい。でも、それでも、まだ私は姉さんのことは…。

姉さんの方を向くと、一夏と葵とで何か話している。昔から姉さんは私と千冬さんとあの一人にしか笑顔を向けない。

一夏。私が専用機を欲しいと思ったのは一夏が原因だ。男として唯一のIS乗りの一夏は専用機が与えられている。初めは私がよく知りもしないISの知識を絞り出し操縦を教えていたが、最近ではもう私と一夏の間では差はなくなつてきている。そして一夏は何故か代表選にタッグトーナメントでもイレギュラーな事件に巻き込まれている。そしてその度に思つた。私に専用機があれば…一夏と一緒に戦えるのにと。

葵。一夏と同じ六年振りに再会した私の幼馴染。かつては少年だったが今では少女となつていて…まあ見た目は昔から少女みたいだつたからあまり違和感ない。そして葵の登場で、今まで私が思つていた常識は覆されてしまった。葵が来る前まではセシリ亞達と模擬戦で戦つて負けても、訓練機の私が勝てる訳が無いと思っていた。しかし葵は私と同じ訓練機に乗つてゐるに、：：セシリ亞に鈴、シャルに勝つてゐる。ラウラには負けてるが、それでもごく稀にラウラに勝利することもある。初めて葵と模擬戦をした時の事は、私は今でも忘れない。

「はあ！」

「甘い！」

私の気迫を込めた一撃を、葵は少し後退ただけでかわした。そして私に刀を振り下ろす葵。その一撃を私はかろうじて防いだ。私は葵の刀を上へ押し上げると、すかさず葵の腹を横薙ぎに斬った。しかし葵は急上昇してそれを回避。上へ飛んでいく葵を追い、私も上昇。葵を追つて上昇していたらいきなり葵は急旋回し、急降下しながら私に向かつってきた。その速度に私は対応出来ず、上から葵に肩を突かれ私はその衝撃で地面に叩きつけられた。急いで体を起こすと葵は空の上におり、私が起きるのを待っていた。その姿を見て、私は見下されてると思った。すぐにまた上昇し、葵に向かつた。空中で静止している葵に斬りかかる。しかし、

「は！」

と私が斬りかかる前に葵は私の手首を刀で打ち据えた。衝撃で体が泳ぐ私に、葵は刀を振りかざし、そして容赦無く私の頭めがけて振り下ろした。衝撃で下に落下する私を葵は追いかけ……その後私はほとんど葵に対し攻撃を与えることも出来ず敗北した。

「笄がまだIRSに乗りなれて無いからとしかいいようが無いけど」  
模擬戦終了後、葵に何故こいつまで歯が立たなかつたのか聞いてみたら、そう返された。

「生身の剣の勝負なら笄が私よりも強い。それは私も認める。でもIRSに乗つたら私が笄を圧倒するのはもう単純な話、笄がIRSを乗らせてないから。まあこれは一夏にも言つたけど、笄はただIRSを車の操縦みたいに動かして私に襲つているだけ。私はIRSを手足の延長として、生身と同じ感覚で動かしている。生身での精密な

動きを簫はまだISで再現出来て無い。だから私に負ける」

葵の言葉を聞いても、納得できるよつて出来ない。私だって自分の今まで体で覚えた剣の腕前を披露してきたのだ。それが全く再現出来て無いなんて。

「まあでも氣にする事は無いと思つよ。だつて簫はまだ本格的にISに乗り始めて三ヶ月も経つてないし。私は一年と半年以上ISに乗つて激しい特訓してきたんだから。これで簫が私に勝つたら私凄くへこむよ。いや本氣で。それに簫の腕前は一組じや専用機持つてる一夏達除けば一番上手いよ」

例えセシリ亞達を除いて一番と言われても、あまり嬉しくはない。私が欲しい実力はそのセシリ亞達のレベルなのだから。しかし、葵の言つ練習の差が大きいのは認めざるをえない。セシリ亞に鈴、シヤルロットにラウラ、葵も私以上に厳しい特訓を受けてたのだろう。ならそれに追いつくためには…

「はい終了。さすが私超早い。終わつたよ～～～簫ちゃん！」

「おや？ 簫けや～～ん！ 終わつたよ～～！」

「え、はつぱー！」

どうやら都合こんでる内に姉さんの作業は終了していらっしゃい。姉さんの言葉を聞いて我に返つた私は腕や足を動かしてみる。うん、正常に作動している。

「じゃあ簫ちゃん、試運転開始しよつか。準備はいいかな」

「はい、大丈夫です」「では、この機体、紅椿の性能を試させてもらひ。

「凄いな簫の専用機…」

「あの機動性、第三世代の中を探してもそうそうないわね」「簫が束さんに言われた通りに試運転をやっていたが、その性能に俺達はただ驚いた。セシリ亞、鈴、シャル、ラウラは喰いつくように簫の専用機、紅椿を見ている。特にラウラが真剣な眼差しで眺めており、おそらくどう戦えばいいかもうンノコレーションしているのかもしねえ。

「しかし空裂だつけ？さつき簫がミサイルの群れを切り裂いたやつは？あれなんかゲームにあつた横一文字や空破斬みたいでかっこいいなあ」「

「ああ、それはわかる。しかし俺は兩用の方がいいなあ。雪片式型にああいつた性能追加して欲しい」

俺と葵は紅椿の武器について語っている。いや俺の百式も零落白

夜以外に何か欲しいと思つし。

「何言つてゐる織斑。貴様が兩月持つても当てる事が出来ないと意味が無いだらうが」

バツサリと俺の願望を切り捨てる千冬姉。…いやそうかもしけないけどさあ

「あ～あ、しかしこれで専用機持つてないのは私だけか。寂しいなあ」

と葵が溜息交じりに愚痴つた瞬間、束さんが口を開いた。

「あ、それは大丈夫だよあーちゃんーちゃんとあーちゃんの分も持つてきたから」

「ええ！」

束さんの言葉に驚愕の声を上げる葵。え、束さん葵の分も専用機持つてきてるの？

「ふふふ、やあご覧あれ！」

束さんが叫ぶと再び束さんの前に上空から細長いひし形の金属の塊が落ちて来た。それはまたさつきの紅椿同様外装がめくれ、中に一体のI.Sが入つていた。白と黒、一色の色分けがわれているその機体を見て、葵は再度驚いている。束さんはそんな葵を見ながら胸をはつて機体を紹介した。

「ふつふつふ。どう驚いたあーちゃん！これがあーちゃんがいた出雲技研が作るうとしていたあーちゃんの専用機、スサノオだよ！」

次回で葵が遅れて登校する羽田になつた理由がでます。

久しぶりに更新。ちょっと内容が酷いけどこんな設定にした私が悪い。

「スサノオ…」

束さんが持つてきた葵専用機スサノオを、葵は茫然とした感じで眺めている。しかし葵ちょっと驚きすぎじゃないか？そりや束さんが葵の分の専用機持つてきた事は俺も驚いたけど、お前さつきから幽靈でも見たかのような驚愕な顔してスサノオ見てるし。

「へ～これが葵の専用機なんだ？…う～訓練機でも負けてるのに専用機とか鬼に金棒じやない…」

「まあ今まで持つてなかつた方がおかしかつたんですけど…しかし何で篠ノ乃博士が葵さんの専用機を持ってきてるのでしょうか？」

「篠と同様に篠ノ乃博士から葵へのプレゼントじゃないかな？」

「しかし先程出雲技研がどうのとか言つて無かつたか？ふむこの機体も紅椿同様第四世代機なのだろうか？」

「ん？出雲技研…たしかどこかで聞いたような気が…」

鈴、セシリ亞、シャル、ラウラも葵の専用機スサノオに注目している。篠も葵の専用機が気になりこっちに降りてスサノオを見ている。はて？そういうや俺もどつかで聞いたような気がするな出雲技研つて…。

「よしそれじゃああーちゃん！ファイットティングとパーソナライズ始めるからこっち来て～」

「え」

束さんに呼び掛けられてようやく葵は我に返つた。そして束さんの方を向いて、

「束さん、ど、どうしてこの機体がここに存在してあるのですか…と震える声で束さんに尋ねた。お、おいどうした葵！何で震えるんだ？しかもさつきからどんどん顔色が悪くなってるぞ…」

「私が頼んで束に作らせたからだ。いや正確には出雲技研の所長はじめ研究員たちが私に懇願してきたからだな。私を通し束にお前に専用機を、スサノオを頼みますと」

葵の質問に、束さんでなく千冬姉が代わりに答えた。え、出雲技研の人達が？何で？

「出雲所長達が…で、でもたしかこの機体の研究データはある時全て消えたって…」

「あははは、そこはこの天才の束さんにかかるべき問題無し。だって私世界中のIIS研究所のデータを24時間ハッキングしてたらか。研究データは私のラボの中についたからそれを忠実に再現したよ。まあ出雲技研の人達が私に懇願する理由わかるなあ。我なら作るのはお茶の子さいさいだけど、今の出雲技研の皆がこの機体をもう一度作り直すとなると…一年位かかるかもしれないしね。そんなに待つてたら日本代表を目指すあーちゃんの足枷になっちゃう」

…常時世界中を監視してるとかよ束さん。てかそれが当たり前のことのよう出来るつて…。それにしてもどうしてその出雲技研の人達は千冬姉を通して束さんに頼むような事を？いや束さんの言からすると作るとなると一年かかるとか言つてるし…いやそもそも研究データが消滅？何があつたんだ？

そしてさつきから驚いてるのが束さんがその出雲技研の人達の要請を受け入れてる事だ。さつきの話し方についても、出雲技研の人達

に対しては束さんは嫌悪感が全く無かった。あの簫や千冬姉、俺と葵以外はどうでもいいと思っていた束さんが。

「そうだ思い出したぞ！」

「うわっ…ちょっと何よ簫いきなり大声出して…びっくりしたじゃない！」

「ああすまない鈴。いやさつきから姉さんや織斑先生が言っていた出雲技研なんだが…一夏は覚えてないか？今年の三月の島根にあるIS研究所が実験の失敗による大火災で多数の負傷者が出了事件を」

「あー思いだした！そんそんかなり大きなニュースとして流れてたよな。たしか重傷者が39名も出たって…ってちょっと待て！葵！お前もしかしてそこにいたのか！」

「…ええ。私がISの訓練をしてたのは今一夏が言つてた出雲技研。そして…その事件が起きた原因は私にある…」

俺の問いに沈痛な表情を浮かべて答える葵。つていや待て。葵のせいでの事件が起きた？どうこうことだ？あ～くそ！わからないことだらけだ。

「ちょっと葵…一体あんたに何が起きたのよ…」

「もしやお前が登校するのが遅れたってのはその事件が原因なのか？」

鈴と簫が葵に詰め寄っている。その顔は…葵に何が起きていたのかを本当に心配している表情だ。

「えっと。いやそれは」

「もう話した方が良いんじゃないかなあーちゃん」

束さんが葵に微笑しながらそう言つてきただ。

「私も同感だ。つらい出来事なのはわかるが……少なくともここにいる連中には話してもいいと私は思つ。特に一夏には言つた方がいい。こいつは知らなかつたら後で絶対後悔する」

俺が後悔する？葵の方を見ると田を逸らされた。

「なあ葵、以前お前に登校遅れた理由を聞いた時、その時お前はまだ言いたくないと言つてたけど… 今も駄目なのか？そして俺も関係あるのなら教えてくれ！頼む！」

千冬姉と俺の言葉を聞いて考え込む葵。セシリアにシャルにラウラも葵をじつと見つめている。葵は束さん、千冬姉、そして篠、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、最後に俺をじつと見つめて、はつとため息をついた

「そうだね。この専用機を前にしてもう事情話をないつてのもアレだし…。といつかさつきから意味深な発言連発しそうだし。それに……皆なら話してもいいかな」

そして葵は、今まで話さなかつた遅れた理由を語り出した。

「じゃあ長くなるけど順を追つて説明するから。以前話したように私は初めての模擬戦で代表候補生を一撃で気絶させた後、政府関係者が協議した結果代表候補生に選ばれた。そして選ばれた後私は島

根にある出雲技研というIIS研究所に案内され、そこで代表候補生としてIISの訓練を受けることとなつた。その出雲技研だけど、私以外にも4人IIS訓練を受けている同学年と年下の少女達がいたのよ。三人は代表候補生候補という名の通り代表候補生予備軍。訓練次第で候補生になれるかもしれない者達。もう一人が……私が殴り倒した代表候補生。別の施設行けよと心底思つたわね。この四人と私は一緒になつてIISの訓練を受けてたわけだけど、はつきり言って私と四人の仲は最悪だつたわね。欠片も友情なんて芽生えなかつた

思いつきり嫌悪感むき出しの表情で葵はそう言つた。

「まあ三人からすれば私はいきなり候補生になつたから気に入らなかつたんでしょうね。候補生の方は初めてIIS乗つた私に一撃で気絶させられたからもあるけど、まあこの四人も完全なる女尊男卑主義者だつたつてのもあるわね。ようは私が元男だつたから今は女でも彼女達の認識としては男。で、今の風潮で男は女からはどんな存在か言わなくともわかるわよね」

「なんか凄く偏見持つた連中だつたんだな。心は知らんが葵は体は本当に女なのに……」

「まあ今の社会だとIIS乗りは特別な存在だからね。ある種の特権階級的な意識もあつたのよ。そんな連中に私は少女漫画みたいないじめを散々受けたわね。無視、ハブ、私物を壊される、IISスーツはハサミで刻まれる、専用ロツカーや私の落書きオンパレード、大勢の前で誹謗中傷等々。そしてそれだけやつても誰も咎めなかつたわね。出雲技研にいた女性職員の8割は彼女達の味方だつたし。残りの2割は飛び火を恐れて見て見ぬ振り」

「ちょっと葵！その連中の居場所吐きなさい！私が衝撃砲で吹き飛

ばしてやるわ！」

「俺も我慢出来ねえな！最低だろその連中！」

「よつてたかつて一人を翻るとは… 最低の連中だな！」

「僕だつたら耐えきれないだろ？ な、そんな環境…」

「私も本国でライバルから似たような事をされましたわね…、でも葵さんは酷くなかつたのは確かですわね」

「私も教官が来る前は…」

「まあ怒るのはまだ話を最後まで聞いてからにして。この4人、ここまで私をいじめた理由だけど、さつき言ったのと他にもあるのよ。ま、これは自慢になつちやうんだけど私は出雲技研に入った初日で候補生候補の三人を模擬戦で下し、それ以降ずっと負け無し。候補生もだけど2ヶ月間位は向こうが専用機もあるし優勢だつたけど、半年もすれば私もI.S操縦にかなり慣れて打鉄で五分五分、8か月後には私の勝率は相手は専用機、私は打鉄でも完全に100%となつた。出雲技研に来て8ヶ月目以降、候補生との戦いで私は最後まで負け無しとなつた。これが彼女達のプライドを完膚なきまでに砕いたんでしょうね。ロッカーの落書きとかもうバキの真似？と思つたわ。どんなにいじめても肝心のI.S戦で私に負けまくつた彼女達を私は完全に見下してたわね。だから彼女達のいじめもその8か月経つた以降は虚しい抵抗みたいに思えた」

…なるほど、確かにどんだけやつても越えられない壁か。その四人が悔しく葵を憎む理由はわかつたが全く同情はしないけどな。

「それに出雲技研で私に味方が全くいなかつたわけじゃないわよ。

出雲技研にいた男性職員全員に私はよくしてもらつたというか可愛がられた。女になつてまだ半年だつたからどつちかというと男の方が話かけやすいみたいなものがあつたからね。まあ私としては普通に話しかけただけなんだど、そしたら向こうがめちゃくちゃ感激したのよ。酷いのになると『いつもお世話になります』みたいなこと言つただけで感涙した人もいたわね

「はあ？ なんだそりや？」

何でその程度で？

「いやや、さつきの4人の振る舞いとそれが容認されてるのを考えればわかると思うけど、出雲技研において男性の地位は物凄く小さかつた。女性職員、そしてさつきの4人に男性職員は奴隸みたいな扱いだつたのよ。そんな中元男とはいえ年頃の女の子が笑顔で接していくだけで向こうは相当嬉しかつたみたいで……」

まあ葵は見た目は相当の美少女だしな。性格も良いしそんな女子が笑顔で接してきたら……あ、なんか納得。

「私もその四人と女性職員からは嫌われてるせいもあつて、皆に懷いた。喜ぶと思って暇な時は菓子を作つて振る舞つたり、バレンタインの時も手作りチョコ配つたりした。そしたら娘や孫のように扱われ、『是非将来孫の嫁に！』『息子の嫁に！』『俺の嫁になつて！』と言われるようになつた。そしてその言葉が本気なのか私に遊び相手が欲しいだろうと思つてなのが、両方だらうけど休日は職員さん達の息子や孫を呼び、私と一緒に遊ぶようにしてくれた。彼等と遊ぶのはかなり心の支えになつたわね。あそこで男友達がいなかつたら私心荒んだらうなあ」

と言つて笑顔を浮かべる葵。

「なあ葵、人間関係はわかつたがいつになつたら話の核心に触れる

「なんだ？」

「まあまあ焦らない焦らない。」の人物関係がこの後重要なことだから

「…そうか」

ん?なんかいらっしゃる?何でだらうな?

「ま、私がいた出雲技研はそんな環境下だったわけ。そして今年の1月、IS学園入学が決まる同時に出雲技研が長年開発していた第三世代型ISの運用目処が立ち、そのパイロットとして私が選ばれた。開発陣は全員男性職員で、私のためになんとかして入学前に完成させようと皆急ピッチで開発を急いだわね。私も専用機を貰えると思うとワクワクし、完成が待ち遠しかった。しかし、翌月の2月、一夏の登場である変化が起きました」

「俺の?まさか葵が前言ついていた俺の専用機を作るためコアが無くなつたとか言つてたが、それのことか?」

「そり。でもあれは一夏のせいぢやない。一夏が望んだ事ぢやないのはわかるし、日本政府としても唯一の男のIS乗りに専用機を与えるようと思うのは至極当然の事。ただそれに私の分のコアを使われたのは事実。じゃあ足りないコアをどう補充すればいい?簡単なこと既存の機体から抜き取ればいい。で、それに選ばれた機体つてのが…出雲技研にいた、私が殴り倒して気絶させた代表候補生の機体つて訳。私との対戦履歴があまりにも酷いからというのもあつたけど、第一世代機でしかも第一形態になつたのにワンオファビリティを発動出来なかつたから見切りをつけたのよ。一応代表候補生のままだけど事実上のリストラかなあは」

「うわ…自業自得とは言えキツイな」「  
だけど聞く限り同情はしないけどな。

「泣いて彼女は嫌がつたけど、国の決定事項だから変更は無し。彼女の専用機の解体は決定されたけど、最後に彼女は条件を出して懇願した。『なら最後にその第三世代型ISをこの機体で勝負させて欲しい!』と。役人さん渋つたけど性能テストを試すにはいいかもと思いそれを受け入れてしまった…」  
は〜つと溜息をつき思いっきり暗い顔をする葵。なんだ、なんか物凄く嫌な予感がしてきた…

「そんなわけで一時的に訓練機の、私がよく使用していた打鉄を解体しコアを取り出してそれを元に作成。そして今年3月、出雲技研の第三世代型ISスサノオ完成。名前は候補としてアマテラスもあり、女性神だからそつちが良いのでは?という意見もあつたけど、やっぱ戦の神の方が縁起が良いとのことでスサノオと任命されたわ」

「そして私がスサノオのファイットティングとパーソナライズを行つてる時、彼女が現れた。皆驚いたけど、自分が対戦する機体を見に来たんだろうと思い気にしなかつた。そして彼女は私の方をじつと見つめ、笑みを浮かべると……ISを開幕し、グレネードランチャーを構え私に発射した」

「…………ええ…………」「…………」

「セッティング途中だつたけど、その動きを見た私はどっさに近くにいた職員を突き飛ばした。その後に私に着弾、大爆発が起きたわ。途中だつたからエネルギーもまだ十分補給しておらず、その一撃だけで私のエネルギーはほぼ消滅。私がまだ生きるとわかつた彼女は再びグレネードを構え私に撃とうとしたけど、横から銃撃を

受けグレネードは破壊された。そちらを向くと職員がIS用アサルトライフルを数人で構え彼女に浴びせていた。そして私を見て『逃げろ！』と叫んだ。そしてその後彼女は別の武器を取り出しました発砲。爆発が起き彼等は吹き飛んだ。私は彼らに駆け寄ろうとしたが上手く動かない。調整が済んでないため動きがかなり悪かつた。そんな私を彼女は笑つて銃を構え、撃つた。避けきれるわけもなく直撃をくらい、スサノオの機体は碎け私は血まみれとなり気絶した

「目が覚めたら私の上に血まみれの所長さんが覆いかぶさっていたわ。意識はなく背中から大量の血を流していた。大声で呼びかけても返事は無かつた。そして次に周りをよく見てみたら、燃え盛る研究所で、私の周りに横たわる職員さん達だつた。皆血を流しどう見ても重傷だつた。意識がある職員さんがうわ言のように『守るんだ…葵を』と言つてたわ。それを聞いて、皆私を守るために戦ってくれたんだとわかつた。朦朧とする意識の中、血が噴き出す腹を押さえ立ち上がつた私の前に、彼女は現れた。皆の必死の抵抗を受け、武器を全て失い絶対防御のエネルギーを消費してまで機体を動かしているのか、左腕の装甲は無くなつていた。それでも私を殺そうと機体を動かして私の前に立ち塞がつた。『あんたが！あんたが悪いんだ！あんたが全て！』と泣きながら片腕を振り上げ私に襲つてきた。必死になつて避けたけど、全身から出血してゐるせいで意識がなくなりかけ、壁際に追い詰められた。その時死を覚悟し、走馬灯が頭を駆け巡つたけど、その中に打開策があつた

…え、その状況下で？

「チャンスは一回こつきり。壁に追い詰めた彼女は会心の笑みで腕を振り上げた。その瞬間私は死力を振り絞つて彼女との間合いを詰め、左手を彼女の腹にそえた。そしてその左手の上に私は右手を思いつき叩いた。そして…彼女は血を吐いて気絶した。それを見届けた私は気が緩み再び気絶した」

「いやちょっと待つてくれ！なんかもう想像以上の事が起こりすぎてもう何から聞いたらいいかわからなくなってきたが、とりあえず最後の、じうじって相手を倒したんだよ！」

「だから左手を」

「いやだから何でそんなん」

「昔、父から鎧を着た武者を素手で倒す方法を習つたからね。絶対防御が発動しなくなつたＩＳなら条件は同じかなと思つて。というかそれしか方法が無かつたのよ。なんせ彼女のＩＳ、全身甲冑装甲タイプ。フルアーマータイプだから。一夏の白式や打鉄見たいに顔面露出とかしてたらそこを殴つて倒してくるわよ。2年以上前に教えて貰い、その時は合格点貰えたけどあの極限条件下で再び成功するかは賭けだつたけど」

「その後だけ私は全治1カ月の重傷。スサノオに守られてたからこの程度で済んだけど、…私を守るために戦い庇つた職員さん達は全治3カ月から半年の重傷だつたわね。死者が出なかつたのが本当に奇跡だつた。私は全治1カ月とはいえ、体調を完全に取り戻すにはさらに2か月かかった。別の施設でリハビリをようやく全て終えた私の前に干、いや織斑先生が現れてＩＳ学園に連れて行つてもらつた。そしてあの時のホームルームに繋がるというわけ」

そしては〜つと葵は再度溜息をついた。俺は筈や鈴達を見てみた。皆葵の話を聞き茫然となつていて。そりやそうだ、こんな展開予想外すぎる。葵に何があつたのか知りたかつたがまさかこれほどのことがあつたとは。そして葵が真相を話すのを渋つたのがわかる。つまり…

「…俺がＩＳに触れなければ、ニアの数は足りてそんな事件は起きなかつたんだな」

間接的とはいえ、俺が原因でそんな事件が…

「それは違う一夏。それがなくても彼女と私の仲を考えると…似たような事は起きたかもしない。だから言いたくなかったのよ。言つたら一夏は自分を責めると思つたから」

「織斑、青崎の言つとおりだ。結果的にそう思つても仕方ないがあくまで悪いのは暴走した小娘だ。お前は関係ない」

「でも…」

「少しばは考える馬鹿者！お前がそつやつていじけることが青崎にとって苦痛となつてゐるのかわからんのか！」

千冬姉の言葉で俺はハツとなり、葵の方を見た。その葵の表情を見て…千冬姉の言葉の意味を理解した。

「で、織斑先生。そのバカをやらかした犯罪者はどうなつたのですか？」

鈴が底冷えするような声で千冬姉に聞いた。目が物凄く冷たい。いや、筈にセシリ亞、シャルにラウラも同じ表情を浮かべている。

「さすがにこのよつなことは表沙汰にはできんからな。代表候補生が嫉妬で殺人未遂、大量傷害、器物破損建物全壊、罪状を並べたら死刑は免れん。だがこのよつなスキヤンダルが世間に流せるわけがなかろう。そうなつたら日本のＩＳ地位が傾くのは避けられん。情報操作をし実験の暴走として処理させたが、あの小娘は極秘裏に監禁させた。20年は出れんだろうな」

「死刑にすればいいのよそんな奴！」

俺も同感だ！そんな奴は死んだ方が良い。更生なんて無理だろ絶対！

「一応まだ未成年だからな。多少の温情措置は取つてやつた。ま、若い時をずっとせまい部屋で過ごすんだ。罰としては十分だろ」

青春の全てを独房で過ごすのか。それでも足りない気がするけどな。

「長々と話したけど、これが真相。私が遅れた訳も専用機を持ってなかつたものね。

…あ～なんかすつきりした。話したくない内容だったのに、皆に話したら気分がすつきりした。解放された～って気分かな」「

「それはお前がずっと抱え込んでたからだろ。辛かったのなら私たちにもわかるとよかつたんだ。…私たちは友達だろうが。辛いことがあるなら話して軽くすればいい」

「笄の言つ通りだぜ。もう、一人で抱え込むなよ。そんな辛いことがあつたとしても、俺達が忘れてやるからさ」

俺と笄の言葉を聞き、葵は首を縦に振り、

「ありがとう」

と言つた。そしてその瞬間、

「あ、あれ？あれ？」

目から大粒の涙がこぼれていった。張り詰めたものが切れたのか、今まで我慢してたのが溢れたんだらつ。涙を零す葵を眺め、気がつくと

俺は葵を抱きしめていた。そして俺の胸に葵の顔を押し付けると、

葵は、

声を出して泣き始めた。

「…ねえちーちゃん。私はどのタイミングで再びあーちゃんにセッティングの話持ちかければいいかな。というか！これはヤバい光景かな。篠ちゃんピンチ？」

「さすがにもう少し待て。それに一夏も葵も束が考えてるような事は別に考えては無いだろ？…多分」

「…ちーちゃんも自信ないんだ」

「あの二人だと判断が難しいだろうが」

話が長くなりすぎたんでさらにわけました。  
なんかもうひとつこみ所満載になつてますが、説明不足の所を次話千  
冬姉が行います。  
個人的にはやく福音出したいなあ。

また結構間が空いてしまった…

「う、うわああつーう、うう……」

俺の胸で葵は声をあげて泣いている。話してる時は平静を保つてたが、……やはり辛さを押し殺してたんだな。出雲技研で葵が受けた陰湿ないじめ、葵は平氣みみたいな言い方していたけどそんなはずがない。俺の想像を絶する悲しみがあつたはずなんだ。そしてその悲しみを和らげてくれた出雲技研の男性職員達も、候補生が暴走し葵を守るために傷ついて……。

でも、そんな出来事を俺に話したくなくて……。話したら俺が……。

ああ、くそ！なんだよ俺！

親友が一番辛かつた時に何もしてなくて、しかも勝手に消えた事に怒つてばかりで……

葵は最悪の環境下でも負けずに前を向いて、真っ向から立ち向かってたつてのに……

そんな葵に俺はのんきに葵と再会出来たことをただ喜んでただけで……

再開後も葵は俺に気を使つて真相は誤魔化して胸の内に秘めて……。

俺は、泣いてる葵を強く抱きしめた。俺よりもずっと強い葵だが、じうじて抱きしめると吃驚するほど懐く感じてしまう。そして俺はある事に気付いた。葵とは出会つて10年近くになるが、

声を出して泣いたのをこれが初めて見たと言つ事。

その後葵が泣き止むまで嗚咽の声は続いた。

「「めん、一夏」

ふきふき

「……いや氣にするな。」この程度でお前の氣が樂になるならいいからでも許す」

「本当にじめん」

顔を真っ赤にしながら葵は、……涙と鼻水で汚れた俺の胸を束さんから貰つたハンカチで拭いている。いやかなりべつたりついてたからな。泣き止み葵が顔を上げたら、俺の胸に葵の涙と鼻水がべつとりと付いていた。葵が大慌てで何か拭くもの探したら笑顔で束さんが葵にハンカチを手渡してくれた。

「もう落ち着いたか、青崎」

千冬姉がびっくりする位優しい顔して葵に尋ねた。

「はい、もう大丈夫です」

田は赤いが、しつかりした声で葵は返事した。うん、あの表情ならもう大丈夫かな。いつも様子を取り戻している。

「落ち着いたようですね、ねえ葵さん」

「すまないがオル「ツト、青崎に聞きたい事は沢山あるだろうが後にしてくれ。青崎、束、時間が押しているためもうスサノオのフィットティングとパーソナライズを始めてくれ。そして他のメンバーは私に付いてこい」

セシリアの台詞を遮つて、千冬姉は束さんと葵にスサノオの調整を急がせた。セッティングを束さんにまかせ、千冬姉は移動し始めた。俺含めセシリア達も葵に聞きたい事がたくさんあつたが、千冬姉が有無を言わさない日つきをしたので、渋々みんな移動をした。葵達が見えなくなる距離まで離れた所で千冬姉は立ち止った。

「まあこの辺で良いだろ？…お前達の気持もわかるが、今はそつとしどいてやれ。代わりに私がある程度の疑問は聞いてやる」確かに落ちついたとはいえ、葵の中でも気持ちの整理はまだ終わってないよな。あれだけ大泣きしたんだ、今はあれこれ聞かずそつとしておいたいいか。

「それでしたら織斑先生、出雲技研であれほど昔は男として生活されてた事を理由に迫害されましたのに、葵さんの登校初日で何故織斑先生はその事をわたくし達に話そうとしたのですか？まあ葵さんが直接わたくし達に話されましたが、葵さんが言わなくてもある時は織斑先生が話そうとしてましたけど」

「ああ、そういうえばそうだったな。たしかにあの日千冬姉、もういきなり俺達に葵の事情を話そうとしてたな。」

「その事か。いくつか理由があるが…一つは隠してもいざれバレるからだ。青崎は日本代表を目指している。今の世界において、IISの国家代表の存在がどれほど大きいかわからないわけではなかろう。ましてや日本の国家代表だ、世界中が徹底的にどんな存在か調べ上げるぞ。そうなつたら日本がどれだけ情報操作してもバレ、その事実を公表されるだろう。そうなつたら知らなかつた日本の国民の中

で、隠していた事等に不満を持つ奴が必ず出てくる。そういう連中がきっかけで青崎を代表から外そうという動きができるかもしない。なら最初から公表しておいた方が良い。その上で実力で代表になつた事を見せつけられればそういうつた連中も文句は言えまい

「…すみません織斑先生、その理由は聞いてたらもう織斑先生の中では葵は日本代表になるから隠し事はせずさつさと公表した方が後の面倒が無くていいと思っているようにおもえますが。…つまり葵の日本代表はもう決定しているのですか？」

鈴の質問に千冬姉は、

「さあな、それはどうだかな」

と言つてニヤッと笑つた。いや千冬姉、口で誤魔化してもその態度でもうバレバレですから。そういうや昨日の夜、千冬姉俺に葵が日本代表に確定になるとか言つてたな。

「しかし織斑先生、それはあくまで可能性の問題ですね。実際の所後でバレたとしても、確かに隠していた事に不満持たれるかもしれませんが事情が事情ですしそれが理由で代表から降ろされるなんて事は無いと思いますよ？僕なんか男と偽つて IIS 学園に入学しましたけど、…今は隠さず本当の性別を発表していますが代表候補生から降ろされてしまんし」

シャルの話を聞いて俺も同感。確かにそうだよな、いずれバレるからといつても事情が事情だし、そこまで不満を持つ奴ばっかりとは思えない。シャルの言葉に千冬姉は若干呆れた顔で言つた。

「デュノア、もうお前が女だと正式に世間に公表したから言つが…お前の性別詐称などバレバレだつたぞ。学園上層部は全員知つていたし各國のお偉いさん達にも公然の秘密となつっていた。ネットのある掲示板等ではお前が男のはずがない、女に決まつてると連日激

論され、証拠の写真とか言って色々張り出されてたぞ。中にはお前が中学生の頃の写真も載っていたな、女の子の服装をしたお前が。フランス政府は必死になつて毎回火消しに追われてたな

「ええ！ そうだつたんですか！」

シャルは知らなかつた新事実に驚愕しているが、：あゝなんか納得。そのとある掲示板つて頭に2の数字があるあれか？

「まあ元々フランスとしても織斑に近づき情報をある程度収集出来たら良し程度の目的だつたからな。今では織斑の友達となつていて、実力的には問題ないからフランスとしてもバラした所で候補生としては外さん。それにデュノア、こう言つてはなんだがお前の場合は国と家の事情で振り回された身だからな。公表してもお前は同情されこそ非難はされなかつただろ。まあ何人かの小娘が『初恋だつたのに』と泣いてたようだが」

…その女生徒達、まあ可哀そつだな。シャルも「そんな子がいたんだ…」と気まずそうにしている。

「織斑先生、しかしこれバレると言いましてもシャルロットの言う通りそこまで酷い事態になるとも思えないんですけど。それならIS学園にいるだけでも秘密にした方がよかつたんじゃ？ あたしもそういう事情があれば、いや例え理由聞かなくとも葵のためなら一夏も筹も協力するのに」

あ、今度は鈴が千冬姉に質問か。

「そうかもな。葵の昔を知つてている生徒は凰に織斑に篠ノ乃の三人だけで、日本政府が本氣で詐称すれば学園在籍時だけでもバレないで過ごせたかもしれない。しかし、さつき述べた理由を聞いて青崎は最初つから話した方が気が楽だし、後で真相知つて自分から離れる人とかを見たくないという理由でやはり最初から全て話す事を決

めたな。それに

そういうつて千冬姉は筈、鈴、俺を見て

「周りから何か言われようと、一夏達が一緒にいてくれたら大丈夫だからと笑顔で言つてたぞ」

と笑みを浮かべながら俺達に言つた。う、そ、それはなんといか照れるな。筈に鈴も同様で少し赤くなつてる。

「それに今では織斑、篠ノ乃、凰以外にもオルコットにデュノアにボーデヴィッヒも事情を知つていっても仲良くしてやからな。結果だけみても良かつただる」

そう言われ俺等は顔を見合つて、笑みを浮かべた。ああ、そうだよな。セシリ亞達も葵の事情聞いても全く嫌悪感なんて抱かなかつたし、葵と友達になつたし。結果的に見たら問題無かつたな。

その後もちょっとした事について千冬姉に俺達が質問していくら、

「ち～ちや～ん、終わつたよ～！」

と束さんの声が聞こえたので、俺達は束さんと葵がいる場所まで戻つて行つた。

「筈ちゃん同様あーちゃんのデータはあらかじめいれてあるし、紅椿以上にスサノオは近接格闘特化型に調整してあるよ。まあ私が調整したんだから不具合なんてあるわけないけどね」

と大きな胸を張つて自信満々に言う束さん。その言葉通りなのか、さつきから葵は手足を動かしてるが、満足そうな表情をしている。

「はい、束さんの言う通り初めて乗っているのにいつも使っている打鉄以上に馴染みがあります」

「ふ、ふ、ふ。量産機とせ違つたのだけよ量産機とせ。じや もの一ひき  
ん、わしそくだかど飛んでみじ」

「せん！」

と返事をした瞬間、スサノオは物凄い勢いで一気に上に飛んで行つた。うわ、なんだこの急加速！一瞬にしてはるか上空まで飛んで行つた葵を、俺達は驚愕の眼差しで見つめる。

「さきほどどの速度、筈の紅椿と同等か?」

「いやラウラ、私よりも早いぞさつさのぼ」

はるか上空まで飛んでいた葵は、しばらく上空を急加速したり急降下したりして性能を確かめている。その動きたるや、先ほど簾が紅椿を動かしている時も凄かつたがそれと比較しても全く見劣りしない。むしろそれ以上に見える。

しばらく上空にいた葵だが、急に凄まじい勢いで地上に降りてきた。地面に激突？と思つたが、葵は寸前でP.I.Cを調整し、地面すれすれで浮いている。…俺なら絶対あの速度だと激突してたな。

「凄いです束さん！想像以上に私が思つた通りに動きます！」

「やつでしょ、やつでしょ。なんせ作ったの私だし」

「設計は全て出雲技研だろ？　お前はその通りに作つただけだろ？」

「ちーちゃん、いやそうだけど私が作ったから不具合無くて事をいいたいんだよ…」

あ、ちょっとこじけただした。千冬姉の言つ通りだけど、なら出雲技研つてそつと「凄い所だな。葵の為に心血注いで開発して…やっぱ自分達の手で完成できなかつたのは無念だつたろつなあ。

そして葵は再び上空に飛んでいき、そこで止まる…ん、動きが止まつたまになつた。何してるんだ?と思つたら、束さんからオープニングチャンネルで葵の声が聞えてきた。

「…あの束さん。武器の性能チエックしようと思つたのですが…今見てみましたら何も入つていないんですけど。スサノオの専用武器天叢雲剣や八尺瓊勾玉はあるが、このスサノオの第三世代特殊兵装八咫鏡もないんですけど?」

は? 何も無い。どうことだらうか? いやスサノオといつも前から予想してたけど、武器の名前も神話からとつてるんだな。

「青崎、一田降りて!」

千冬姉が葵を呼び、葵は再び地面に降りて來た。そして千冬姉にまたさつきと同じ質問をした。

「どうして武器が無いんですか?」

「ああ、そのことなんだが…専用の武器と第三世代兵装は束でなく、出雲技研に再び作つてもうつことにしているからだ。これは日本政府の命令もある」

え? 何で機体は束さんに作らせたのに、武器や第三世代兵装は出雲技研に作らせるんだ?

「私も作つとくよーとちーちゃんに言つたのに止められたんだよね。なんか私が全部作つちゃうと不味いとかなんとか。なんか設計

は確かに出雲技研の皆が作つたけど、私が全部作つたら本当にその性能の全てが出雲技研の設計によるものなのかな？と疑われるからとか

「日本のEHS開発技術を他国にも知らしめるために必要な事だからな。特に第二世代は今各国が死に物狂いで開発を急いでいる。それを束が全て作つてしまつたら本当に日本の開発陣が作ったのか？と疑われても仕方ないだろう。青崎、不便だとは思うがしばらくは我慢してくれ。出雲技研の者達も来月には多くの者が完治し、開発に取りかかる。まあ遅くとも年末には完成するとは言つていた」  
なるほど、確かに束さんが全て作つたらそりや疑うよなあ。

「やつこつ」とですか…、ええ、それなら私も完成するまで待つてます！

と笑顔で答える葵。ま、葵からすれば出雲技研の人達が作つてもらう方が束さんに作つて貰うより嬉しいんかもな。あ、束さん少し不機嫌になつてる。

「しかし織斑先生、武器無くとも戦えますけど領域もつたいないですよ。ならせめてブレードの一本でも欲しいですけど」  
…武器が無くてもいいとか。葵しか言えない台詞だな。

「心配するな。あそこにおいてあるコンテナを開けてこい」  
と言つて千冬姉は、俺達が来た時から置いてある小さなコンテナを指差した。葵はそれに近づき、コンテナ4を開けると…中には一振りの剣が入つてあつた。ん？まさかこれは。

「天叢雲剣じゃないですか！どうしたんですかこれ？」  
と葵は興奮した声を上げ、千冬姉に尋ねた。あ、やつぱりなあ。  
流れからしてそうだと思った。

「あの事件で機体も武器も兵装も壊されたが、その剣だけは奇跡的に無事だった。しばらくはその剣だけだが我慢しろ。青崎からすれば八尺瓈勾玉が無事な方が良かつたかも知れないがな」

「とんでもありません…これで百人力です！」

と言つて天叢雲剣を構え、素振りをする葵。天叢雲剣、見た目は日本刀の太刀みたいだな。一体どんな性能があるんだ？

「今から見せてあげるわよ。じゃあ束さん、もう一回上に上がりますんで箒の時と同じようにお願ひします」

「りょーかいあーちゃん」

再び上空へ飛んでいく葵。そして頃合いを見計らつた束さんが、

「じゃああーちゃん、これでどうかな」

と言つて束さんはまたミサイルを呼びだして…って多ー！ 箕の時の倍はあるぞ！ それを一気に葵に標準を合わせて発射した。迫りくるミサイルの群れを、葵は剣を構え、ミサイルに向かつて振つた。するとその振つた軌道に合わせて青いレーザーが帯状に広がつて行き、ミサイルを切り裂いて行つた。おお、紅椿の空裂と同じだな。しかし

「ふふふ、甘いよあーちゃん」

と言つて束さんはパネルを操作しだした。するといくつかのミサイルは葵の一撃をかわしスサノオに近づいて行つた。それでも大部分は同様に切り裂いて行つてるが、2発ほどもう激突寸前まで近づいて行つた。

「葵！」

思わず叫ぶ俺だが、激突する寸前で葵は後ろ向きのまま一瞬にし

て後退した。え！あればまさか

「後ろ向きのまま瞬時加速だと！」

幕が驚愕して葵を見ている。あ、やはりさつきのは瞬時加速なんだな。そしてミサイルから距離を取った葵は、残りのミサイルもなんなく撃墜させた。

「さすがだねあーちゃん、次はこれかな？」

と言つてまた空中から何かを出す束さん。次に出したのは紅椿やスサノオを格納していたひし形の塊だった。

「じゃああーちゃん！次はこれを斬り裂いて！」

と言つて束さんは葵に向かつて物凄い勢いでそれを飛ばした。葵も剣を構え、それを迎え斬つた。そして…ひし形の塊は見事に二つに割れていた。

「あの一瞬で二つに斬り裂けれるなんて…」

鈴が驚いてるが、それよりも俺は葵が手にしている天叢雲剣に注目した。さっきまでは何ともなかつたのに、今では刀身が青く光っている。

「気付いたか織斑。天叢雲剣はレーザーで敵を切り裂くだけでは無い。そのレーザーのエネルギーを刀身にコーティングすることで攻撃力を上げる事ができる。天叢雲剣の全エネルギーを刀身に乗せる事も出来、その時の一撃ならお前の零落百夜には効るだろうがかなりの威力にはなるだろう。無論全エネルギーを一度にレーザーとして放つ事も出来る。大型レーザー砲並みの威力があるようだがそれは避けられたらお終いだからな、滅多には使わないだろうが」

ありがたい解説ありがとう千冬姉。つてなにそのチート性能。俺の雪片一型より数段凄いんですけど。

「馬鹿者。それでも一撃の威力ならお前の雪片一型の零落百夜の方が上だ。葵のはそれと同等の威力はだせんし、それにお前のは一応連続使用可能だらうが」

いやそつはいいましても千冬姉。馬鹿みたいにエネルギーを消費する零落百夜はそんな頻繁に使えないぢやないですか。

「それはお前がなんとかするんだな」  
「そうですね。

「まゝ性能が良いのは当然だよねえ。だつてあの剣、ほとんどオートクチュールに分類されるよ。スサノオ以外の機体が使つたらレーザーは出せるけど、刀身にコーティングすることは出来ないしね。あ、紅椿ならできるけどね。ただ今の篠ちゃんじゃあのコーティング技術は無理かな。あれ、簡単そうに見えて物凄く調整が難しいから

「へ～そうなんだ。文字通りスサノオ専用武器なんだなあれ。そして箒、さつきの束さんから無理と言われて悔しいのはわかるが、束さんを睨むのはやめてやれ。

「ふむ、何も問題はないようだな。よし、これで篠ノ乃も青崎も専用機の使用に問題が無い事がわかつた。なら早速だが誰か、篠ノ乃と青崎と戦つて貰おうか。そうだな…篠ノ乃にはデュノア、お前が戦え」

「はいー。」

「そして青崎だが…」

辺りを見回す千冬姉、そして俺の方を向くと

「織斑、お前が青崎と戦え」と俺を指名した。

おまけ

「ねえねえちーちゃん」

「何だ東」

「あーちやんのHIBI学園でわざと事情バラした件だけど、あれつ

「いいっくんがE.S学園にいたからしたんだよね。いいっくんいなかつたらちーちゃんもバラさず秘密にしようと思つてたでしょ」

「まあ、あいつには言わなかつた本当の理由の一つはそれだ。一夏がいるからせつと話させた。例え経歴を変え名を変えて入学してもだ、葵が一夏達にも黙つておくのは耐えきれないだろうからな。そうなると必然的に一夏達には正体を明かすだろう。まあいいつらなら秘密を守るのに快く協力するだろうが……問題はその後だ。一夏の性格からして葵と再会したら喜び、そして前と同じように一夏の性格からして葵と再会したら喜び、そして前と同じように一緒にやってつるむだろ。葵もそれを望んでる。だがな、周りからすれば何で最近登校してきたばかりの葵と一夏があんなに仲が良いのか？と疑問に思われるぞ。あいつらからすれば昔と同様に過ごしていると思つてるが、はたからみれば付き合つてゐよつてしか見えんからな」

「…だれがなべ。算けやさか回しゆうじ接あらへと思ひ」

「そうだ。そして筈も昔同様葵と接するだろう。しかしだ、I S 学園で人付き合いが悪い筈が周りから見れば初対面の葵に親しげに話してるように見える。違和感を持たれるのは避けられん。あいつもあいつでお前の妹と言う事で周りから注目されてるからな」

「… 篠ちゃん、やつぱり友達少ないんだね」

「あいつもお前にだけは言われたくないだろうがな。さらにだ、鈴も演義とかそういうのは向いてない。感情を素直に表す奴だからな。おそらく一夏達みたいにして差はないだろう。一夏に、篠、鈴の三人が登校初日からおそらく葵と仲良くしだしたらやつぱりおかしいだ

۱۰۷

「ふうん、そうだよねえ」

「まあ他にもあるがな、真相話させた理由も話しても大丈夫な理由は

## 臨海学校（一）[田田 専用機後編]（後書き）

三種の神器がスサノオ専用武器です。 詳細はまあ今後の話の中に出していきます。

読み返してみたらあまりにも誤字が多くたので少し修正しました。  
うつ、寝不足でハイな状態で書いてたからなあ…。

「お、俺ですか！」

「なんだ織斑、不服なのか？」

「いえそういうわけではないですけど…」

スサノオに乗っている今の葵に、まるで勝てる気がしないなんて言えないな…。いややべえ、マジで勝てる気がしない。今まで葵が乗つてた打鉄なら機動性ではこっちが上だつたけど、スサノオの動きは白式を完全に上回つてゐし。いやおそらく性能上はそんなに差はないんだろうけど…俺には“まだ”あの動きはできない。

「織斑先生、じゃあまずは僕と箒が戦いますね。箒、その紅椿どれほどのものか見せて貰つよ！」

おお、シャルはやる気満々だな。しかもあの目はあの性能を見せられても負けると思つてない感じだな。

「つむシャルロット、今日こそは勝たせて貰つ

箒も自信満々な顔でシャルに宣戦布告。お互い軽く睨みあつと二人は空に飛び

「待て一人とも。お前達は後だ。先に織斑と青崎が戦つて貰つ…飛び立つとしたが、千冬姉に待つたをかけられた。

「何故ですか織斑先生？」

やる気満々な所で待つたをかけられたので、箒は若干責めるような顔して千冬姉に後回しにされた理由を聞いた。

「篠ノ乃、お前はまだ紅椿を少し操縦しただけで他にどのよつな性能があるのか知らないだろうが。青崎は開発時から一緒に関わっているからスサノオがどのような機体か十分理解している。織斑と青崎が戦っている間束から色々と聞いておけ」

「任せて篠ちゃん！お姉ちゃんが紅椿の全てを教えてあげるよ！」

「…お願いします」

「そういうわけだ。織斑と青崎、先に戦え」

と言つて俺と葵を見る千冬姉。

「まあ私は先でも後でもどちらでもいいですけど」

葵は天叢雲剣を肩に担ぎ笑いながら俺の方を向いた。

「じゃあ一夏、私のスサノオデビュー戦初勝利の為に華々しく散つてね」

笑顔で言う葵。初めて模擬選した時にも見せた俺に負けるはずがないという顔をしている。

……「うん、あれだ。意地でも勝つてやる！」

「青崎、今回はスサノオの性能と同時に天叢雲剣の性能もチェックしたい。だからなるだけ剣で戦え。素手で倒すのは最後にしり」

「わかつてますよ織斑先生。天叢雲剣の性能を限界まで引き出して見せます」

…「武器を使う事がハンデ扱いかよ。それと千冬姉、何俺が負ける前提で話してくるんだよ！」

「ねえ一夏と葵、どっちが勝つか賭けない？あたしは葵に賭けるけ

ど」「でわわたくしも」

「私もだ」「嫁が勝つとは思えないから葵だな」「…みんな葵に賭けたら負けにならないよ」「じゃあシャルロット、あんた一夏に賭ければ?」「…僕も葵で」

お前ら～～～！なんだよなんだよみんなして！誰も俺が勝つなんて思わないのかよ！最初勝てる気がしないと思つたが、それでももうこいつはなつたら意地でも葵に勝つてやる！」

「じゃあ一夏、始めようか」

そういうて先に上空へ飛んでいく葵。俺も葵に続き上空へ飛んで行つた。ある程度上空まで行つたら互い適度な距離を開けて対峙。そしてそれを見届けた千冬姉が

「では始める！」

と叫び、それが戦いの合図となつた。

合図と同時に葵は天叢雲剣を構え俺に向かつてきた。その速度、今まで葵が乗つていった打鉄とは比べ物にならないほど速い！しかし俺も雪片を構え、葵に突撃する。どうせ俺の攻撃手段はこれしかないんだ。相手がこつちに向かつて来るならむしろ好都合。俺も真っ直ぐ葵に向かつて突撃するが、葵は天叢雲剣を俺に向かつて一閃。すると弧を描く縦薙ぎの青いレーザーが俺に向かつてきた。

「あぶねつ！」

体を捻じり何とかそれを避けた俺だが、体勢が大きく崩れてしまつた。そこに葵はまた天叢雲剣を振るい、今度は横薙ぎのレーザーを出し俺に攻撃。しかし、

「甘いぜ！」

今度は余裕を持つて俺はかわした。その後幾度か葵は天叢雲剣を振るい俺にレーザーを浴びせるが、俺は全てかわしていった。

最初の攻撃の時は天叢雲剣の性能を忘れてたから慌てたが、落ち着いて対処すればなんてことは無い。なんせ剣を振らないとレーザーが出ないのだから。しかも直線にしか来ないから楽にかわす事が出来る。砲身が無い鈴の衝撃砲の方がよっぽどかわしにくいつてもんだ。

「ふうん、やつぱりこの攻撃方法は遠距離専門でやるには向いてないかな」

葵はそう言って天叢雲剣を振るうのをやめた。

「じゃあ、次はこれかな」

その瞬間、天叢雲剣の刀身が青く発光した。天叢雲剣のもう一つの性能、レーザー・エネルギーの刀身コーティング。そうすることで攻撃力を高め、相手を切り裂く。

青く光る天叢雲剣を葵は構え、俺にまた突撃してきた。俺も雪片を握りしめ、葵に突撃。俺と葵との距離が後数メートルといった所で、葵は俺に向かつて剣を突き出した。その瞬間、刀身をコーティングしていたエネルギーが俺に向かつて発射された。

「嘘！」

かわしきれず着弾、衝撃が俺を襲った。この衝撃とエネルギーの減り具合から見てセシリ亞のビットの一撃よりは弱い。つてその剣別に振るわなくともレーザー出るのかよ！

「誰も剣を振るわなければレーザーが出ないなんて言つてないわよ！」

ヤバい！さっきの一撃に気を取られている間にすでに葵は俺との距離を詰めていた。天叢雲剣も再び青く光っている。慌てて俺も雪片を構えるも

「遅い！」

葵の攻撃に間に合わず、葵は俺の胸に一閃。後方に吹き飛ぶ俺に葵は『瞬時加速』を使い一瞬にしてまた距離を詰め、ガラ空きの俺の頭に強烈な一撃を与えた。俺は勢いよく海に突き落とされてしまった。

かなりの深さまで沈んだが、水中で体勢を立て直し上昇。そして海面から出ると、空で待っていた葵は俺に向かつてまた天叢雲剣を振るつて俺に追い撃ち。慌てて俺はかわした。くそ、容赦ねえなこいつ！

再び上空まで飛び、葵と対峙する。現状確認のためエネルギーを確認してみたが…さつきの攻撃だけすでに4分の1減らされている。ただ剣で打たれるだけじゃここまでは減らないのに。

「ふんふん、どうやらこれは効いたみたいね」

満足げに天叢雲剣を眺める葵。その刀身は先程同様青く光つている。そしてその切つ先を俺に突き出して葵は俺に向かつて叫んだ。

「一夏！まだまだ準備体操の段階だからね、本番はこれからだから！」

……俺はすでに本番のつもりなんだがな。葵からすればまだなのかな。

葵はまた剣を構え、俺に向かつて突撃してきた。俺は向かえ撃とうした瞬間

「それまでだ！織斑！青崎！すぐにこちらに戻つてこい！」

千冬姉の叫び声がオープニングチャンネルから響き、模擬戦は中断された。

俺と葵が千冬姉の所まで戻ると、そこにはさつきまで居なかつた山田先生がおり、千冬姉と難しい顔して何やら話をしていた。

「鈴、なにがあつたの？」

「あたしも知らないわよ。あんたたちが戦つてたら急に山田先生が血相変えてここに向かつてきて織斑先生に小型端末見せて何か話したと思つたら、織斑先生あんたたちの模擬戦を急に中止にしたんだから」

どうやら鈴達も何かあつたのか知らないようだ。とりあえず俺も葵も鈴達と一緒に千冬姉と山田先生を見ていたら、千冬姉は俺達の方を向き、叫んだ。

「全員注目！予定していたIS装備のデータ取りは中断！これよりIS学園は特殊任務行動に移る！そしてお前達にもその任務についてもりつけ！」

旅館の一番奥の宴会用大広間に、教師陣と俺達専用機組が集められた。俺達の一番前に千冬姉はたつており、空中ディスプレイを使い俺達に現状を説明している。

千冬姉の説明によると、アメリカとイスラエルが共同で開発していた第三世代型軍用IS銀の福音が暴走監視区域より離脱。

その後衛星からの追跡の結果、その福音がここから2キロ先の空

域を通過する事を確認。時間にして五十分後。そして千冬姉から、この件は俺達だけで対処しなければいけないことがわかつた。

「ここまで聞いて俺は他のメンバーの様子を見てみたが、教師陣は無論の事俺と竇以外の代表候補生組は厳しい顔で千冬姉の説明を聞いている。特にラウラと葵は真剣な表情を浮かべている。

その後千冬姉から目標 IIS の詳細データが送られ、様々な議論がされるも目標 IIS は超音速飛行を続けているため攻撃する機会は一度しかないらしい。つまり、

「その一度の機会を俺の零落白夜の一撃で倒すってわけか…」

「話が早くて助かる。無論これは訓練では無い。嫌なら無理強いはせんが…どうする?」

そんなもの決まっている。

「いや、俺がやらなかつたら多くの人が危険な目にあうかもしけないんだろう…ならやります!」

「よし、なら具体的な作戦に移るぞ! 織斑の機体のエネルギーは全て攻撃に使うため、織斑をそこまで運ぶ役が必要になる。そこ」

「織斑先生! それでしたらちよつと日本から強襲用高機動パッケージと超高感度ハイパー・センサーが送られてきたこのわたくしに任せてくれませんか!」

「オルコギト、それはもうインストールされているのか?」

「いえ、まだですが…」

「今からですと、間に合つかはギリギリですね。では早速

「田先生がセシリアのパッケージのインストール作業を指示しうとした瞬間、

「ちょっと待つた～～～！」

と束さんの声が響いた。つてなんで天井から首出してるんですか束さん。

「束、まあちようじい。お前に頼みたいことがあったからな」

「んーちーちゃんが私に頼み事！うんうん、勿論OKだよ。ちーちゃんの頼みなら無条件でOKだよ！でもその前に、私が良い案があるよー！」

その後束さんからこの作戦には断然紅椿を使用することを勧められた。第四世代の紅椿はパッケージ換装を必要としない万能型で、全身展開装甲とやらでできているため束さんが少し調整すれば数分で高機動型I-Sになるとの事。

「ふ、ふ、ふ。篠ちゃんの紅椿を使えばこんな作戦余裕だね！」  
胸を張つて言つ束さん。うーん、でも

「あの～束さん。しかし篠はまだ紅椿に乗つてまだ一回も戦つていなんですよ。それなのに初めての実戦つてのは…。一夏が万が一失敗した場合ちょっと」

葵が不安そうな顔をして束さんに言つた。そう、今日初めて紅椿に乗つた篠はまだ一回も戦闘を行つていない。模擬戦もこの件で流れてるし、初めての実戦で一回もまだ戦つてないのはなあ。

「安心しろ葵。私は立派に果たしてみせるー。」

自信満々な顔をして葵に言つ篠。いやお前のその自信はどうから出てるんだよ…。

「うへん、でも」

まだ何か言おうとしている葵に、

「大丈夫大丈夫。だつて篠ちゃんといつくんはあ～ちゃんが守つてくれるから」

とあっけらかんと東さんは葵の方を向いて言った。

なんかよしやへじまでもたなあと思っています。

「は？…あの束さん、今なんて言いましたか？」

「いやだからあーちゃん、篠ちゃんにいつも心配ならあーちゃんが一緒に行つて守つてあげれば何の問題もないでしょ」

困惑する葵にさも当たり前のようになつて千冬が口を開く。「その言葉に千冬姉も頷き、

「青崎、お前にもこの作戦に参加してもいい。幸いな事に強襲用高機動パッケージは今日お前に試験運用してもらつたため用意してあつたからな。これをつけてお前も作戦に参加してもらつ。そしてお前が目標IISと交戦し、織斑のために足止めをする」

「ちーちゃん、私に頼みつてあーちゃんの機体に強襲用高機動パッケージを取りつけて欲しいって事でしょ？私でなきや作戦まで間に合わないから。ま、あーちゃんだからやつてあげるけどね。これが他の連中ならちーちゃんの頼みでも嫌だけど」

…つい先程千冬姉の頼みなら無条件でOKとか言いましたか？…か束さん。いやまあこういう事は例外つて事なんだろうナゾ。

「そうだ。この作戦失敗は許されん。しかし作戦の要の一人が少々心許ない。織斑が確実に目標を撃破するためにも目標を足止めする役が必要だ。篠ノ乃是青崎が言つたようにまだ試運転しかやつて無い上、単独飛行ならともかく織斑を運ぶ事でかなりのエネルギーを消耗してしまつ。戦闘する余裕はないだろ？」

千冬姉の言葉を聞き「それくらい私一人でも出来る…」と俺の横でボソッと言つた。だから、その自信は本当にどこから出てきたるんだよ。もしかして篠、専用機貰えて少し浮かれている？

せりに千冬姉が何か言おうとしたら、急にセシリアが立ちあがつた。

「ちょっとー少しお待ちになつてください織斑先生ー葵さんも作戦に参加されるのならわたくしもお願ひします！」

今回の作戦に自信満々に参加しようとしたのに束さんの登場ですっかり忘れられていたセシリアが、千冬姉に抗議した。が、

「却下だオルコット。さつきも言つたがお前のブルーティアーズにはまだこの作戦に必要なパッケージはインストールされてないだろう。いまからやっても作戦に間に合ひかわからん。ちなみに束に頼むとするなよ」

「さつきも言つたけど篠ちやん達以外の機体はお断りだからね」束さんは笑顔でセシリアに向かつて言つた。笑顔で拒絶されセシリアは怯むも、

「し、しかしそれでもやつてみないとわからないではないですか！それに足止めする人は何人いても」

「以前も言つたがオルコット。お前の機体は多対一ではむしろ邪魔だ」

「あ、あれから訓練は重ねました！」

「悪いがお前のその成果を私は知らん。オルコット、今回はお前は待機だ。それ以上何か言つなら命令する」

「…………」

千冬姉から散々言われたセシリアは目に涙を浮かべるも、それ以

上は何も言わずその場に座り込んだ。鈴、シャル、ラウラが複雑な表情を浮かべながら千冬姉とセシリ亞も見つめている。

しかし千冬姉、さつきからセシリ亞に厳しい事言つてゐるけど…なんか違和感を感じる。言つてゐる事は正しいんだりつけど…なんからしくないな。

「さらに相手は暴走状態のＩＳだ。そんな相手に足止め出来る技量を持つのはこの場では青崎しかいない。青崎、そういうわけだ。さっきも言つたがお前は福音と接触したら交戦。織斑が零落白夜で撃ち込める状況まで持つて行け。お前は日本の代表候補生だ。ならこの任務必ず遂行してこい」

あれ？俺の時と違い葵には命令なんだ。しかもあの日、その口調、拒否権は一切認めないと言つてゐる。そんな千冬姉に葵は力強い笑みを浮かべ、

「任せてください織斑先生。必ず一夏と籌を守り任務を遂行させてみせます！」

力強く返事をした。その時の葵の目を見て、俺は少し驚いた。なんて表現したらよくわからないのだが…ただすごく大人びて見えた。葵の顔を見て覚悟を悟つた千冬姉は、今度は籌に向かつた。

「篠ノ乃、先程から束がお前を作戦に組み込むことを推薦してゐるがお前自身はどうなのだ。はつきり言うが危険が多い任務だ。嫌なら断つていいぞ」

筹には俺と同様参加の意思を問う千冬姉。…まあさつきからの反応から考るとなあ。筹は葵を見て、次に俺を見ると

「任せてください織斑先生！その任務承ります！」  
と返事をした。

「よしーならばすぐ行動を起こすぞー束！」

「うんまかせてちーちゃん！ 篠ちゃんとあーちゃん、すぐに紅椿とスサノオの調整に行くよ。ちーちゃん、すぐそばの砂浜で調整行つからスサノオにつけるパッケージ持つてきてね」

と言つて束さんは葵と篠を連れてこの場から立ち去つた。この場を出る際、篠はやる気をみなぎらせながら出ていつたが、葵は複雑な顔をしながら千冬姉とセシリアをちらりと見たが特に何も言わなかつた。教師陣もそれぞれの任務の為部屋を後にしていき、千冬姉も山田先生に何か指示を出しながら部屋を出ていった。こつしてこの場に残つたのは俺、セシリア、鈴、ラウラ、シャルだけとなつた。

「…納得いきませんわ」

セシリアは座り床を見ながら震える声で呟いた。

「セシリア、しうがないよ。セシリアのパッケージは作戦までにインストール出来るかは織斑先生の言つ通りわからないんだし」  
シャルがセシリアを励まそうとするも、

「ですナビー、やつてみないとわかりませんのにー！ それにー」

「諦めるセシリア。今回初めから教官はこの作戦は一夏と葵に任せるつもりだつたからな。」

不満を言おうとするセシリアに、ラウラが苦汁を滲ませた顔で言った。

「え？ ラウラ、それどうこう事よ」

「いや正確には教官の意思ではない。おそらく日本政府の意思だろ

う。出来うる限り日本の戦力で今回の任務を遂行するよつ命じられたんだが」「え、どうこいつだよそれ。

「おそらく日本政府としては今回の件で日本の優位性を高めたいのだろう。今回の事件は機密扱いになるが、それでも各国の上層部は知ることとなる。その任務を日本の機体だけで解決出来れば、各国に対する日本のISの性能の宣伝にもなる。そして教育はこの命令に絶対逆らえない。：それは」

そこで口をつぐむラウラ。しかし鈴、セシリ亞、シャルもラウラが何を言おうしたのか理解しているようだ。：俺もラウラが何を言おうとしたのかは理解している。

ISの世界大会で、二連覇を確実視されていた千冬姉は誘拐された俺を助けるため第一回モンドグロッソ大会決勝戦を棄権した。そして、そのせいで千冬姉は日本中から非難される事となつた。第一回大会の優勝者が何も言わず棄権した為、当時の日本の面子は丸潰れとなつた。

……その負い目があるから、千冬姉は今回政府の命令に従うしかないのか。

「ラウラさん、言いたい事はわかります。わたくしだつてラウラさんに言われなくても、薄々わかつてはいました。ただわたくしは」

「一夏と篝と葵が心配だから、でしょセシリ亞」

笑みを浮かべ言うシャル。シャルの言葉を聞き、セシリ亞の顔は赤くなつた。

「一夏と篝はISに乗つてまだ三ヶ月で、篝に至つては今日初めて専用機を与えられてまだ試運転程度しか操縦していない。葵は代表

候補生でヨウの腕は申し分ないけど、それでも専用機を今日初めて乗っている。不安に思うのはわかるよ」

「そしてセシリア、あんたいつも思つてるんでしょ。平民を守るのも貴族としての自分の務めだとなんとか。軍人として訓練された葵はともかく、一夏と篠には危ない任務は私がやりますみたいなま、この作戦一夏がいなければ成立しないから一夏はしじうがないけど」

シャルと鈴の台詞を聞き、さらに顔を赤くするセシリア。「う〜〜」と言いながら指で床をなぞつている。

「セシリア、気持ちはわかるが」これは一夏と篠と葵を信じようではないか。セシリア、それにこう言つてはなんだが一夏も葵も篠もお前が思つてる程弱くないぞ。特に葵は」

そこは俺の名前も言つてほしかつたが、ラウラの言つ通りだ。

「大丈夫だセシリア。俺も葵も篠も無事に任務を達成して戻るから心配するな」

俺はセシリアにそう言つと、セシリアも納得したのか笑みを浮かべた

「そうですね、なら一夏さん今回の作戦ですが」

「あ、そうそう一夏あんた高速戦闘がどんなものか知らないわよね。簡単だけ教えてあげるわ」

「ちょっと鈴さん！それはわたくしが」

「一夏、高速戦闘だと周りの風景が」

「ブースト残量にも気を付ける。いつもの調子で」

「シャルロットさんにラウラさんまでーその役目はわたくしですのに〜！」

とまあ、葵と篠の調整が終わるまで、俺はセシリ亞達から高速戦闘の説明を受ける事にした

時刻は午前11時、作戦時刻となつた。紅椿もスサノオも調整とパッケージインストールが完了し、今三人で千冬姉の出撃命令を待つていて。

「もうすぐね。一夏、篠、緊張している?」

「大丈夫だ葵、私は問題無い」

「俺もだ。そういう葵は?」

「私は大丈夫」

と言つてにっこり笑う葵。まあ葵にはああいつたが、俺は少し緊張している。やっぱ今までと違いこれは寒戦なんだ。今までと違い楽観視することはできない。

「一夏、一夏。聞こえるか?」

少し物思いに耽つていたら、葵がプライベートチャネルで俺に話しかけてきた。ん? なんでわざわざこれで? 直接言えばいいのに。

「ああそりゃ一夏はこれ苦手だつたか。ならいいや、返事はいい。俺の話を聞くだけでいい。篠の事だ」

「なんというか、篠の奴少し浮かれている。専用機を持たされ、多分重要な作戦を任されて嬉しいのだろうけど…あまりいい傾向じゃない。何かあつた時は一夏、サポートを頼む。俺は福音相手にそんな余裕はないだろうから」

葵の言葉は、会議の時から俺が思っていた事だった。確かに今の篠は少し浮かれている。

なら…何かあつた時は俺がちゃんとサポートしないとな。しかし葵、プライベートチャネルとはいえ、最近じゃ自室以外では一人きりでも女口調だつたのに口調が男だつたつてことは…葵も実は緊張しているのか？

そしてその後少し時間が経った後、

「では、はじめ！」

千冬姉の号令とともに、作戦は開始された。

まあ、今後の展開はかなり予想されやすいでしょ。うわ。

## 臨海学校（一二四日目　敗戦）（前書き）

三人称に挑戦してみました。  
一人称と違いなんか書きづらいですね。未熟だなあと思います。

千冬の開始の合図と共に、一夏を背に乗せ展開装甲された紅椿と、強襲用高機動パッケージ飛燕をインストールされたスサノオは飛び立つた。一気に目標到達高度まで上昇した紅椿とスサノオは、千冬から送られてくる情報を照合し、目標の現在位置を確認。目標ISに向かい再び飛翔して行つた。

（…なんてスピードだ。常時瞬時移動並だろこれ）

紅椿の背に乗りながら、一夏は紅椿の性能に驚いていた。横に目をやると増設されたスラスターを噴射しながらスサノオが紅椿と並びながら飛んでいる。しかしスサノオは単騎で飛んでいるのに、紅椿は白式という荷物を運んでいるのにも関わらず同等かもしくはそれ以上の速度で飛んでいる。その事実に一夏はただ束の技術力に関心した。

（さすが紅椿、束さんが作つた機体。スサノオよりも遙かに性能が高い）

紅椿の横で並んでいる葵も、一夏同様にその規格外な性能に感心していた。自身の乗つているスサノオも最高の機体だとは認識しているが、さすがにISの生みの親である束が作ったISはそれ以上であった。確かにこれなら束が作戦に加える事を勧めるのも納得できると葵は思った。しかし、

（…いや大丈夫だろう）

一抹の気がかりが葵の頭によぎるが、葵は気にしない事にして飛行に集中することにした。そしてその直後、

「見えたぞ、一夏、葵！あれが目標だ」とハイパー・センサーで目標を確認した筈の叫びが響いた。

目標のIIS銀の福音は、頭部から足先まで全て装甲で覆われていて、その名の通り全身が銀色となつており、頭部から一对の巨大な翼が生えている。この翼が福音の推進力を司るスラスターでもあり、砲撃を行う場所でもある。福音はデータ通り超音速飛行で移動しており、真っ直ぐ一夏達に向かつて飛んできている。

(さて、どう対処しようかな。とりあえず俺が突撃して)と葵が思案していると、いきなり福音は平行に飛んでいたの方に向転換し上昇し始めた。

「な、何だ一体！」

「気付かれたのか！？」

筈と一夏は急な福音の行動に驚き、そしてその直後

「敵機確認。警戒レベルCと判断、迎撃モードに移行します」

オープンチャレンネルから響く福音からの機械的な音声を聞き、顔を強張らせる。一夏達よりも高い高度に移動した福音は頭部に生えている翼を広げ、それを見た葵は叫んだ。

「来る！一夏、筈、気を付けて！」

その直後、福音は広げた翼から無数の光弾を発射させ、一夏達に攻撃を開始した。全方位にわたる福音からの光弾は雨のように降りしそぎ、一夏達に襲いかかった。それを一夏、筈、葵は散開してそれぞれ攻撃をかわしていく。葵はなんとか全弾回避できたが、一夏と筈はかわしきれず2・3発着弾。光弾は触れた直後に爆発した。

しかしこまだ2機とも深刻なダメージにはなっておらず、それを確認した葵は安堵した。

「物凄い数の光弾だつたわね、なかなかやつかいな機体ね福音は「のんきな事言つてないでどうするのだ葵。あの光弾の両ではうかつには近寄る事も出来ないぞ」

「どうするもなにも、作戦に変更は無し。私がこれから福音と戦つて動き止めて、一夏が零落白夜で止めを刺す」

「しかし葵、一人で大丈夫なのか？俺も」

「駄目。一夏も戦つて肝心な時に零落白夜が使えなくなつたら田も当てられない。それと第も一夏と一緒に待機。エネルギーもう少ないんだから無理せず防御に集中しどきなさい」

「だが」

第はそれでも一緒に戦おうとするが、

「いいから一人とも、幼馴染の私を信じなさい」

と葵は笑顔で一夏と第に言つて、一夏と第を残し福音に向かって行つた。

「敵機A、接近。警戒レベルBと判断。目標を迎撃します」  
福音はこちらに向かってくるスサノオを確認すると、再び翼を広げる。翼に備え付けられている36の砲門を全てスサノオに照準を合わし、発射。しかし

「はあ――――！」

雄叫びを上げながら葵は向かってくる光弾を紙一重でかわしていく。そしてかわしながらも天叢雲剣を振るい、弧を描くレーザーを福音に浴びさせていく。しかし福音は難なくかわしました翼から光弾を発射。葵もそれをさけ、合間にまた剣を振るいレーザーを浴びせる。

両者互いに交戦にかわしながらも遠距離で攻撃する展開がしばらく続く事となつた。攻撃回数では圧倒的に葵は福音に負けているが、光弾をかわしながら葵は勝利を確信した。

（いける！確かにあの翼から降り注ぐ光弾の数はやっかいだが、それでもセシリ亞達みたいに正確な射撃精度を持つていない。それにスサノオの機体にも慣れだし）

一夏との戦闘だけではまだスサノオの機体を完全に把握できていなかつたが、福音と交戦している間に葵はスサノオの機体を完全に乗りこなすようになった。そして現在エネルギー節約の為、福音の攻撃を牽制するために天叢雲剣で攻撃するのを止め、完全に回避に集中するようになつてている。しかし、じわりじわりと葵は福音との距離を光弾をかわしながらつめでいつている。

（後少しで瞬時加速で間合いを一氣につめる）

福音を見つめ、葵はその後どう一夏まで繋げようか思案しながら回避を続けていく。

しかし、一夏と篠の二人が今の自分を見てどう思つてゐるかまで  
は考えてはいなかつた。

「葵の奴任せなさいとか言つていたが…防戦一方じやないか！」

「しかも先程から天叢雲剣を振るつてもいない。完全に押されて  
いる。このままでは不味い！」

福音の攻撃パターンを理解し、少しでもエネルギーを温存するた  
め回避に専念した葵を、一人は押されていると勘違ひしてしまつた。  
これが待機を命じられてゐる代表候補生たちなら、よく観察すれば  
葵が少しずつ福音に近づいていつてゐる事に気付いただろう。しか  
し初めての実戦で葵を心配している一人にはそこまで気付く事が出  
来なかつた。

今二人には、福音の攻撃から逃げ回つてゐる葵としか書つていな  
かつた。しかし

(あいつが言つたんだ、私を信じなさいって。なら)

焦燥に駆られながらも、一夏は葵の戦いを見つめていった。

(あと少し)

福音の攻撃をかわしながら、葵は瞬時移動を行うタイミングを図っていた。もはや瞬時移動すれば懐まで行ける間合いで葵は福音との距離を詰めており、そろそろ勝負を決めないと決めていた。

(予想より回避に時間掛け過ぎたし、そろそろ決めないと)  
そう思っていた時、福音の砲門が全て撃ち尽くし、再度照準を合わせようとした瞬間、

「いいだ！」

瞬時加速を行い、一気に葵は福音との距離を詰めていった。福音は葵の瞬時加速に対応できずにいる。そのまま福音の正面に現れた葵は両手で握っている天叢雲剣の刀身にエネルギーをコーティング。

(まずは機動力を奪う…)

光輝く天叢雲剣を手に、狙いは福音の頭部から生えている右側の翼。これを落とせば福音の機動力は大幅に減退できる為、まずは片側を両断せんと剣を振りあらそつとした。しかし

「え？」

振りおろそうとした葵に、横から赤いレーザー群が福音とスサノオを攻撃していった。予想外の攻撃に回避出来ず直撃。衝撃で吹き飛ぶ葵がレーザーが来た方角を見ると、そこには愕然とした表情を浮かべた筈と一夏がいた。

(「Jのままでは危ない！」)

葵が瞬時加速を行う前、篝は苦戦している（と篝は思っている）  
葵に加勢しようと、福音に向かつて突撃していった。

「篝！ 待て！ 勝手に動くな！」

後ろから一夏が篝に向かつて制止の声を掛けるも、篝は無視した。

「ああ、くそ！」

すぐさま一夏も篝の後を追つた。しかし展開装甲で出力が上がつ  
ている紅椿には到底追いつくことが出来ない。さらに出力を上げて  
追いかける一夏だが、その前に篝は行動を起こした。篝は腕部展開  
装甲を開き、さらに両手に持つ空割と雨月を県政の為振るい攻撃。  
雨月からは無数のレーザーの弾丸が、空割からでるレーザーの斬撃  
が発射される。さらにそれを補うように展開された腕部からもエネ  
ルギー刃が自動で発射され、福音に迫る。しかし、

「な！」

紅椿の攻撃が福音に届く瞬間、福音の前に瞬時加速を行つた葵が  
現れた。そして、篝の攻撃は福音と　　スサノオに着弾した。

篝は自分の攻撃を受け吹き飛んでいく葵を愕然とした顔で凝視する。

「葵！」

一夏の叫びがオープンチャネルを通し篝にも聞えるが、篝は葵を  
攻撃してしまつたという事実に混乱し、激しく動搖していた。茫然  
と佇んでいる篝に、葵よりも早く体勢を整えた福音は、自分を攻撃  
した機体を脅威と判断した。

「敵機B、確認。警戒レベルBと判断。目標を迎撃します」

オープンチャネルから流れてくる福音の声を聞き、嫌な予感をする一夏。そしてその予感通り、葵を攻撃してしまった事に動搖している筈に、福音は恐るべき速度で筈に接近しその速度のまま強力な蹴りを筈に叩きこんだ。

「がはっ！」

未だ動搖していた筈はそれを回避できず、後方へ吹き飛ばされいく。そして吹き飛んでいく筈に福音は全ての砲門を合わせ、一斉射撃を行つた。

（何かあつた時は一夏、サポートを頼む）

出撃前に葵から言われた事を思い出した一夏は、瞬時加速と零落白夜、その二つを最大出力で行い筈にまで到達。筈を担ぎ、また瞬時加速を行い高速離脱。そのすぐ後に福音の光弾は降り注いでいた。離脱する一人にさらに攻撃しようとした福音だが、

「お前の相手は私でしょうが！」

遅れて体勢を立て直した葵が一夏達に気を取られている福音の背後に現れ、福音は背中から最大稼働で刀身にエネルギーが込められた天叢雲剣の一撃を受け、爆音と衝撃と共に吹き飛んで行つた。それを見届けた葵は、オープンチャネルで一夏と筈に向かつて叫んだ。

「一夏、筈！ 残りシールドエネルギーは後どれほど残っている！」

葵の尋常で無い叫びを聞き、慌てて確認をする一夏と筈だがそこに出されている数値を見て絶句。筈は福音に対して行つた攻撃と福音の強烈な蹴りのせいで、一夏は先程筈を助ける為に使つた零落白夜と瞬時加速のせいでもう一人ともエネルギー切れ寸前とまでになつていた。二人の顔を見ただけで現状を把握した葵は、

「作戦は失敗！私が時間稼ぐから一夏と簫はすぐにでもこの場から離脱！」

一人に撤退命令を出した。

「で、でも葵！一人じゃ」

「頼むから行つて！でないと」

渋る一夏に葵が何か叫ぼうとしたが、それよりも早く葵の一撃から復活した福音がこちらに向かつて近づいて来た。

「ちっ！もつ来た！」

葵は天叢雲剣を構え、福音に向かつて行つた。しかし葵の頭の中は焦燥で埋め尽くされていた。

（ヤバいやばいやばい！これはヤバいまジで…さつきの一人の表情からもうエネルギーは無いのは明白。そしてこっちもさつきの簫の一撃。瞬時加速が終えた頃とはいえあの加速時に攻撃受けてしまつたせいでアーマーブレイク寸前までいつてしまつた。こっちもかなり残りエネルギーが少ない！）

もはや福音と戦闘できる状態では無くなつてゐるが、それでも一夏と簫が逃げるまでは福音を引き留めようと葵は決意した。しかし福音はそんな彼女の決意をあざ笑つかのように、高速飛行のまま葵に近づいて来たのを急旋回し、一夏と簫に向かつて飛んで行つた。

「な！まさか先に一人を！」

葵の叫びを肯定するかのように、福音は高速移動しながら一夏達に光弾を浴びせていった。慌てて回避する一人だがかわし切れず互いに数発着弾する。その瞬間二人のエネルギーは空となつた。

その一人を見据え福音は上空にて停止。そして翼を広げ、一夏達に照準を合わせた。葵を倒すよりも先に、この二機を撃墜させよう

と福音は判断したのだ。

一夏と篠も福音がこちらを狙っている事に気付いたが、エネルギーが残っていない白式と紅椿は動いてくれない。鈍重な動きしかしなくなつた二機に対し、福音は翼を開き、一斉射撃を行つた。

「くそ…………！」

降り注ぐ光弾を目にしながら、一夏は死を覚悟した。しかしその目の前に、

「一夏！ 篠！」

瞬時加速を行つて、寸での所で葵は福音の光弾と一夏達がいる間に到達した。そして光弾がこちらに来る前に葵は天叢雲剣の残りエネルギー全てを刀身に込めて福音に向かつて投擲。その後は一夏達を守るように抱きしめた。その直後、福音の攻撃と葵が投擲した天叢雲剣は同時に互いに着弾。大爆発が起きた。

「…………！」

もはやここに来るために全てのエネルギーを使つてしまつたスサノオに、容赦なく光弾は振り注いでいた。シールドエネルギーで相殺できなくなつた衝撃が、容赦なく葵に命中。装甲は砕け、髪は焼かれ皮膚も筋肉も炎に包まれ抉られても、葵は一夏と篠を放さず庇い続けた。

「「葵！ 葵！」」

一夏と篠が叫び続けるが、葵は激痛に苛まれながらも一人が無事なのを確認すると

「言つたでしょ。一人は守るつて」

とつと笑つた。そして爆発と共に二機は海に墜落した。

葵が投げた天叢雲剣は正確に福音の顔に当たり、その後刀身に込められていたエネルギーがそのまま解放され爆発した。しかしそれだけでは福音に対してさしたるダメージにはならなかつたが、光弾を止める事には成功していた。反撃を受け攻撃を止めた福音だが、目標が三機とも海に落ちた事を確認すると、展開した翼をたたんだ。

「敵機A、B及びCの撃墜を確認。警戒を解除」「そして福音は再びどこかへと飛んで行つた。

一夏達が福音に撃墜されてすぐに、千冬は救助船を大至急向かわせた。しかしその前に

「わたくしが先にいきます！」

とセシリ亞が飛び立つた。セシリ亞はあの後も何かあつた時はと思い、強襲用機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を千冬に黙つてインストール作業を行つていた。必要は無いと思いましたが、万が一を思い整備に精通しているクラスメイトに頼んでやつてもらつたのだ。

(まさか本音さんが整備に詳しいとは予想外でしたが……やつてよ  
かつたですわ！一夏さん！葵さん！簫さん！今行きますわ！)  
セシリアは最大加速で一夏達が墜落した場所に飛んでいき、そし  
て海面に浮いている一夏達を発見。すぐさま急行し、近くに降り立  
つた。そしてそこでセシリアが見たのは、

「葵！葵！頼むから目を開けてくれ！葵！」

と泣き叫ぶ一夏と簫だった。そして二人が抱えている葵を見て、  
セシリアは絶句した。

何故なら一人が抱えてる葵の周りの海面が血で真っ赤になつて  
おり、髪も半分以上焼けただれて真っ白になつた表情は、どう見て  
も死んでいるようにしか見えなかつたからだ。

錯乱状態の一人と葵を強引にセシリアは回収し、救助船まで大至  
急運び医師に葵を預けた。医師は葵の容体を見て顔を強張らせるが、  
急いで治療を開始した。このときまだ錯乱し取り乱していた一夏と  
簫を、別の医師達が薬を嗅がせ眠らせた。

「辛いでしょ？今はもう眠っていて下さい」

こうして一夏、葵、簫の初めての実戦は最悪な結果のまま終わつ  
た。

## 臨海学校（一四四）敗戦（後書き）

なんか芸が無いですが、葵が一人を庇つて重傷を負いました。  
次で一夏達の福音退治が始まります。

：しかしあれですね。本当に葵はろくな目にあつてないな

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7555v/>

IS～女の子になった幼馴染

2011年11月23日06時26分発行